

第3章 生活困窮の状況

1. 生活困難

(1)八王子市の生活困難層

八王子市における生活困難度の割合を、図表 3-1-1 に集計した。小学 5 年生においては、判別不可を含めた総数の割合で見ると、困窮層は 3.8%、周辺層は 8.1%、一般層は 66.4%、不明 21.8%となっている。中学 2 年生では、困窮層は 5.1%、周辺層は 9.0%、一般層は 65.4%、判別不可が 20.5%である。前回調査と比べると、小学 5 年生、中学 2 年生ともに、生活困難層が少ない。

図表 3-1-1 生活困難層の割合

	小学 5 年生		中学 2 年生	
	全数に対する割合(%)	判別不可を除いた割合(%)	全数に対する割合(%)	判別不可を除いた割合(%)
生活困難層	11.9%	15.1%	14.1%	17.8%
困窮層	3.8%	4.8%	5.1%	6.4%
周辺層	8.1%	10.3%	9.0%	11.4%
一般層	66.4%	84.9%	65.4%	82.3%
判別不可	21.8%		20.5%	

図表 3-1-2 生活困難度(小学 5 年生、中学 2 年生)：八王子市(R4、H29)

	小学 5 年生(***)		中学 2 年生(***)	
	R4	H29	R4	H29
困窮層	4.8%	5.7%	6.4%	9.9%
周辺層	10.3%	17.3%	11.4%	18.0%
一般層	84.9%	77.0%	82.3%	72.1%

注：判別不可を除いた総数に対する割合。

生活困難度を構成する3つの軸(低所得、家計の逼迫、子どもの体験や所有物の欠如)のそれぞれに該当する割合は、小学5年生では「低所得」は 6.0%、「家計の逼迫」は 6.6%、「子どもの体験や所有物の欠如」は 8.4%であった(図表 3-1-3)。このうち、「子どもの体験や所有物の欠如」については、前回調査と統計的に有意な差がなかったが、「低所得」と「家計の逼迫」については本調査の方が前回調査よりも低い値となっている。中学 2 年生においては、「低所得」が 7.7%、「家計の逼迫」は 6.9%、「子どもの体験や所有物の欠如」は 10.6%であった。前回調査との比較においては、すべての項目にて本調査の方が、該当割合が少ない。

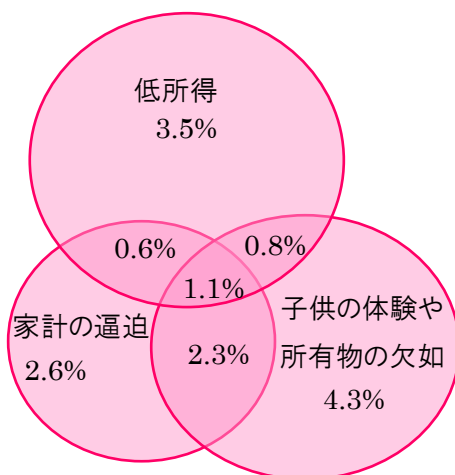
図表 3-1-3 各要素の該当割合(小学 5 年生、中学 2 年生)： 八王子市(R4、H29)

	小学 5 年生			中学 2 年生		
	R4	H29		R4	H29	
低所得	6.0%	11.8%	***	7.7%	14.3%	***
家計の逼迫	6.6%	8.9%	***	6.9%	11.6%	***
子どもの体験や所有物の欠如	8.4%	9.4%		10.6%	14.4%	***

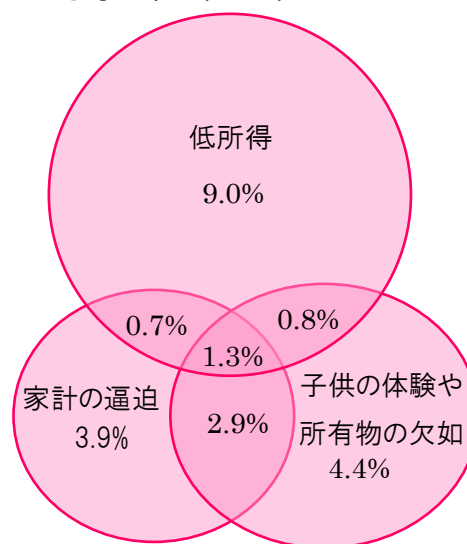
注：すべての変数の判別不可を除いた総数に対する割合。

前回(H29)調査の数値については、今回の調査と欠損処理の仕方が異なるため、本報告書と同じように再集計している。そのため、前回の報告書とは異なる数値となっている。

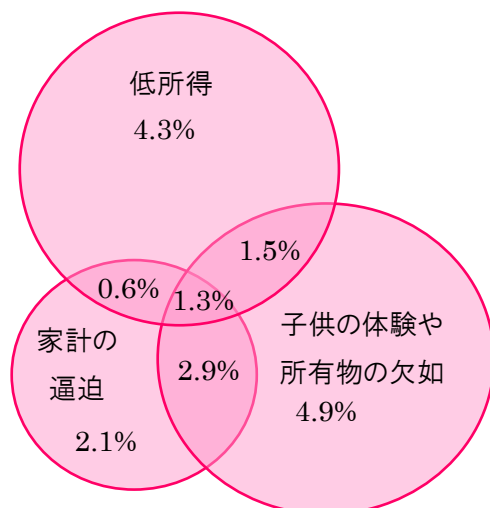
小学 5 年生(R4)



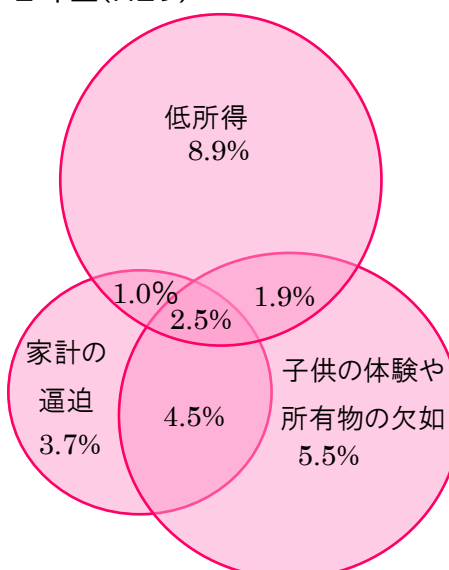
小学5年生(H29)



中学 2 年生(R4)



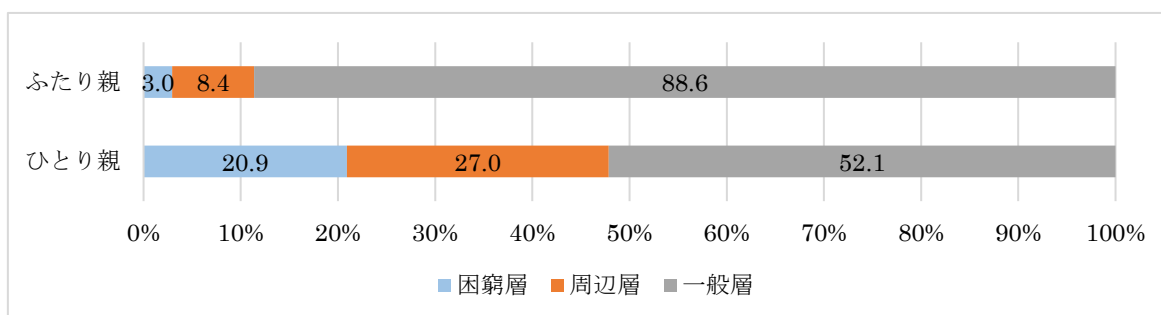
中学 2 年生(H29)



(3)世帯タイプ別の生活困難度

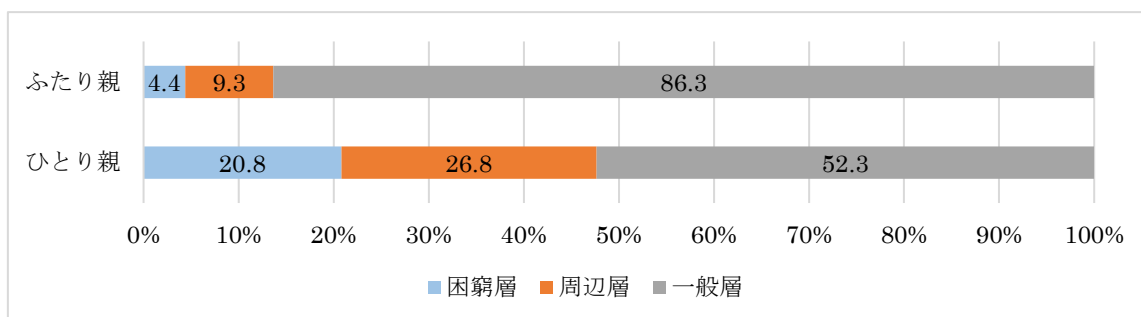
次に、世帯タイプ別に生活困難度を見てみると、小学5年生のふたり親世帯では、困窮層が3.0%、周辺層が8.4%、一般層が88.6%であるのに対し、ひとり親世帯では困窮層が20.9%、周辺層が27.0%、一般層が52.1%であった。中学2年生においては、ふたり親世帯では困窮層が4.4%、周辺層が9.3%、一般層が86.3%であるのに対し、ひとり親世帯は20.8%、26.8%、52.3%であった。

図表 3-1-4 生活困難度：世帯タイプ別(小学5年生) (***)



注：判別不可を除いた総数に対する割合。

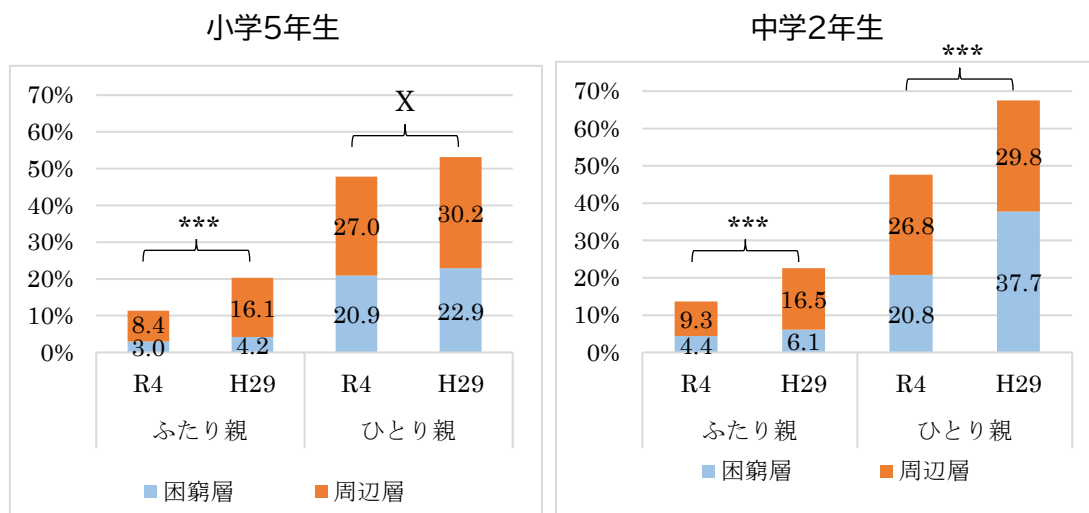
図表 3-1-5 生活困難度：世帯タイプ別(中学2年生) (***)



注：判別不可を除いた総数に対する割合。

世帯タイプ別の生活困難度を、前回調査(H29)と比べると、小学5年生のひとり親世帯においては前回調査と本調査の差が統計的に有意ではなかったが、小学5年生のふたり親世帯、中学2年生のふたり親世帯とひとり親世帯においては、前回調査(H29)に比べ本調査の困難層の割合が低かった。

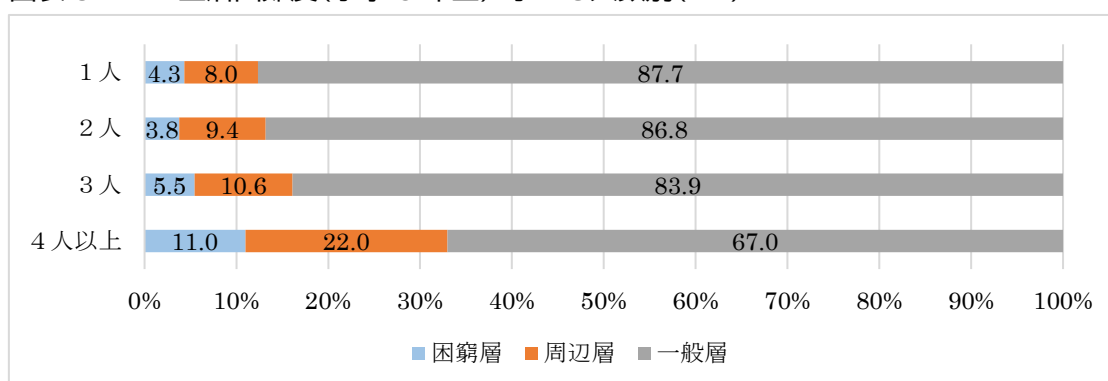
図表 3-1-6 世帯タイプ別生活困難度：令和4年、平成 29 年



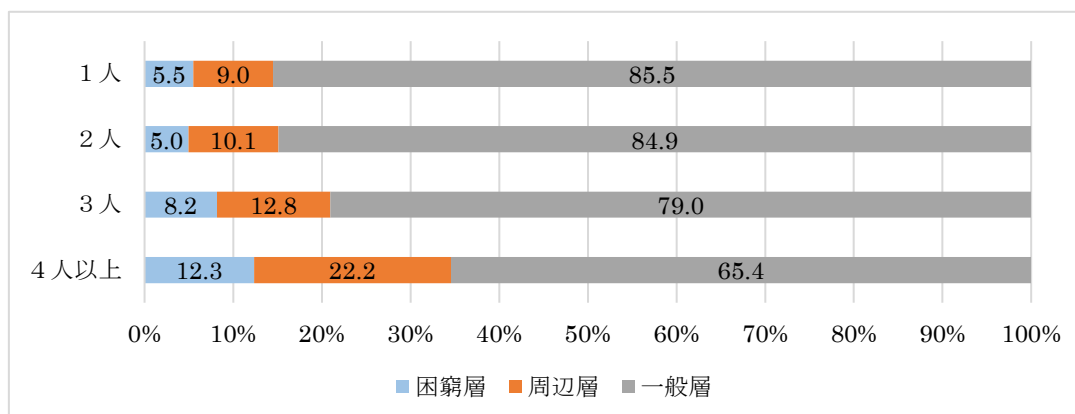
(4)子どもの人数別の生活困難層の割合

子どもの人数別に見ると、小学5年生も中学2年生も子ども人数が多いほど生活困難層の割合が多い。小学5年生では、困窮層の割合は、子ども1人では4.3%、子ども2人では3.8%、子ども3人では5.5%、子ども4人以上では11.0%となっている。中学2年生においても、5.5%、5.0%、8.2%、12.3%と概ね子ども人数が多くなるほど生活困難層の割合が多くなっている。

図表 3-1-7 生活困難度(小学5年生):子ども人数別(***)



図表 3-1-8 生活困難度(中学 2 年生):子ども人数別(***)

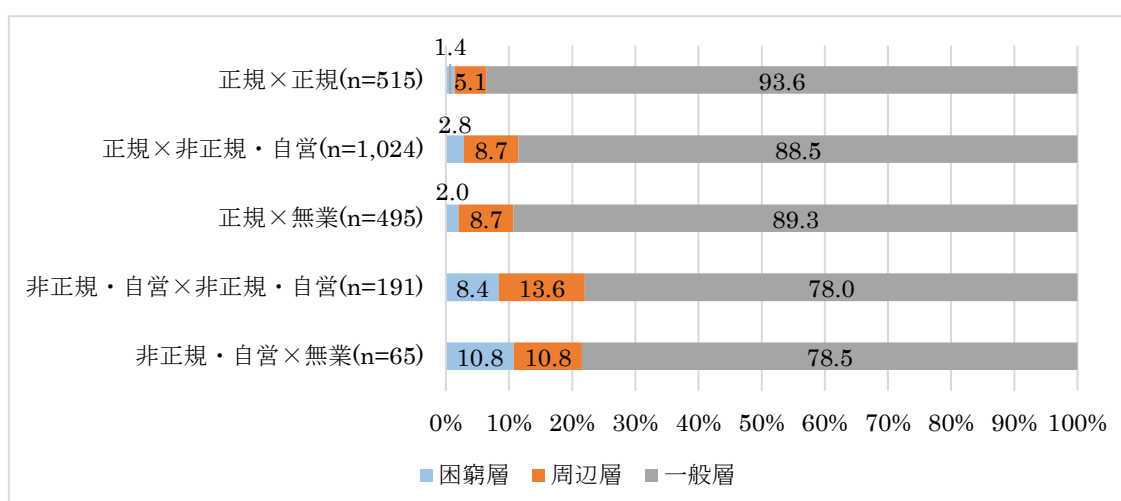


(5)親の就労状況別の生活困難者の割合

次に、両親の就労状況の組み合わせ(第 2 章 2 節(1)参照)ごとに、生活困難度の割合を見ると、小学 5 年生・中学 2 年生ともに有意差が見られた。

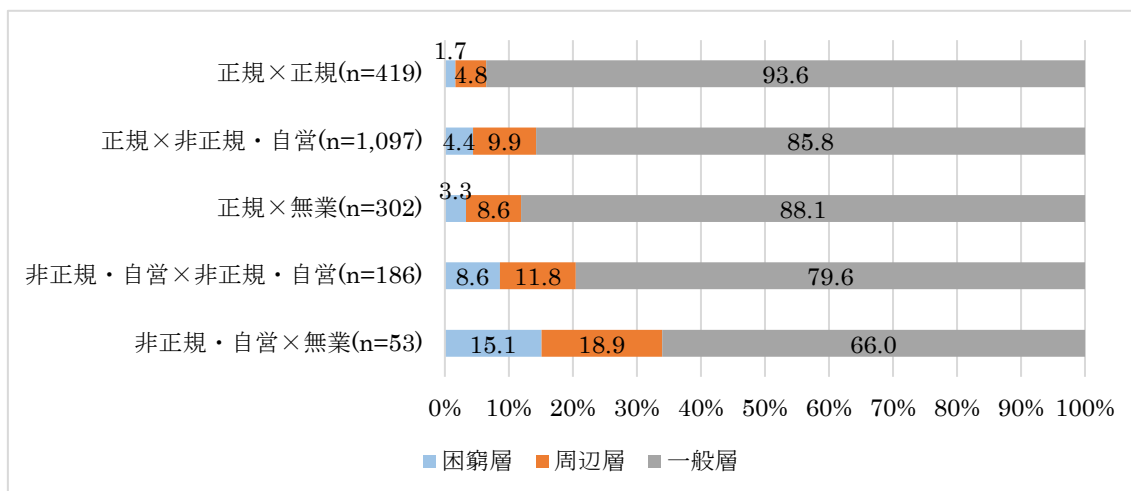
小学 5 年生・中学 2 年生ともに〈非正規・自営×無業〉〈非正規・自営×非正規・自営〉の困窮層の割合が特に高く、小学 5 年生ではそれぞれ 10.8%、8.4%、中学 2 年生ではそれぞれ 15.1%、8.6%であった。困窮層の割合がもっとも低いのは〈正規×正規〉であり、小学 5 年生では 1.4%、中学 2 年生では 1.7%であった。周辺層の割合も困窮層の傾向と同じように、〈非正規・自営×無業〉〈非正規・自営×非正規・自営〉で高く、小学 5 年生ではそれぞれ 10.8%、13.6%、中学 2 年生ではそれぞれ 18.9%、11.8%であり、また、〈正規×正規〉でもっとも低く、小学 5 年生では 5.1%、中学 2 年生では 4.8%であった。

図表 3-1-9 生活困難度(小学 5 年生):両親の就労状況別(***)



※ふたり親世帯以外や、両親どちらかが無回答である場合は、欠損扱いとする。

図表 3-1-10 生活困難度(中学 2 年生):両親の就労状況別(***)



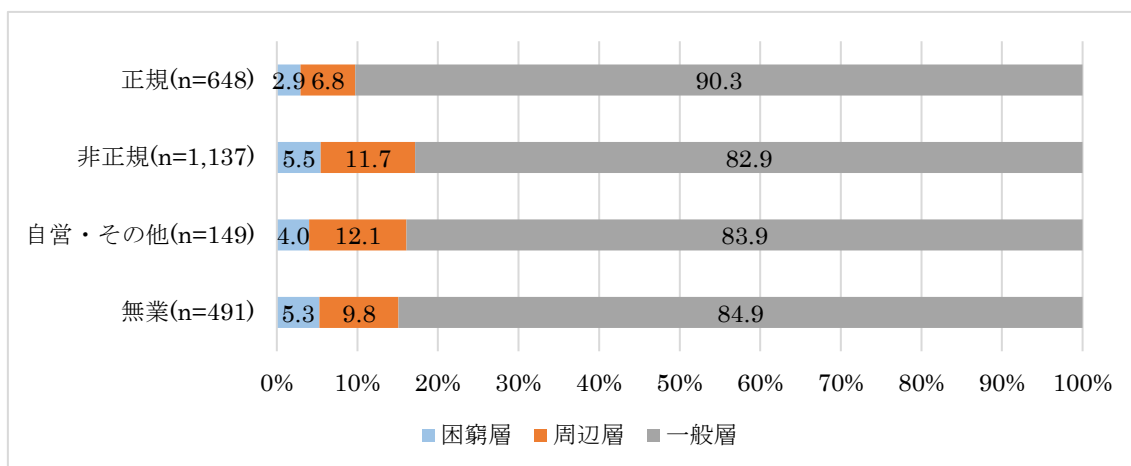
※ふたり親世帯以外や、両親どちらかが無回答である場合は、欠損扱いとする。

母親の就労状況別でも、小学 5 年生・中学 2 年生ともに有意差が見られた。

小学 5 年生では〈非正規〉で困窮層の割合が 5.5%ともっとも高く、一方で、〈自営・その他〉で周辺層の割合が 12.1%ともっとも高い結果となった。

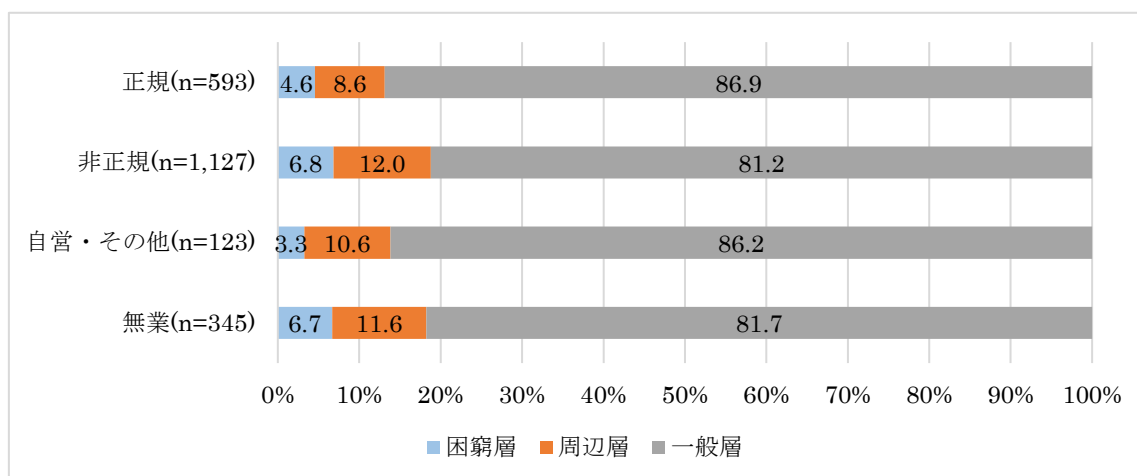
中学 2 年生では〈非正規〉〈無業〉で困窮層・周辺層の割合が高い傾向にあり、困窮層の割合は〈非正規〉6.8%、〈無業〉6.7%、周辺層の割合はそれぞれ〈非正規〉12.0%、〈無業〉11.6%となっている。

図表 3-1-11 生活困難度(小学 5 年生):母親の就労状況別(***)



※母親のいる世帯のみに分析を限定している。無回答の割合が大きいため、欠損処理を行った。

図表 3-1-12 生活困難度(中学 2 年生):母親の就労状況別(*)

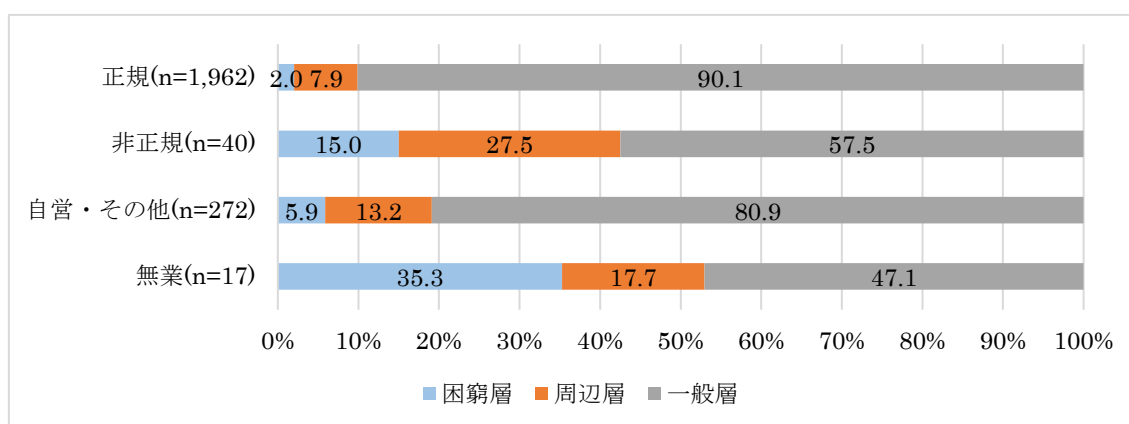


※母親のいる世帯のみに分析を限定している。無回答の割合が大きいため、欠損処理を行った。

父親の就労状況別では、母親よりも目に見えて大きな差が見られた。

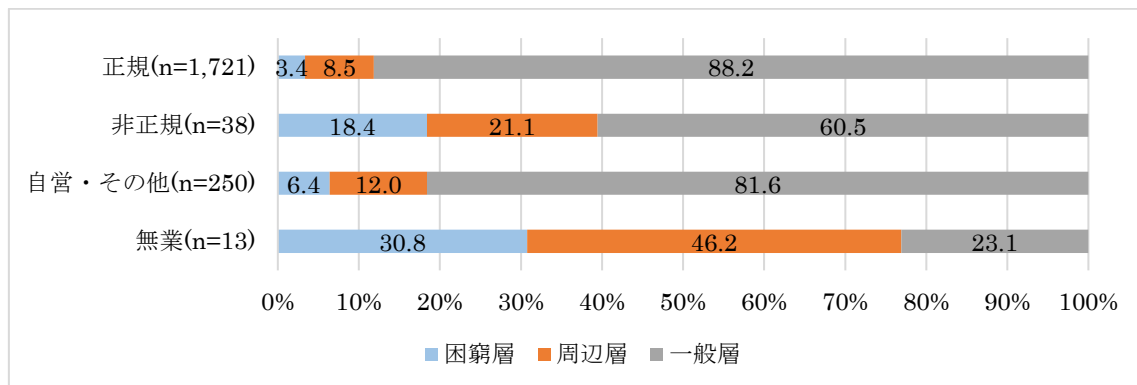
困窮層の割合が最も高いのは小学 5 年生・中学 2 年生ともに〈無業〉であり(それぞれ 35.3%、30.8%)、次に〈非正規〉での割合が高い(それぞれ 15.0%、18.4%)。周辺層の割合は、小学 5 年生においては〈非正規〉でもっとも高く 27.5%であるのに対し、中学 2 年生では〈無業〉でもっとも高く 46.2%であった。

図表 3-1-13 生活困難度(小学 5 年生):父親の就労状況別(***)



※父親のいる世帯のみに分析を限定している。無回答の割合が大きいため、欠損処理を行った。

図表 3-1-14 生活困難度(中学 2 年生):父親の就労状況(***)

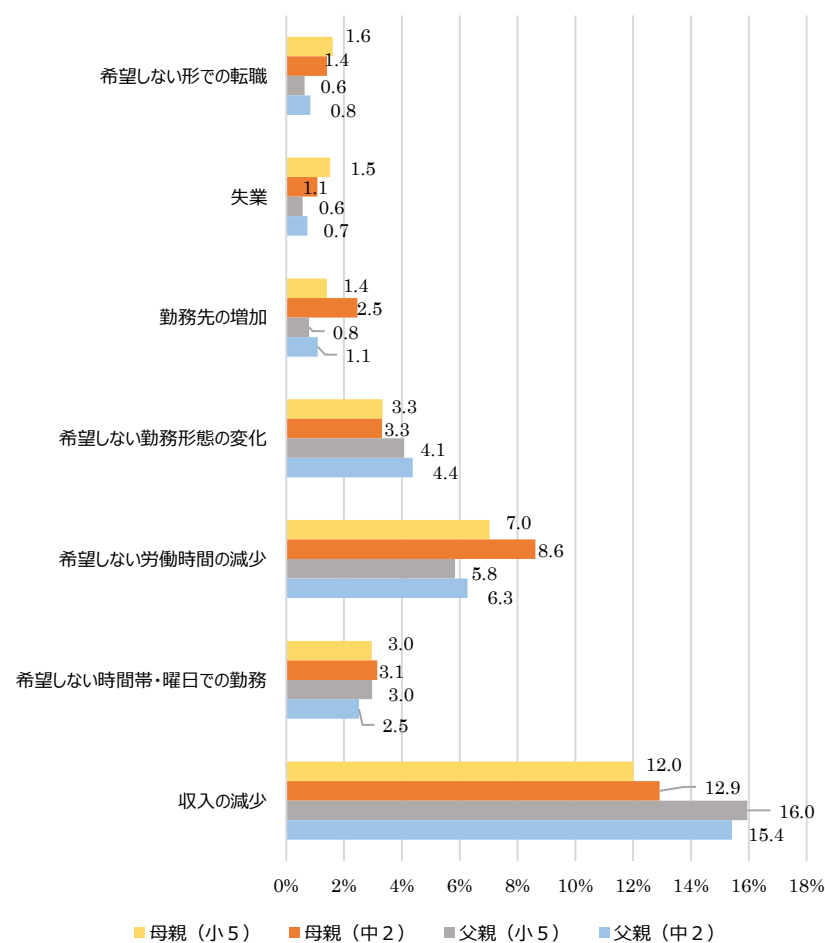


※父親のいる世帯のみに分析を限定している。無回答の割合が大きいため、欠損処理を行った。

(6)生活困難度別のコロナ禍の影響

コロナ禍による母親・父親の就労・収入への影響を小学 5 年生、中学 2 年生を合わせたグラフで全体的に見たところ、コロナ禍によって母親・父親の 12~16%が〈収入の減少〉を経験していた。また、母親・父親の約 6%~約 9%が〈希望しない労働時間の減少〉を経験していた。

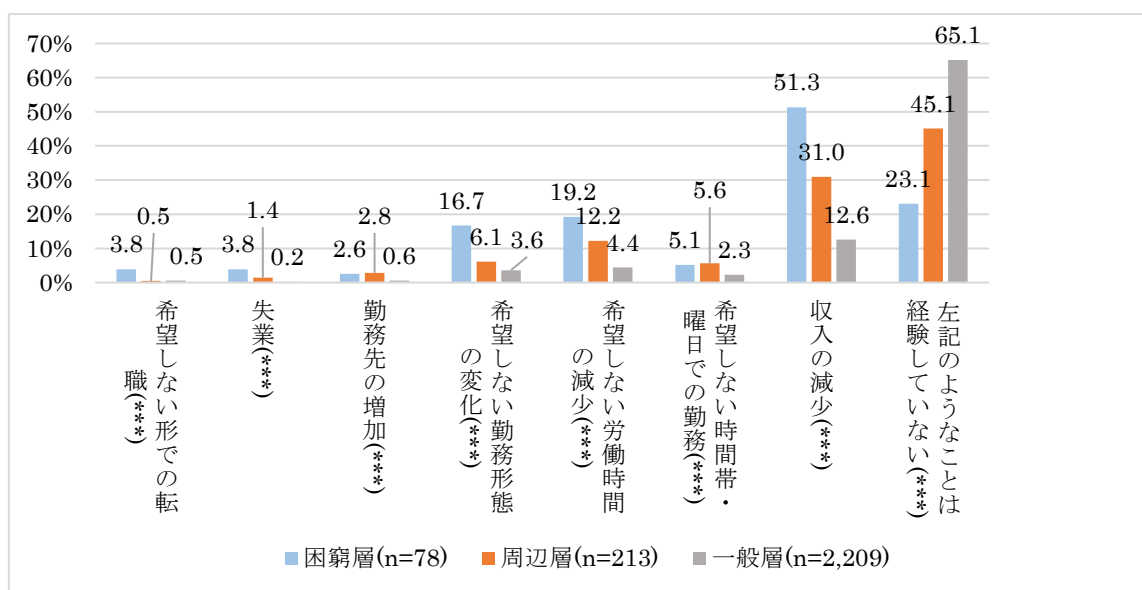
図表 3-1-15 コロナ禍による母親・父親の就労・収入への影響



最後に、新型コロナウイルス感染症による保護者の就労と収入の変化を生活困難度別に見た。小学5年生の父親を見ると、「希望しない時間帯・日での勤務」以外のすべての項目で困窮層、周辺層、一般層の順に変化を経験した割合が高い。「収入の減少」については、困窮層の父親の51.3%、周辺層では31.0%、一般層では2.6%が経験している。一般層では、65.1%の父親は、就労の変化も収入の変化も経験していないが、困窮層ではその割合は23.1%、周辺層では45.1%に留まっている。母親についても同様に、すべての項目で困窮層、周辺層、一般層の順番に変化を経験した割合が高い。「収入の減少」については困窮層では35.4%、周辺層では24.7%、一般層では9.3%が経験したと回答している。

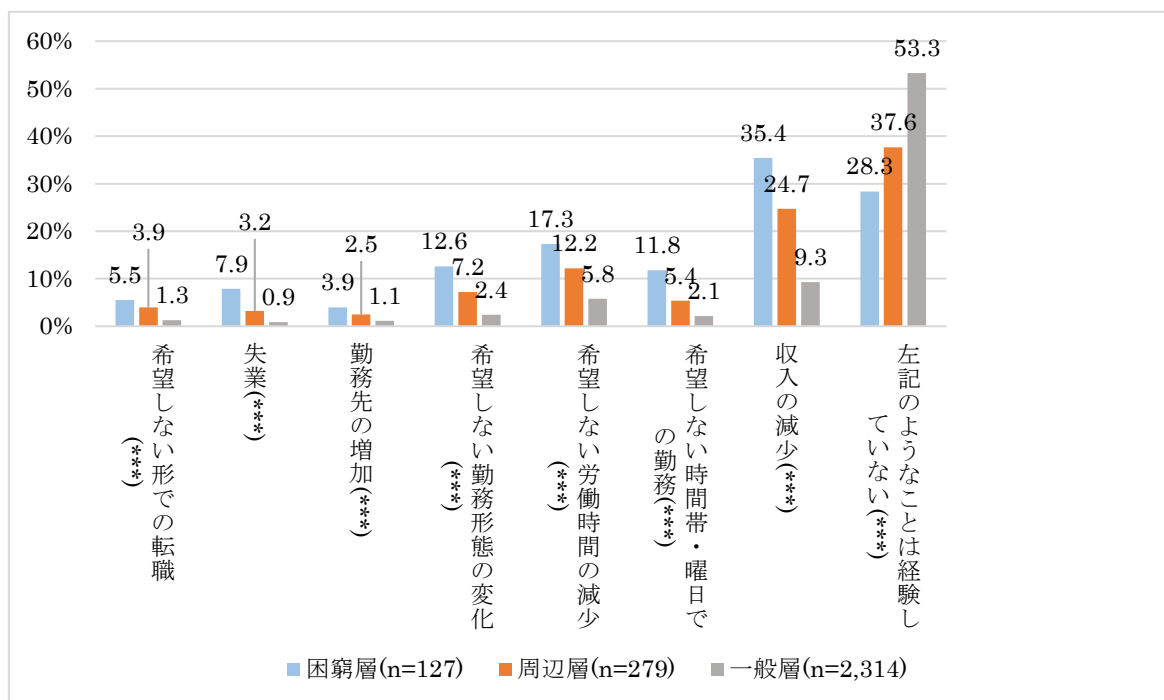
中学2年生の父親についても、「左記のようなことは経験していない」以外のすべての項目について、それを経験した割合が、困窮層、周辺層、一般層の順に高い。「収入の減少」については、困窮層では52.6%、周辺層では31.3%、一般層では11.7%が経験したと回答している。母親についても、すべての項目で困窮層、周辺層、一般層の順番に変化を経験した割合が高い。「収入の減少」については、困窮層では38.2%が経験したと回答しているのに対し、周辺層では16.9%、一般層では9.9%に留まっている。

図表 3-1-16 生活困難度別、コロナ禍の父親の就労と収入への影響(小学5年生)



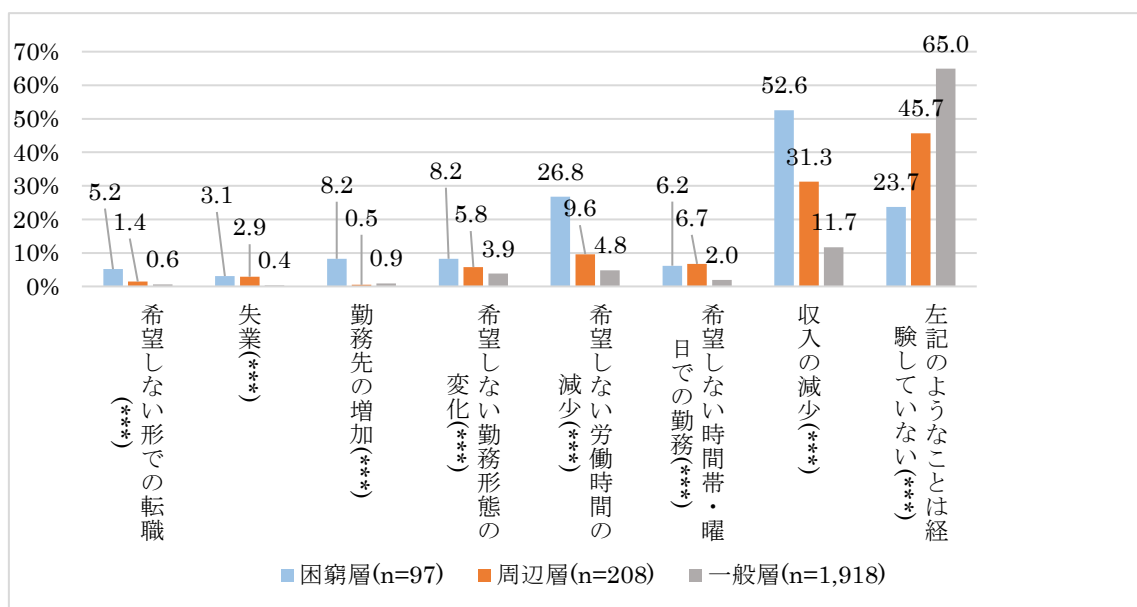
※ 父親が世帯内にいない場合は集計から除いている。

図表 3-1-17 生活困難度別、コロナ禍の母親の就労と収入への影響(小学 5 年生)



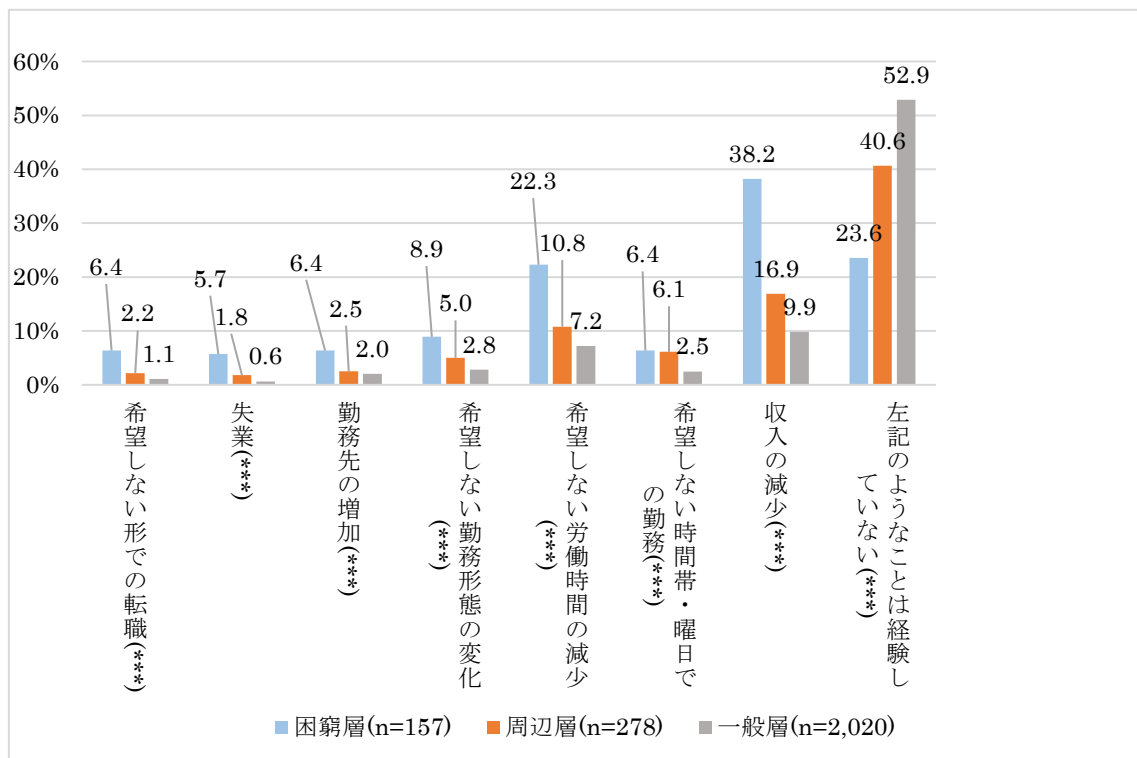
※ 母親が世帯内にいない場合は集計から除いている。

図表 3-1-18 生活困難度別、コロナ禍の父親の就労と収入への影響(中学 2 年生)



※ 父親が世帯内にいない場合は集計から除いている。

図表 3-1-19 生活困難度別、コロナ禍の母親の就労と収入への影響(中学 2 年生)



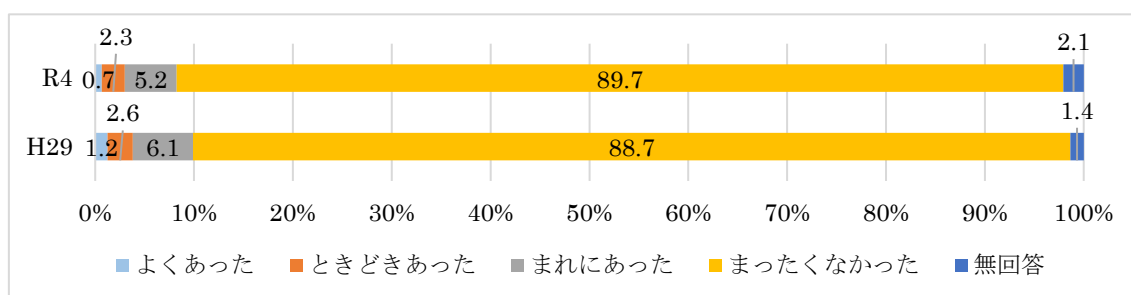
※ 母親が世帯内にいない場合は集計から除いている。

2. 家計の状況

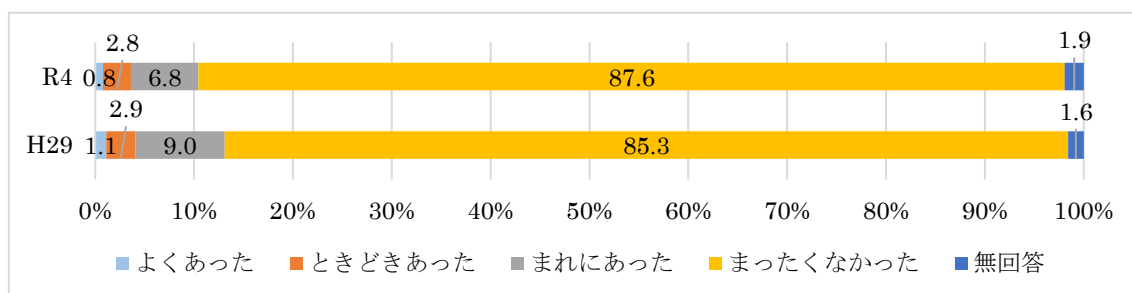
(1) 食料を買えなかった経験

本節においては、生活困難の具体的な内容を見ていく。保護者に「あなたのご家庭では、過去1年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする食料を買えないことがありましたか」と聞いたところ、小学 5 年生の保護者の 0.7%が「よくあった」、2.3%が「ときどきあった」、5.2%が「まれにあった」と回答している。中学 2 年生の保護者においては、この割合は、それぞれ 0.8%、2.8%、6.8%となっている。小学 5 年生、中学 2 年生ともに、前回調査よりも低い割合となっているが、依然として、合計すると約 1 割の保護者に食料が金銭的な理由で買えなかった経験がある。

図表 3-2-1 食料が買えなかった経験 (小学 5 年生)(**)



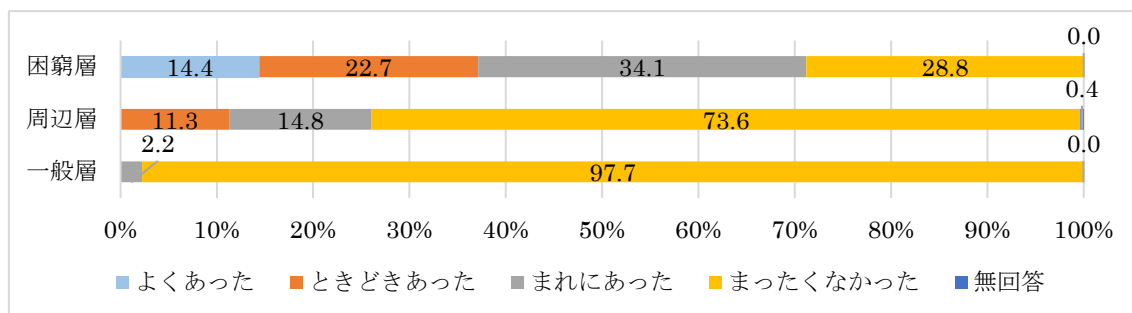
図表 3-2-2 食料が買えなかった経験（中学 2 年生）(*)



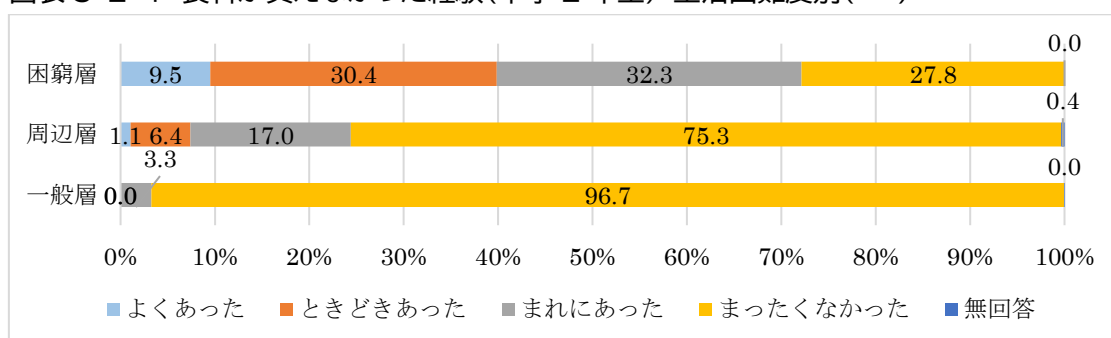
生活困難度別に、食料が買えなかった経験を見ると、本設問の回答が生活困難度の判定に用いられていることもあり、一般層においては「よくあった」「ときどきあった」の割合が 0%となっている。一方で、困窮層においては、小学 5 年生では 14.4%、中学 2 年生では 9.5%が「よくあった」、小学 5 年生では 22.7%、中学 2 年生 30.4%が「ときどきあった」と答えている。

生活困難度以外に、食料が買えなかった経験の割合に差をもたらす要因としては、子ども人数が考えられ、子ども人数別に見てみると、子ども数一人と二人の間には差がないものの、子ども三人になると経験をしている割合が多くなり、子ども四人以上となると特に「よくあった」の割合が多くなるのがわかる。

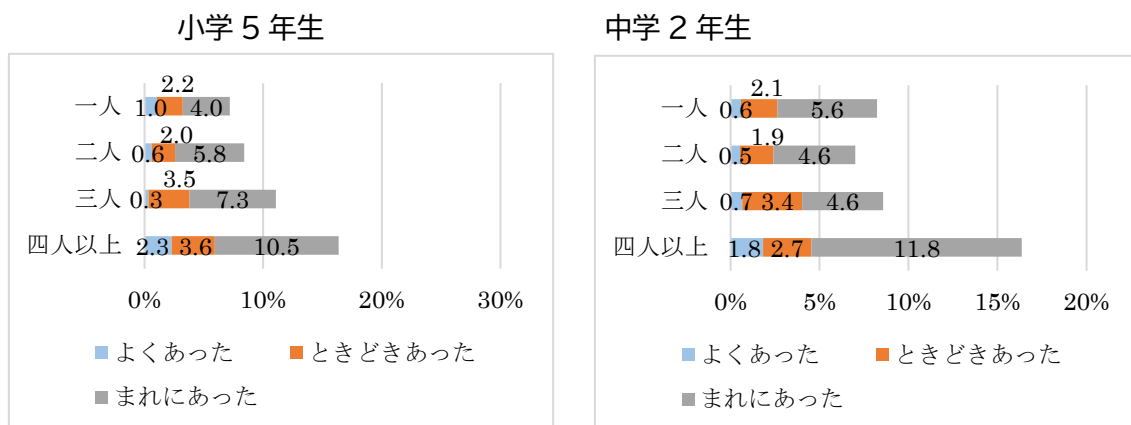
図表 3-2-3 食料が買えなかった経験(小学 5 年生):生活困難度別(***)



図表 3-2-4 食料が買えなかった経験(中学 2 年生):生活困難度別(***)



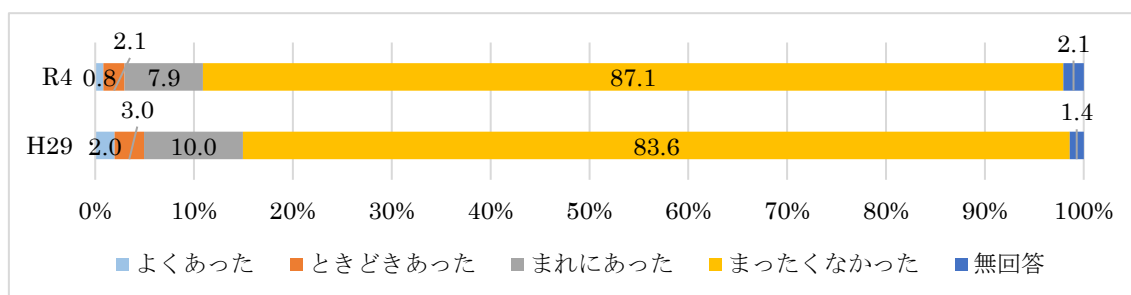
図表 3-2-5 食料が買えなかった経験(小学 5 年生、中学 2 年生):子ども人数別(***)



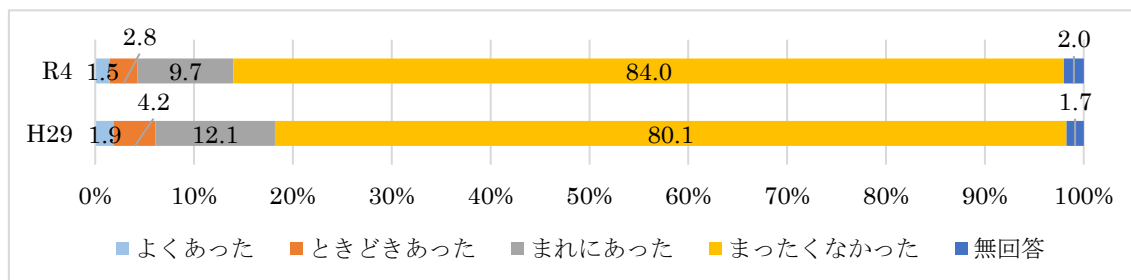
(2)衣類を買えなかった経験

次に、保護者票問 28 の「あなたのご家庭では、過去1年の間に、お金が足りなくて、家族が必要とする衣類が買えないことがありましたか」との質問に対する保護者の回答を見ると、小学 5 年生の保護者の 0.8%が「よくあった」、2.1%が「ときどきあった」、7.9%が「まれにあった」と回答している。中学 2 年生の保護者においては、この割合は、それぞれ1.5%、2.8%、9.7%となっている。小学 5 年生、中学 2 年生ともに、前回調査よりも低い割合となっているが、依然として、合計すると約 1 割の保護者に衣類が金銭的な理由で買えなかった経験がある。

図表 3-2-6 衣類が買えなかった経験 (小学 5 年生)(**)

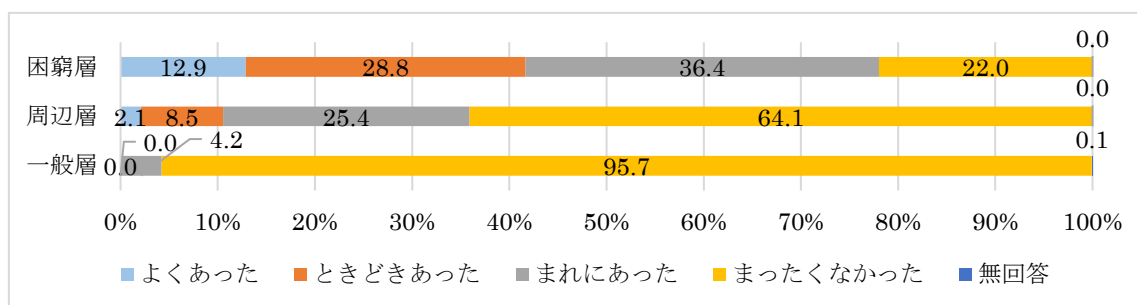


図表 3-2-7 衣類が買えなかった経験 (中学 2 年生)(**)

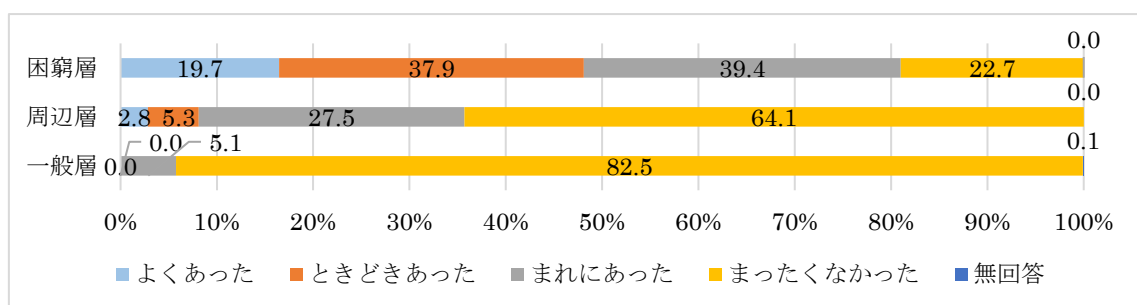


生活困難度別に、衣類が買えなかった経験を見ると、一般層においては「よくあった」「ときどきあった」の割合が0%となっている。一方で、困窮層においては、小学5年生では12.9%、中学2年生では19.7%が「よくあった」、小学5年生では28.8%、中学2年生37.9%が「ときどきあった」と答えている。

図表 3-2-8 衣類が買えなかった経験(小学5年生):生活困難度別(***)



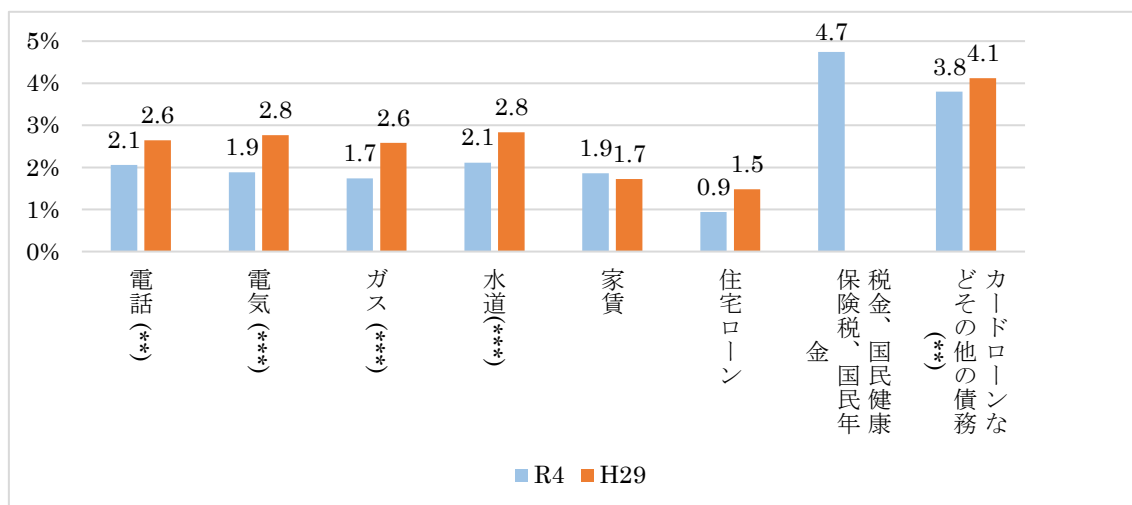
図表 3-2-9 衣類が買えなかった経験(中学2年生):生活困難度別(***)



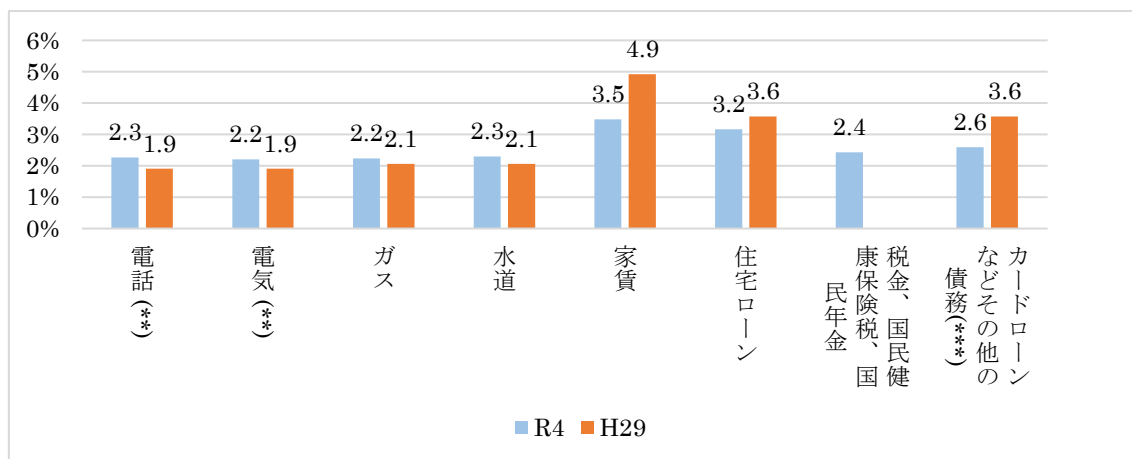
(3)公共料金の滞納経験

次に、保護者に「過去1年の間に、経済的な理由で、以下のサービス・料金について、支払えないことがありましたか」と聞いたところ、小学5年生の保護者においては「家賃」以外のすべての項目で、前回調査よりも支払えなかった割合が減少している。回答者の3.8%が「カードローンなどのその他の債務」、1.9%が「電気」、2.1%が「水道」について支払えなかった経験がある。また、中学2年生の保護者においては、H29と比較してR4で支払えなかった割合が増加した項目は、「電話」と「電気」であった。「カードローンなどのその他の債務」を支払えなかった割合は、前回調査(H29)よりも減少しており、それ以外の項目について統計的に有意な差はなかった。

図表 3-2-10 料金の滞納経験（小学 5 年生）

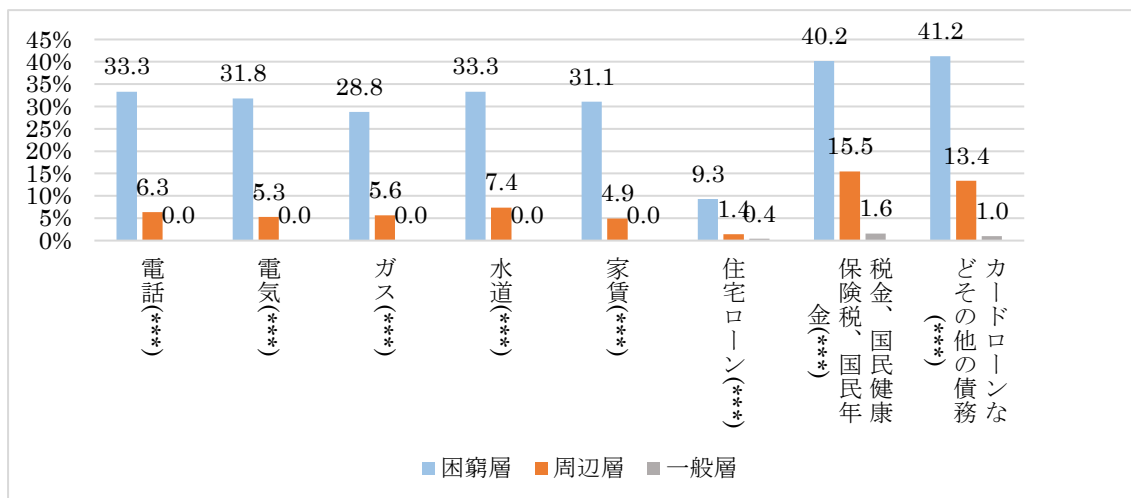


図表 3-2-11 料金の滞納経験（中学 2 年生）

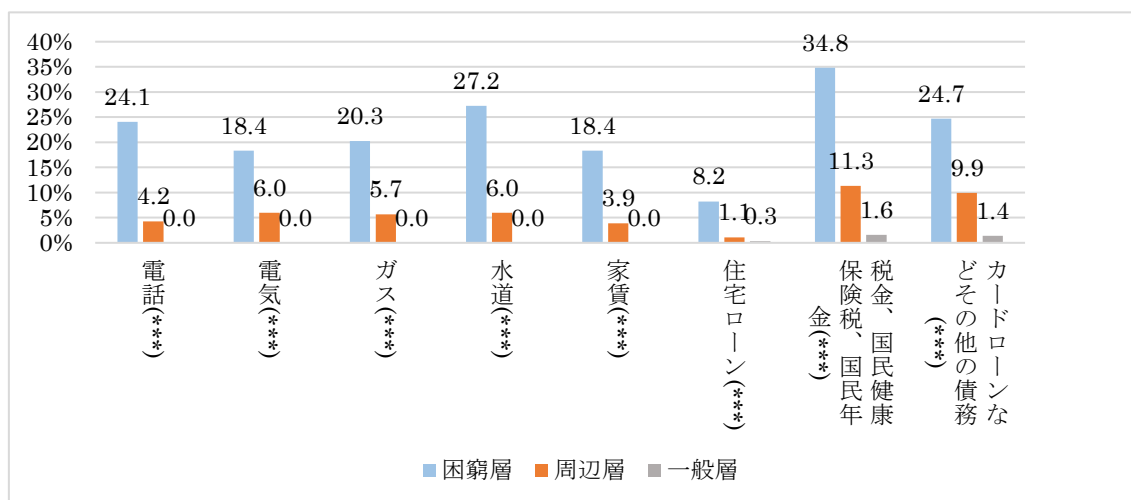


生活困難度別に、料金の滞納経験を見てみると、一般層においては小学 5 年生・中学 2 年生ともに、「電話」、「電気」、「ガス」、「水道」、「家賃」の滞納を経験した割合が 0%となっている。一方で、困窮層においては、小学 5 年生では 40.2%、中学 2 年生では 34.8%が「税金、国民健康保険税、国民年金」の滞納を経験し、小学 5 年生では 41.2%、中学 2 年生 24.7%が「カードローンなどその他の債務」の滞納を経験したと答えている。

図表 3-2-12 料金の滞納経験(小学 5 年生):生活困難度別(***)



図表 3-2-13 料金の滞納経験(中学 2 年生):生活困難度別(***)

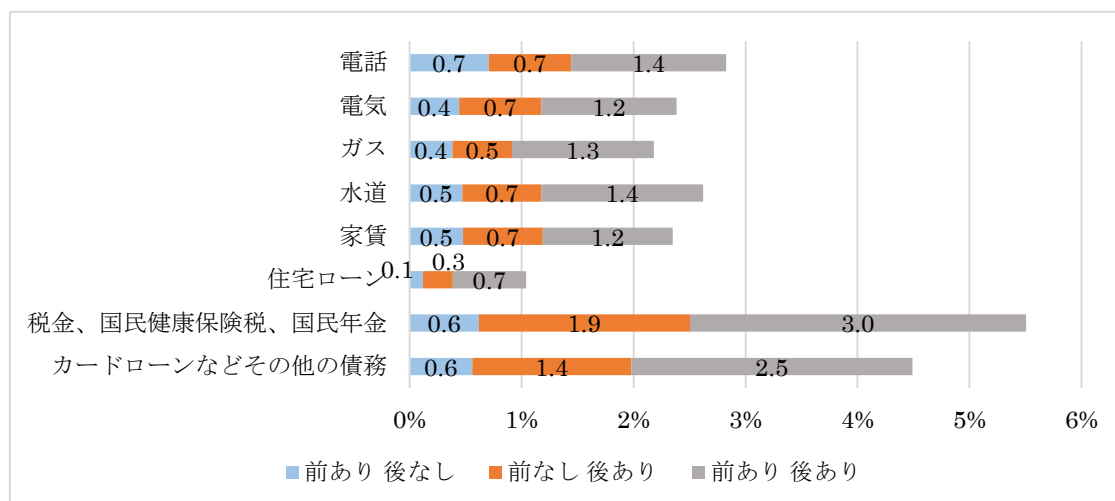


(4)料金の滞納:コロナ禍の前後の変化

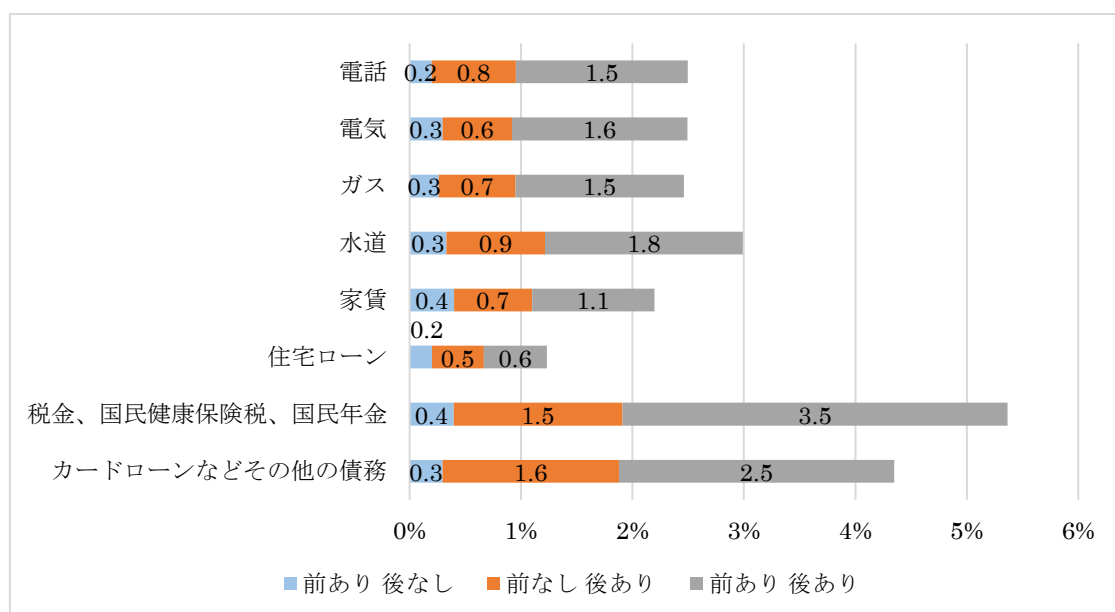
本調査では、保護者に調査時点(2022年6月)から過去1年間のサービス・料金の滞納経験を聞いていると共に、第1回目の緊急事態宣言(2020年4月)から過去1年間における滞納経験を聞いている。この二つの設問への回答を用いて、コロナ禍の前後において滞納経験の変化があった割合を集計した。図表 3-2-14 および図表 3-2-15 は、「コロナ前には滞納があったが、現在はない(前あり後なし)」、「コロナ前には滞納がなかったが、現在はある(前なし後あり)」、「コロナ前も現在もある(前あり後あり)」と回答した割合を示している。「コロナ前にも、コロナ後にも滞納がない」割合は、図から割愛している。

これを見るとすべての項目で「前なし後あり」の割合が、「前あり後なし」の割合よりも多くなっており、特に「税金、国民健康保険料税、国民年金保険料」や「カードローンなどその他の債務」については、コロナ前には滞納がなかったが、コロナ後(現在)はあると答えた割合が多くなっている。

図表 3-2-14 料金の滞納：コロナ禍前後の変化（小学 5 年生）



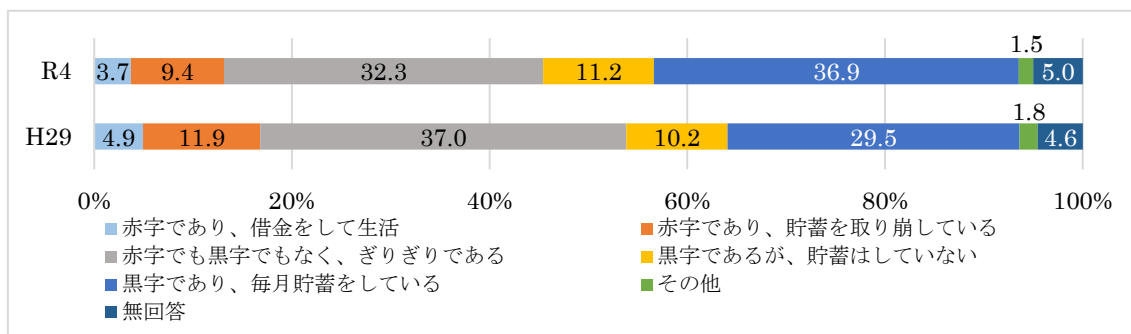
図表 3-2-15 料金の滞納：コロナ禍前後の変化（中学 2 年生）



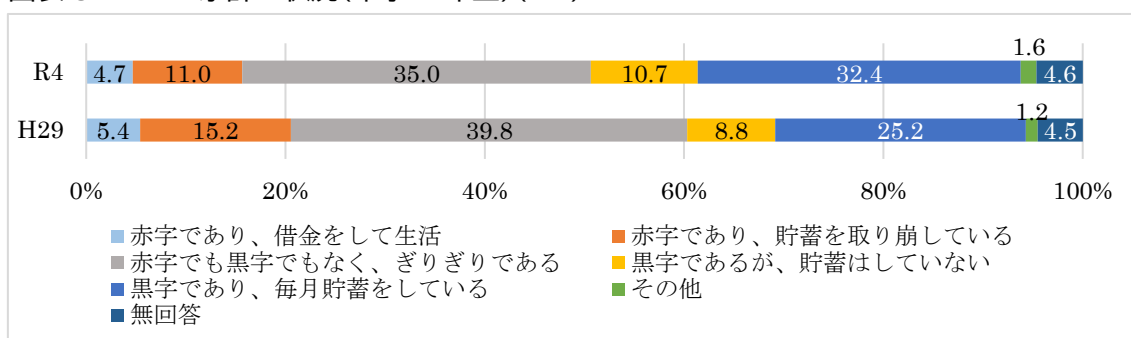
(5)家計の状況

次に、保護者に「ご家庭の家計について、最も近いものをお答えください」と聞いたところ、小学 5 年生においては「赤字であり、借金をして生活している」、「赤字であり、貯蓄を切り崩している」、「赤字でもなく黒字でもなく、ぎりぎりである」と回答した割合が前回調査より減少しており、それぞれ割合は 3.7%、9.4%、32.3%となっている。中学 2 年生においても同様に「赤字であり、借金をして生活している」、「赤字であり、貯蓄を切り崩している」、「赤字でもなく黒字でもなく、ぎりぎりである」と回答した割合が前回調査よりも減少しており、それぞれの割合は、4.7%、11.0%、35.0%となっている。

図表 3-2-16 家計の状況(小学 5 年生)(***)

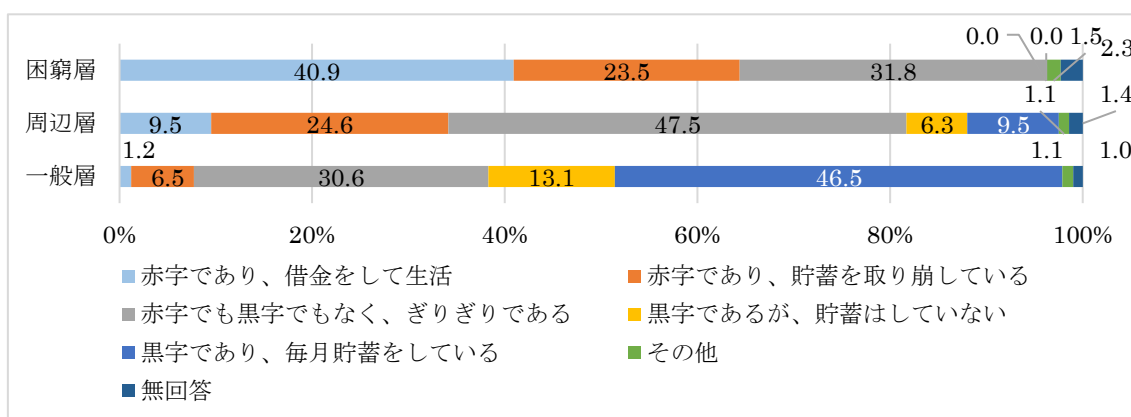


図表 3-2-17 家計の状況(中学 2 年生)(***)

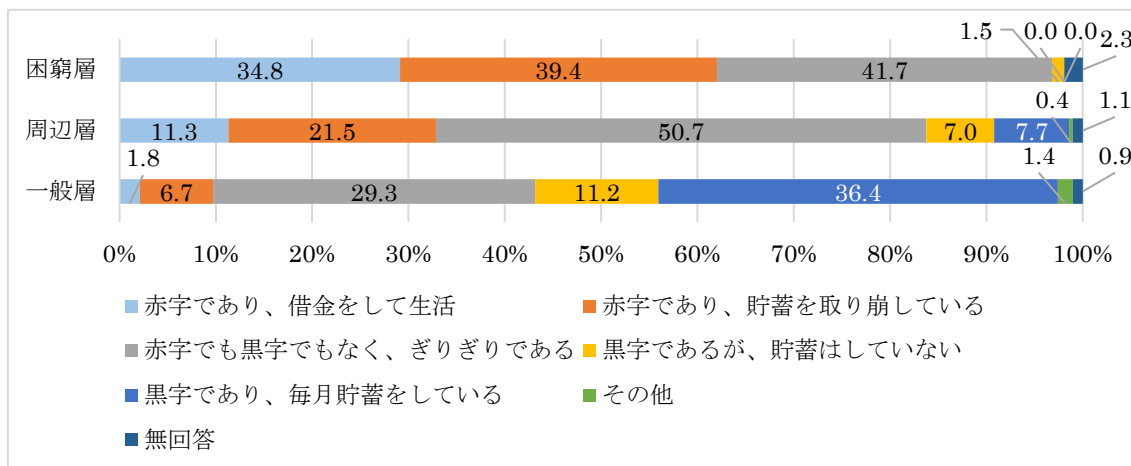


生活困難度別に、家計の状況を見てみる。小学 5 年生においては、「赤字であり、借金をして生活している」、「赤字であり、貯蓄を切り崩している」、「赤字でもなく黒字でもなく、ぎりぎりである」と回答した割合が、一般層ではそれぞれ 1.2%、6.5%、30.6%となっているのに対して、困窮層ではそれぞれ 40.9%、23.5%、31.8%となっており、大きな差がある。また中学 2 年生においても同様に、「赤字であり、借金をして生活している」、「赤字であり、貯蓄を切り崩している」、「赤字でもなく黒字でもなく、ぎりぎりである」と回答した割合は生活困難度によって大きな差があり、一般層ではそれぞれ 1.8%、6.7%、29.3%となっているのに対して、困窮層ではそれぞれ 34.8%、39.4%、41.7%となっている。

図表 3-2-18 家計の状況(小学 5 年生): 生活困難度別(***)



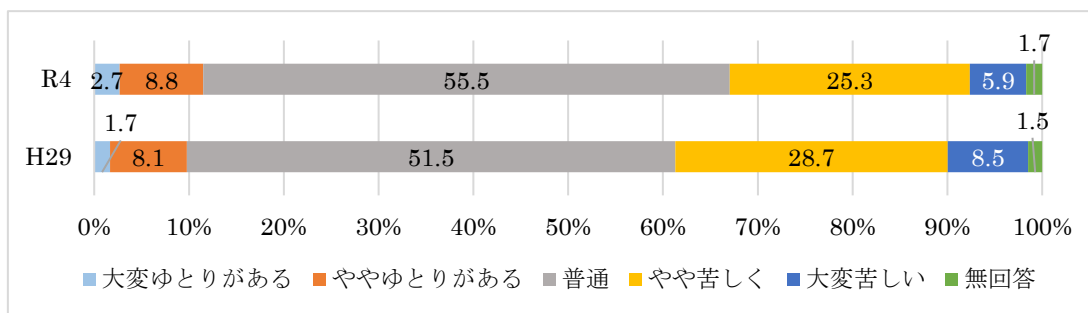
図表 3-2-19 家計の状況(中学 2 年生): 生活困難度別(***)



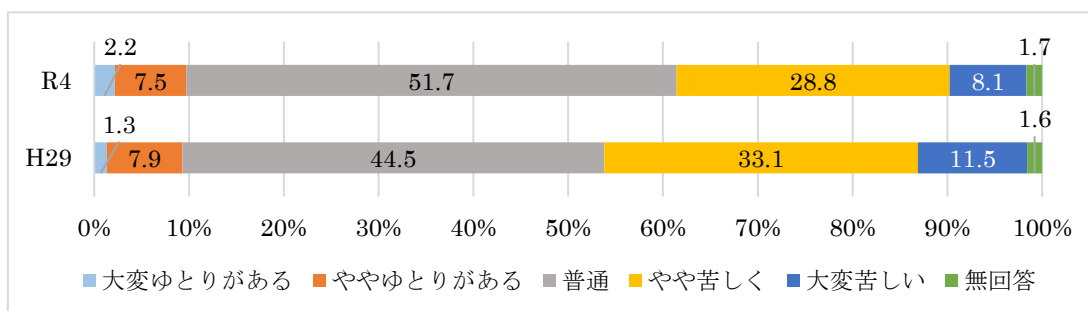
(6)暮らし向き

次に、保護者に「現在の暮らしの状況をどのように感じていますか」と聞いたところ、小学 5 年生においては「大変ゆとりがある」、「ややゆとりがある」と回答した割合が前回調査より増加しており、それぞれの割合は 2.7%、8.8%。中学 2 年生においては、前回調査と比較すると、「大変ゆとりがある」と回答した割合は増加しているが、「ややゆとりがある」と回答した割合は前回調査よりも減少しており、それぞれの割合は、2.2%、7.5%となっている。

図表 3-2-20 現在の暮らし向き(小学 5 年生)(***)

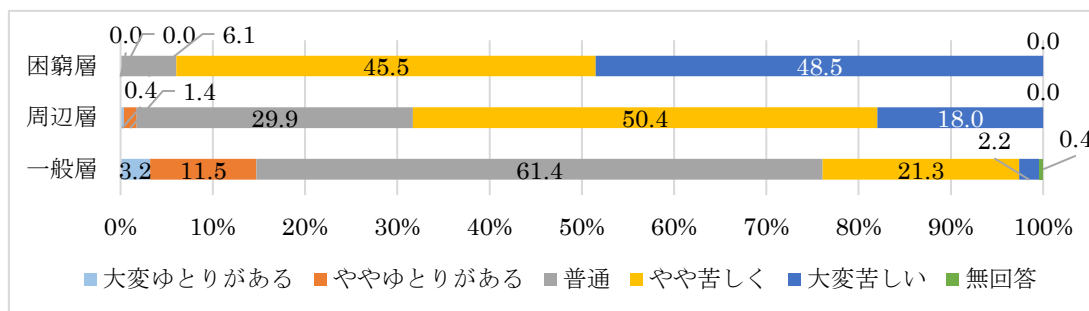


図表 3-2-21 現在の暮らし向き(中学 2 年生)(***)

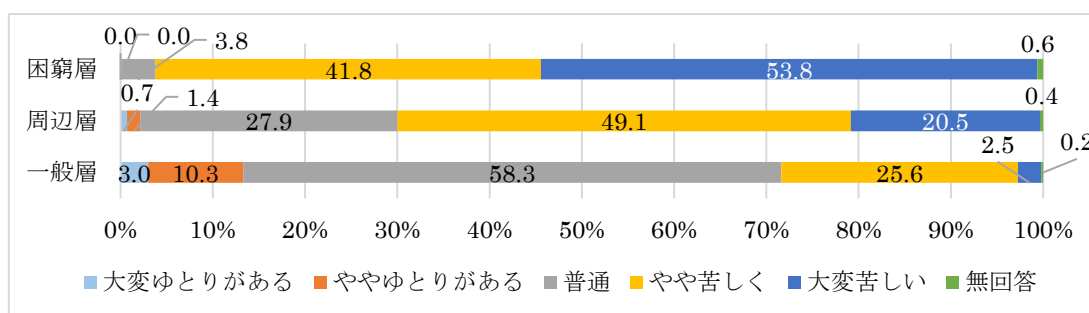


生活困難度別に、暮らし向きを見てみると、困窮層においては小学5年生・中学2年生ともに、「大変ゆとりがある」、「ややゆとりがある」と回答した割合が0%となっている。一方で、一般層においては、小学5年生では3.2%、中学2年生では3.0%が「大変ゆとりがある」と回答し、小学5年生では11.5%、中学2年生10.3%が「ややゆとりがある」と回答している。

図表 3-2-22 現在の暮らし向き(小学5年生):生活困難度(***)



図表 3-2-23 現在の暮らし向き(中学2年生):生活困難度(***)



3. 子どもの体験

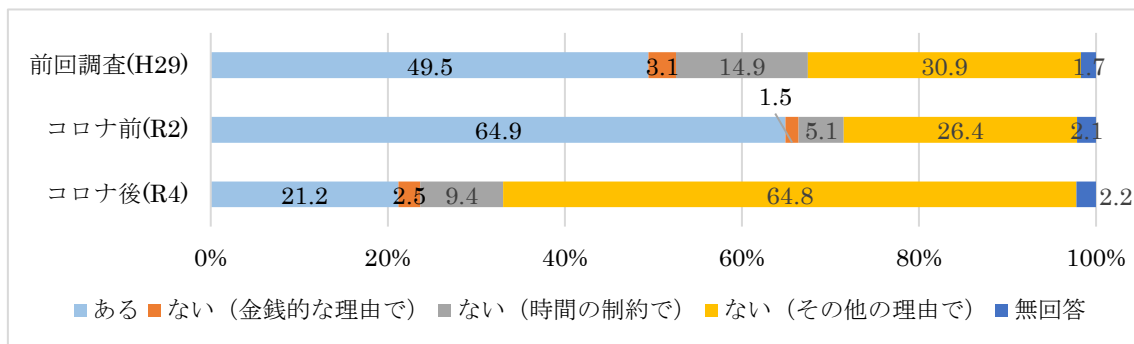
本調査では、子どもの体験格差を見るために、保護者票にて問22「この1年間において、あなたのご家庭では、お子さんと次のような体験をしましたか。」(以下、この設問の回答を「コロナ後」の回答として使用)として、「A 海水浴に行く」「B 博物館・科学館・美術館などに行く」「C キャンプやバーベキューに行く」「D スポーツ観戦や劇場、音楽会に行く」「E 遊園地やテーマパークに行く」と5つの典型的な子どもの体験活動について聞いている。答えの選択肢は「ある」「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」の4つである。また、今回の調査では新型コロナウイルス(以下、コロナ)による影響も考慮するために問23「コロナ前には、あなたのご家庭では、お子さんと次のような体験をしましたか。」(以下、この設問の回答を「コロナ前」の回答として使用)も合わせて聞いた。

(1)体験の割合

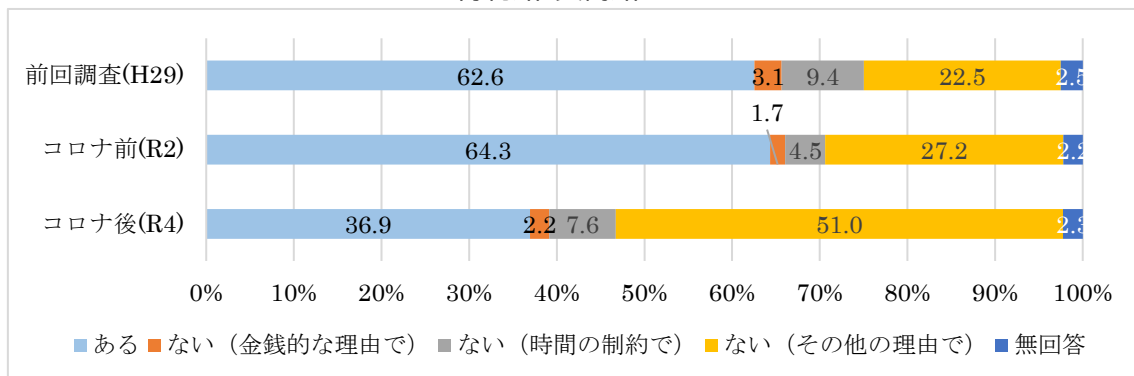
まず、小学 5 年生の保護者の回答を見る。「海水浴」について「ある」と答えた保護者の割合は、コロナ前では、64.9%であったが、コロナ後では 21.2%と大きく減少していた。同様に、「博物館・美術館など」では、コロナ前が 64.3%であったのに対し、コロナ後では 36.9%、「キャンプやバーベキュー」では、コロナ前が 71.0%であったのに対し、コロナ後では 45.3%、「スポーツ観戦や音楽会など」では、コロナ前 55.5%に対しコロナ後は 32.2%、「遊園地やテーマパーク」では、コロナ前は 88.4%に対し、コロナ後は 58.8%であった。5 つすべての体験において、コロナ前と比較しコロナ後は 20 から 30 ポイント程度の減少が見られた。コロナ前も、コロナ後も「ない」の理由で最も多いのが、「その他の理由」であり、「コロナ前」「コロナ後」の結果を比較すると、「コロナ後」では特に「その他の理由」と回答している割合が高いのは特筆すべき点である。

そこで、コロナ前の数値を、前回調査(H29)と比較すると、「海水浴」、「キャンプやバーベキュー」、「遊園地やテーマパーク」においては、10 ポイント以上「ある」の割合が高い傾向があった。「ない」の理由については、「金銭的な理由」、「時間の制約」、「その他の理由」のすべてにおいて前回調査(H29)よりも今回調査(コロナ前)の方が少ない傾向がある。これらの傾向は、中学 2 年生でも確認された。

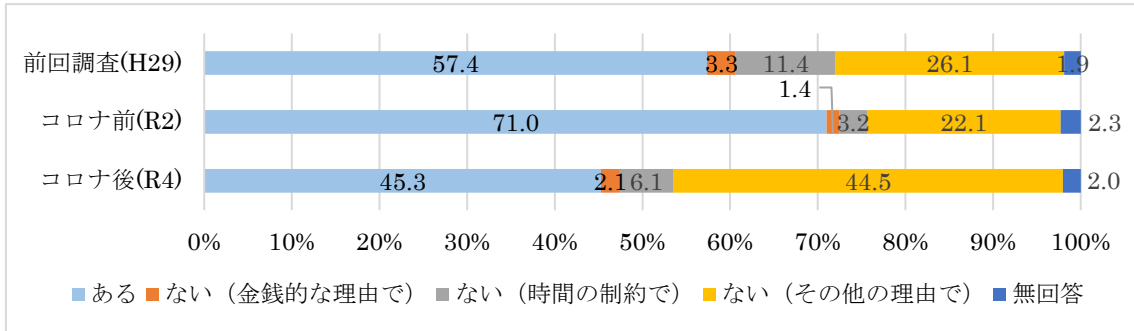
図表 3-3-1 子どもの体験(小学 5 年生):全体
海水浴



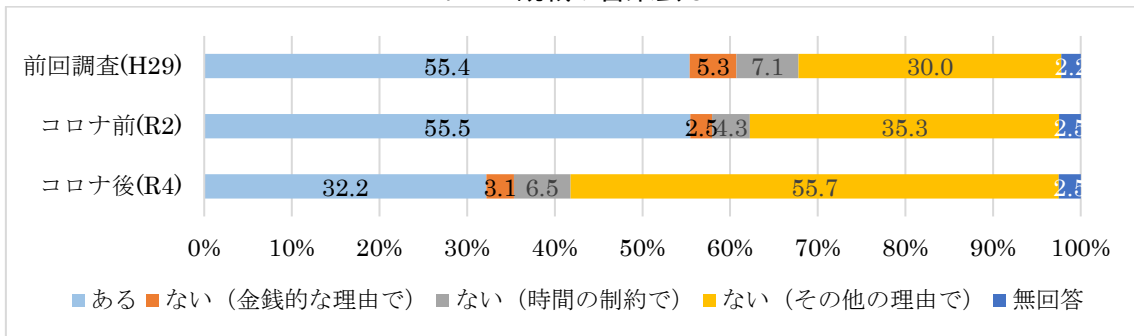
博物館・美術館など



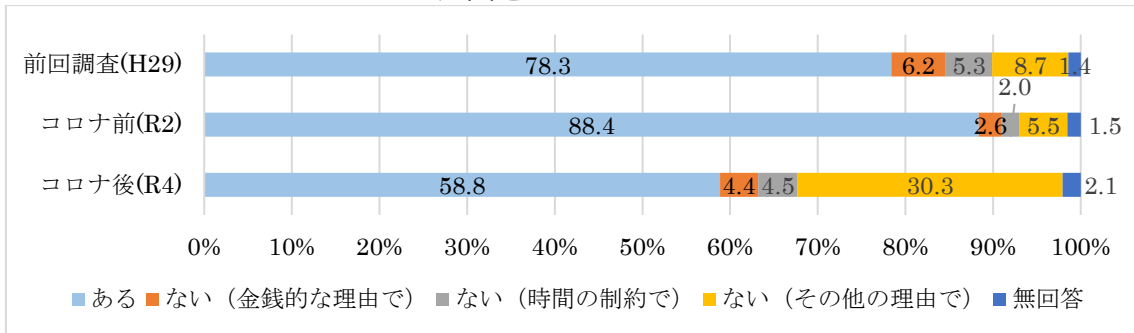
キャンプやバーベキュー



スポーツ観戦や音楽会など

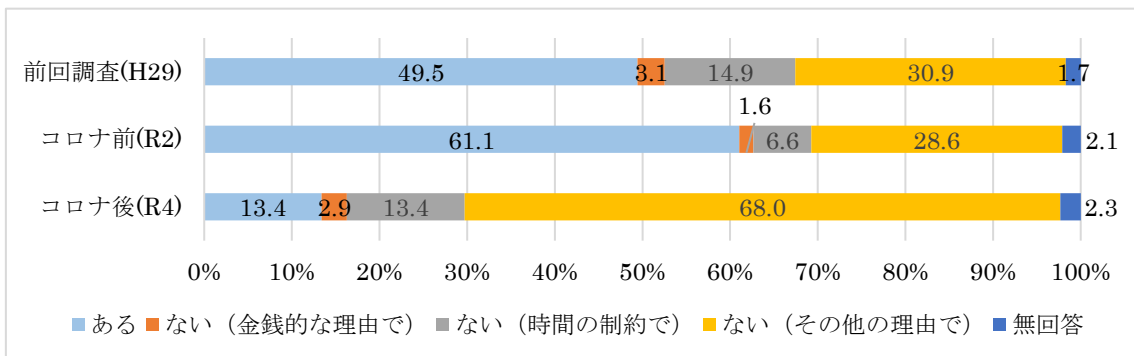


遊園地やテーマパーク

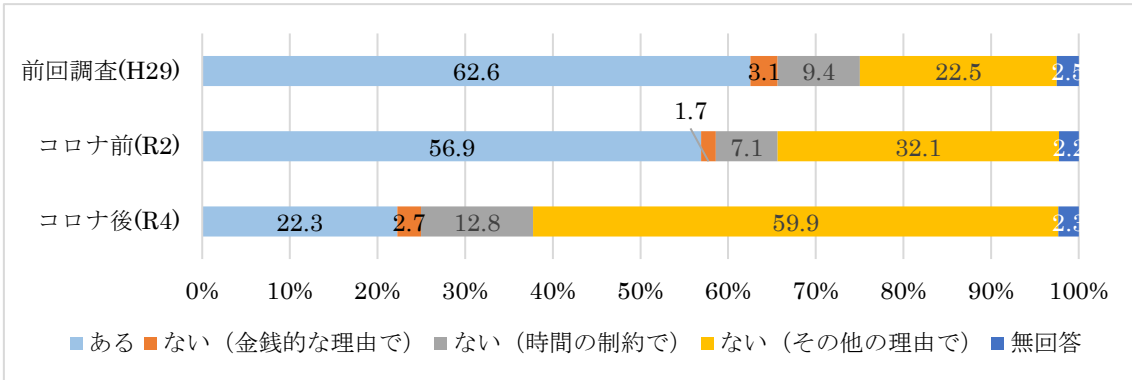


図表 3-3-2 子どもの体験(中学2年生):全体

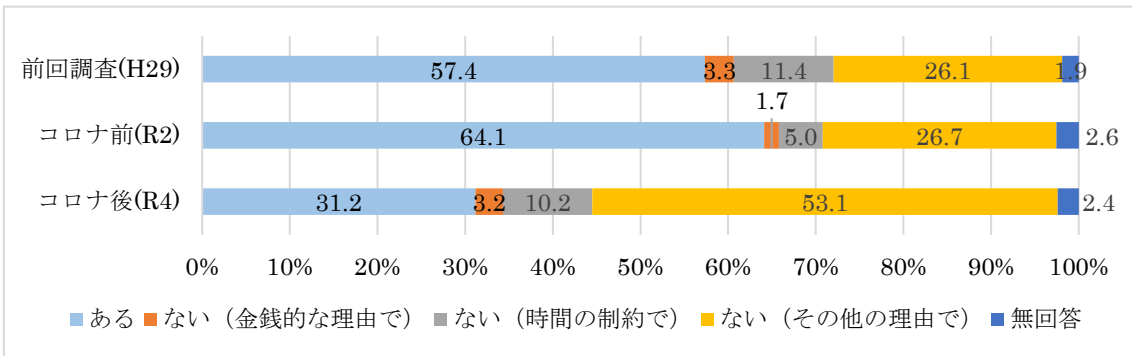
海水浴



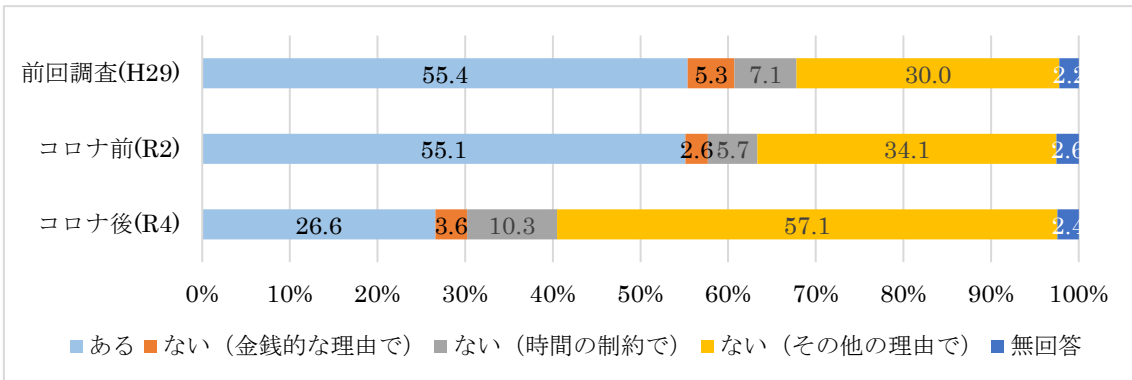
博物館・美術館など



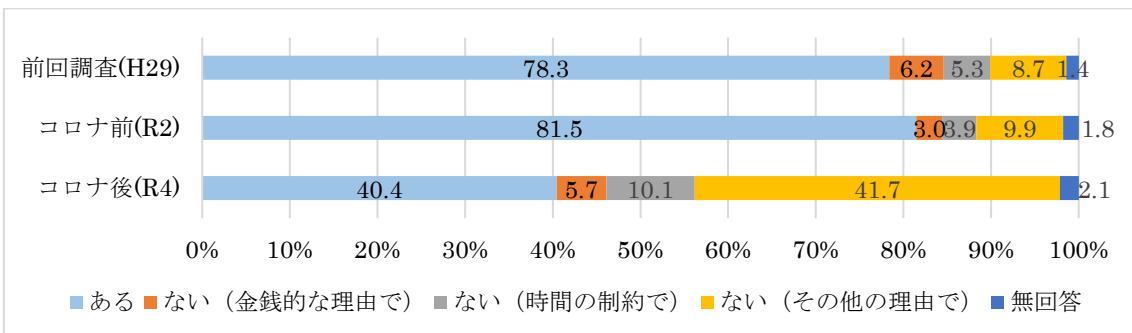
キャンプやバーベキュー



スポーツ観戦や音楽会など



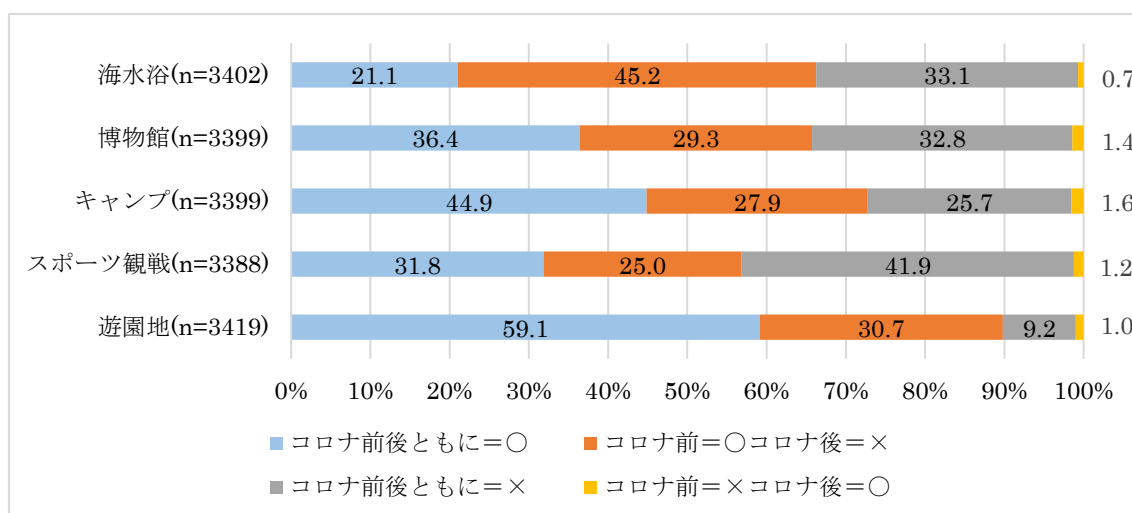
遊園地やテーマパーク



コロナ前後で子どもたちの体験の変化がどの程度あったのかを把握するために、コロナ前とコロナ後の 2 つの設問の結果を使用して、体験別に「コロナ前後ともにある」「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」「コロナ前後ともになかった」「コロナ前はなかったが、コロナ後はあった」の 4 グループに分類した。「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」の小学 5 年生の割合は、割合が高いものから順に、「海水浴」は 45.2%、「遊園地やテーマパーク」は 30.7%、「博物館・美術館など」は 29.3%、「キャンプやバーベキュー」は 27.9%、「スポーツ観戦や音楽会など」は 25.0%であった。

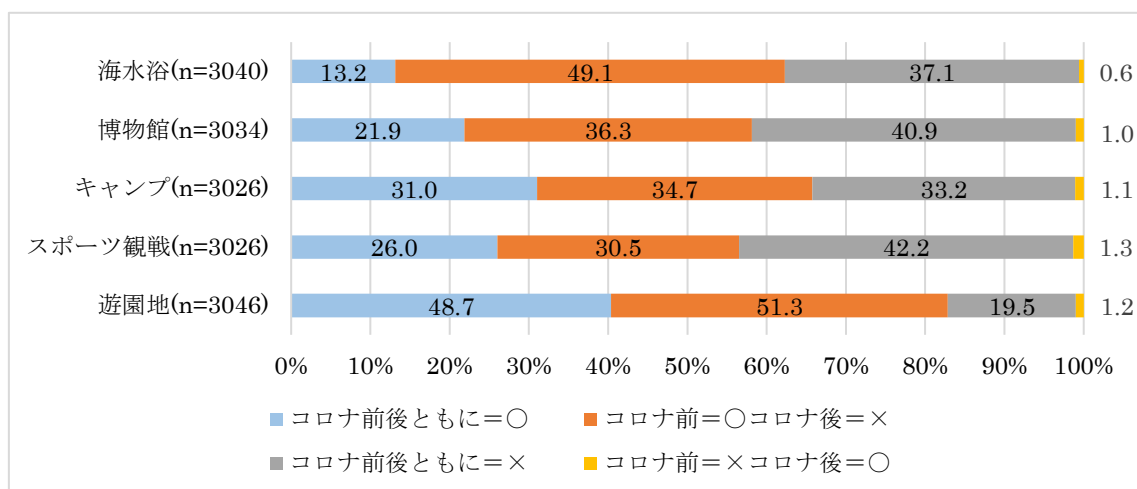
中学 2 年生では、割合が高いものから「遊園地やテーマパーク」は 51.3%、「海水浴」は 49.1%、「博物館・美術館など」は 36.3%、「キャンプやバーベキュー」は 34.7%、「スポーツ観戦や音楽会など」は 30.5%であった。小学 5 年生、中学 2 年生ともに「海水浴」と「遊園地やテーマパーク」の 2 項目において「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」と回答した割合が高い結果となった。

図表 3-3-3 子どもの体験(小学 5 年生):コロナ前後での変化



※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

図表 3-3-4 子どもの体験(中学 2 年生):コロナ前後での変化



※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

(2)生活困難度・世帯タイプ別の体験

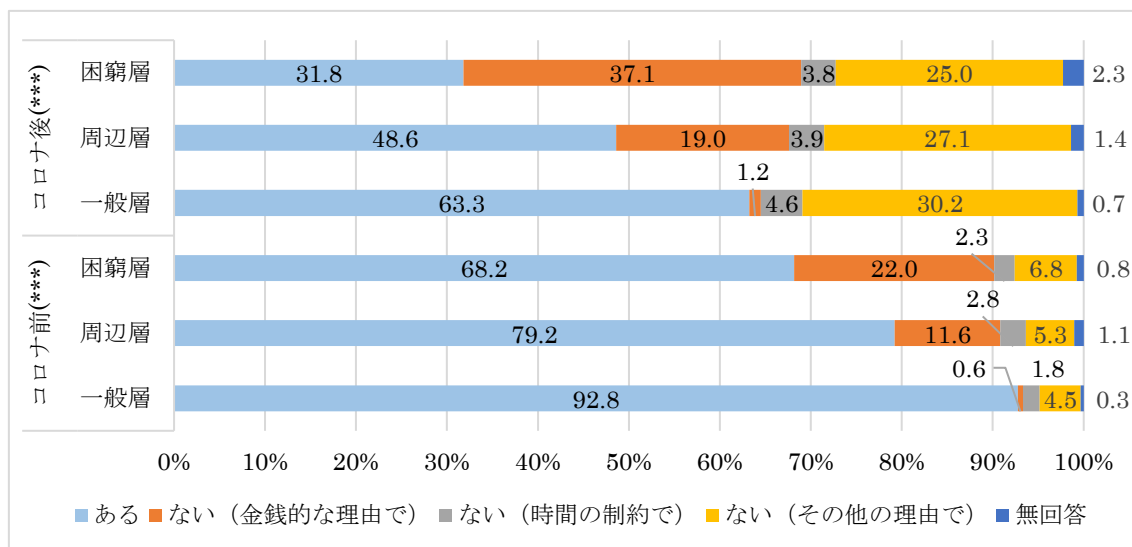
子どもの体験に関しては、生活困難度別、世帯タイプ別ともにすべての体験で統計的に有意な差が見られた。項目ごとの傾向はすべての項目で生活困難度別では一般層より困窮層の方が、世帯タイプ別ではふたり親世帯よりもひとり親世帯の方が「ある」が減少し、「ない」が増加していた。ここでは中でも体験するにあたり費用が必要となる「遊園地やテーマパーク」の結果について述べる。

生活困難度別に見ると、コロナ前の小学 5 年生では「ある」と回答した割合は、一般層が 92.8%、周辺層は 79.2%、困窮層が 68.2%であった。特に差が生じている回答は、「ない(金銭的な理由で)」であり、一般層が 0.6%、周辺層が 11.6%、困窮層が 22.0%であった。コロナ後については、同様に、一般層、周辺層、困窮層の順番で、「ある」と回答した割合が多く、また、「ない(金銭的な理由で)」が少なかった。生活困難度別の違いを、コロナ前とコロナ後で比較すると、コロナ前とコロナ後で「ある」と回答した割合が一般層は 29.5 ポイント、周辺層は 30.6 ポイント、困窮層は 36.4 ポイント減少している。一方で、「ない(金銭的な理由で)」と回答した割合は、一般層では 0.6 ポイント、周辺層では 7.4 ポイント、困窮層では 15.1 ポイント増加している。すなわち、コロナ前と後においては、生活困難度別の格差が拡大していることが確認される。

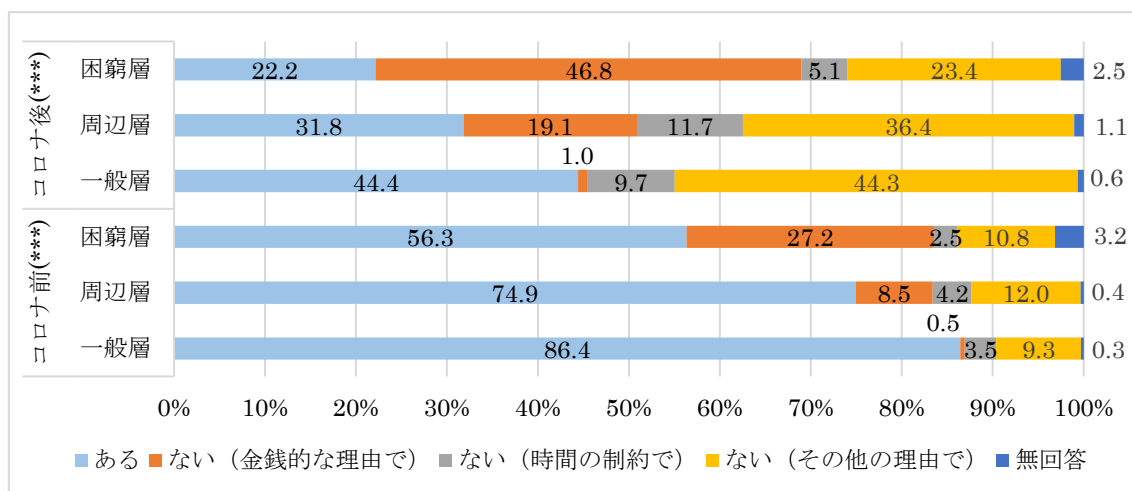
中学 2 年生では、コロナ前は「ある」と回答した割合は、一般層が 86.4%、周辺層は 74.9%、困窮層が 56.3%であり、「ない(金銭的な理由で)」は、一般層が 0.5%、周辺層が 8.5%、困窮層が 27.2%であった。コロナ後では、「ある」と回答した割合は、一般層が 44.4%、周辺層は 31.8%、困窮層が 22.2%、「ない(金銭的な理由で)」の割合は、一般層が 1.0%、周辺層が 19.1%、困窮層が 46.8%であった。中学 2 年生の結果では、コロナ前とコロナ後で「ある」と回答した割合が一般層は 42.0 ポイント、周辺層は 43.1 ポイント、困窮層は

34.1 ポイント減少している。一方で、「ない(金銭的な理由で)」と回答した割合は、一般層では 0.5 ポイント、周辺層では 10.6 ポイント、困窮層では 19.6 ポイント増加している。小学 5 年生と異なり、中学 2 年生においては、「ある」の格差は縮小したものの、「ない(金銭的な理由で)」の格差は拡大した。

図表 3-3-5 子どもの体験(小学 5 年生):生活困難度別 遊園地やテーマパーク



図表 3-3-6 子どもの体験(中学 2 年生):生活困難度別 遊園地やテーマパーク

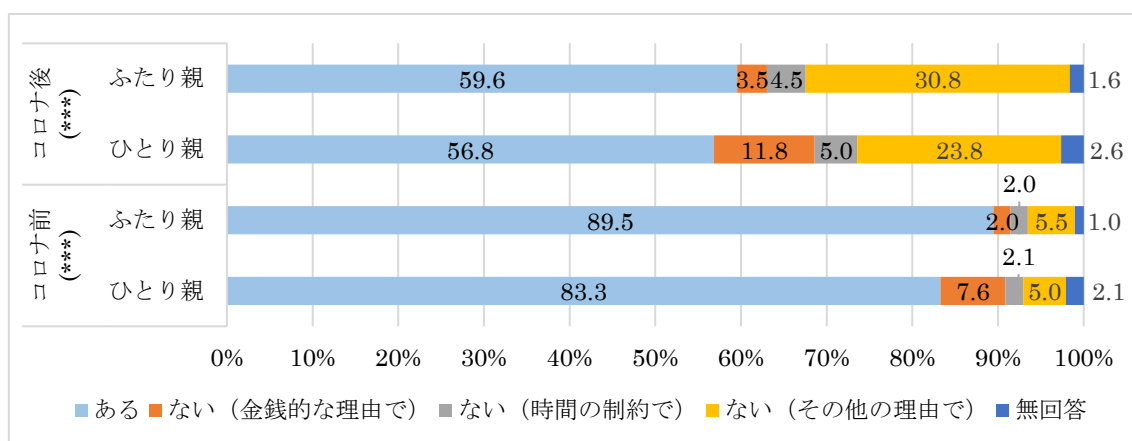


次に、「遊園地やテーマパーク」の結果について世帯タイプ別に見ると、コロナ前の小学 5 年生では、「ある」と回答した割合は、ふたり親世帯が 89.5%、ひとり親世帯が 83.3%であった。生活困難度別と同じく特に差が生じている回答は、「ない(金銭的な理由で)」であり、ふたり親世帯が 2.0%、ひとり親世帯が 7.6%であった。コロナ後では、「ある」と回答した割合は、ふたり親世帯が 59.6%、ひとり親世帯が 56.8%であり、「ない(金銭的な理由で)」は、ふたり親世帯が 3.5%、ひとり親世帯が 11.8%であった。コロナ前とコロナ後を比較すると、「あ

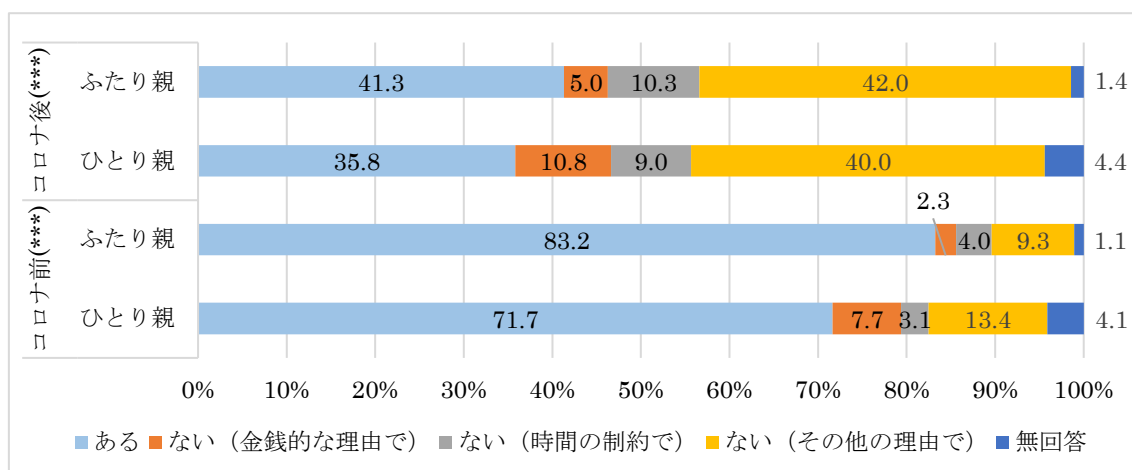
る」と回答した割合は、ふたり親世帯では 29.9 ポイント、ひとり親世帯では 26.5 ポイント減少しており、両者の格差は縮小している。一方で、「ない(金銭的な理由で)」と回答した割合は、ふたり親世帯では 1.5 ポイント、ひとり親世帯では 4.2 ポイント増加しており、格差は拡大している。

中学 2 年生でも同様の傾向が見られ、コロナ前も、コロナ後も、ふたり親世帯の方が、ひとり親世帯に比べ、「ある」の割合が多い。しかしながら、コロナ前とコロナ後を比較すると、ふたり親世帯では 41.9 ポイント、ひとり親世帯では 35.9 ポイント減少、「ない(金銭的な理由で)」と回答した割合は、ふたり親世帯では 2.7 ポイント、ひとり親世帯では 3.1 ポイント増加している。

図表 3-3-7 子どもの体験(小学 5 年生):世帯タイプ別 遊園地やテーマパーク



図表 3-3-8 子どもの体験(中学 2 年生):世帯タイプ別 遊園地やテーマパーク

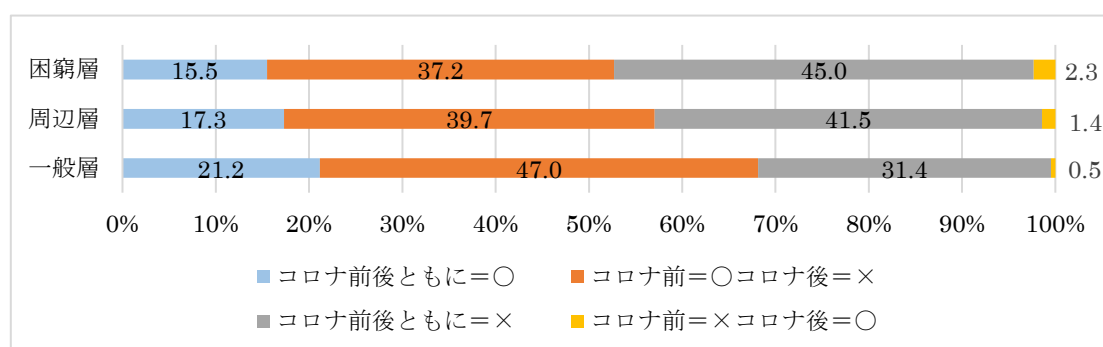


最後に、生活困難度別、世帯タイプ別にコロナ前後でどのような変化があったのかを見ていく。コロナ前後での変化が大きい体験は「海水浴」と「遊園地」であった。「海水浴」については、生活困難度別のコロナ前後の変化は、小学 5 年生では「コロナ前後ともにある(=経験した)」と回答した割合は、困窮層が 15.5%、周辺層が 17.3%、一般層が 21.2%であった。「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」と回答した割合は、困窮層が 37.2%、周辺層が 39.7%、一般層が 47.0%であった。「コロナ前後ともになかった」と回答した割合は、困窮層が 45.0%、周辺層が 41.5%、一般層が 31.4%であった。「コロナ前はなかったが、コロナ後はあった」と回答した割合は、困窮層が 2.3%、周辺層が 1.4%、一般層が 0.5%であった。中学 2 年生の海水浴では、「コロナ前後ともにある」と回答した割合は、困窮層が 9.2%、周辺層が 10.0%、一般層が 13.8%であった。「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」と回答した割合は、困窮層が 32.9%、周辺層が 43.4%、一般層が 51.1%であった。「コロナ前後ともになかった」と回答した割合は、困窮層が 57.2%、周辺層が 45.5%、一般層が 34.7%であった。「コロナ前はなかったが、コロナ後はあった」と回答した割合は、困窮層が 0.7%、周辺層が 1.1%、一般層が 0.5%であった。

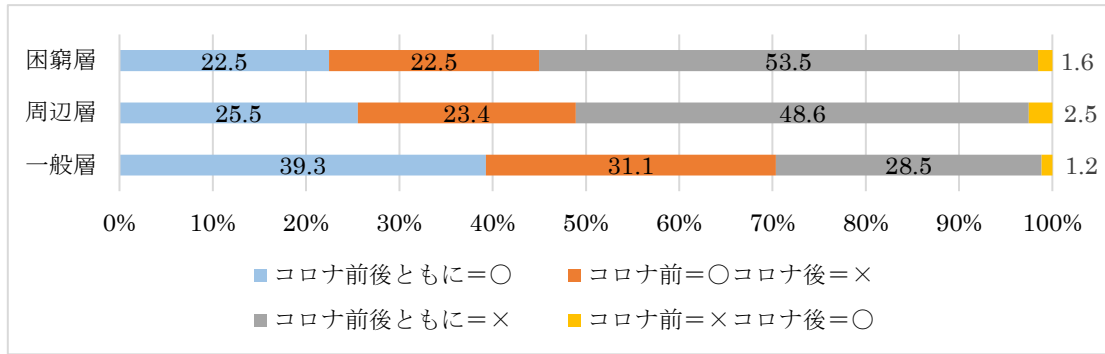
このように、「海水浴」については、「コロナ前後ともにあった」とする割合が、生活困難度が増すと減る傾向が見られると同時に、「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」とする割合は一般層の方が困窮層よりも多い。同様なことは、「博物館・美術館など」、「キャンプやバーベキュー」(小学 5 年生のみ)、「スポーツ観戦や音楽会など」、「遊園地やテーマパーク」(中学 2 年生のみ)に見られる。

小学 5 年生の「遊園地やテーマパーク」については、困窮層の方が一般層よりも「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」が多い傾向があった。

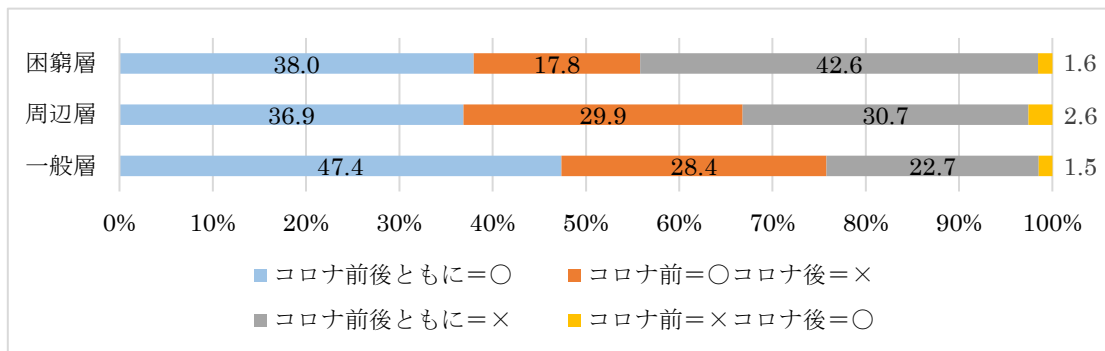
図表 3-3-9 子どもの体験(小学 5 年生):生活困難度別×コロナ前後での変化
海水浴(***)



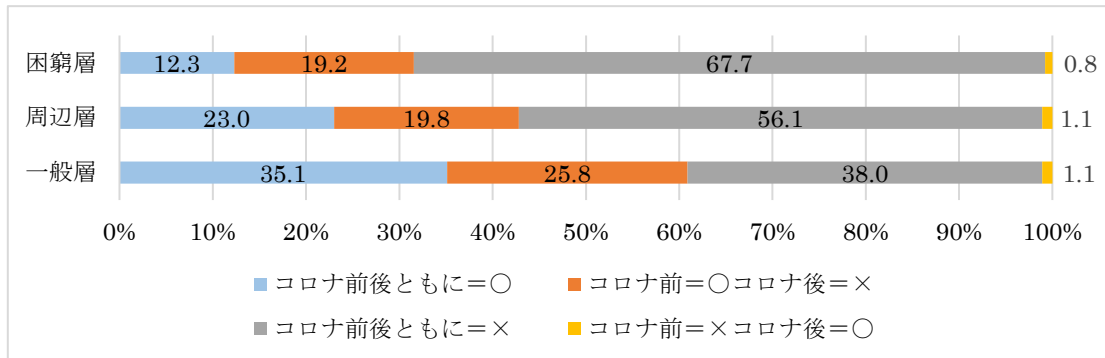
博物館・美術館など



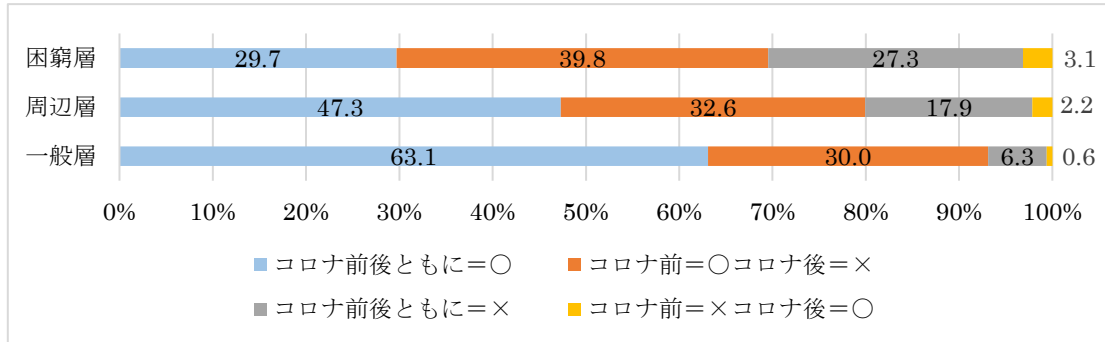
キャンプやバーベキュー(***)



スポーツ観戦や音楽会など(***)

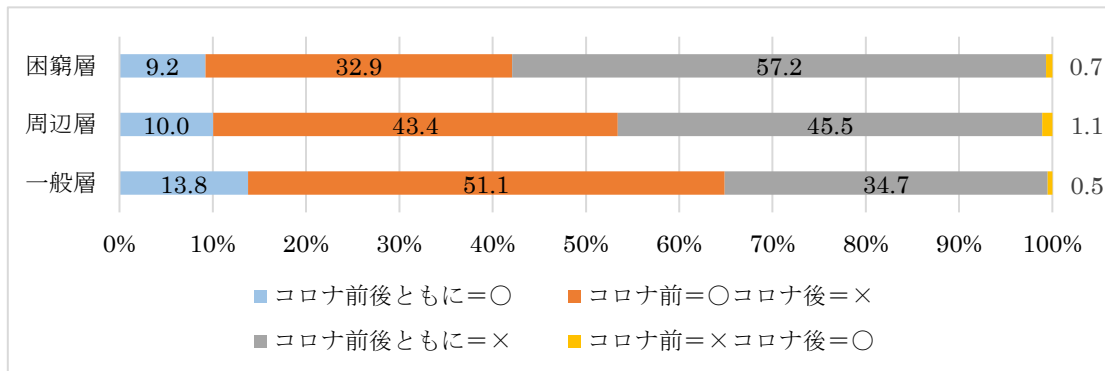


遊園地やテーマパーク(***)

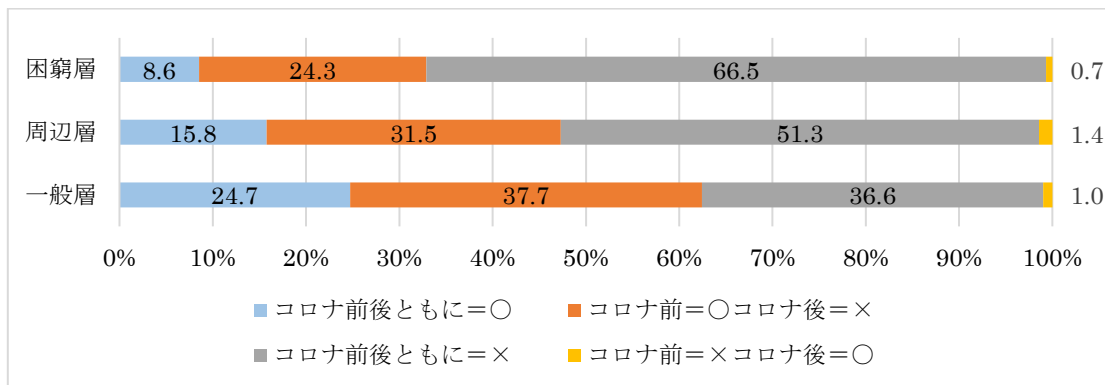


※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

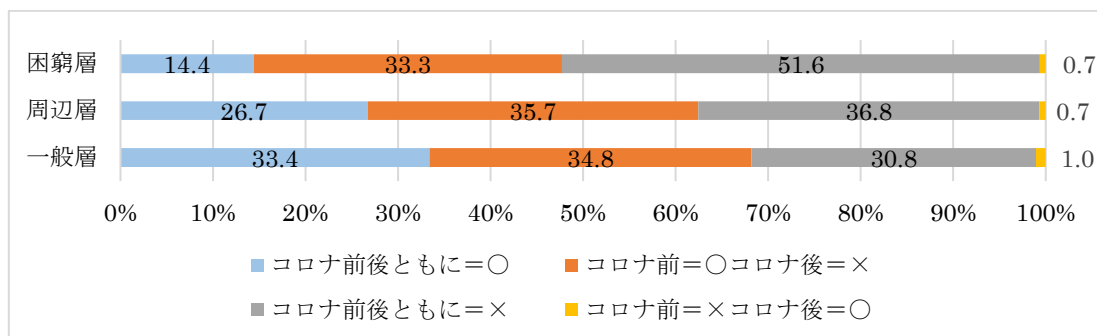
図表 3-3-10 子どもの体験(中学2年生):生活困難度別×コロナ前後での変化
海水浴(***)



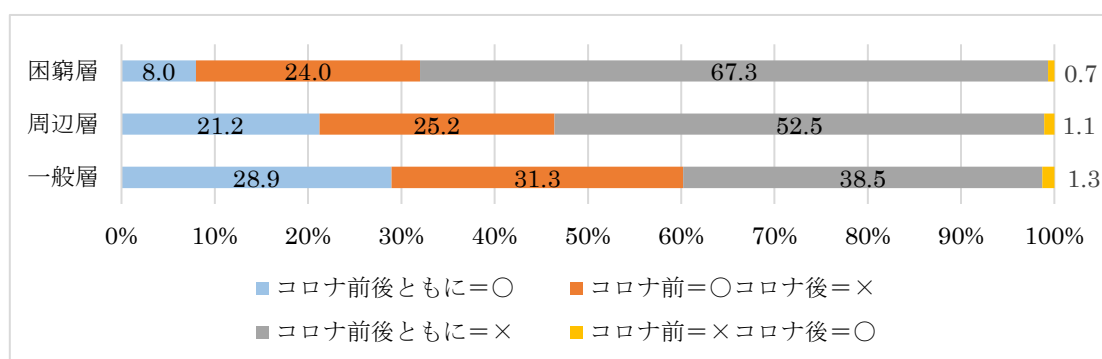
博物館・美術館など(***)



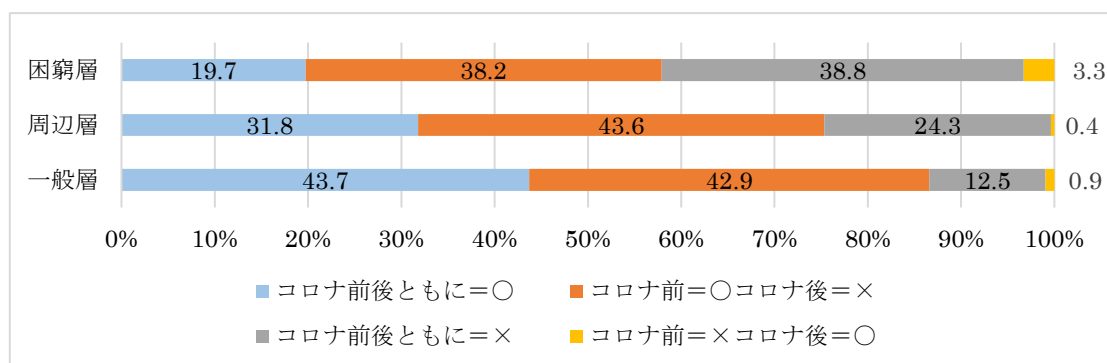
キャンプやバーベキュー(***)



スポーツ観戦や音楽会など(X)



遊園地やテーマパーク(***)



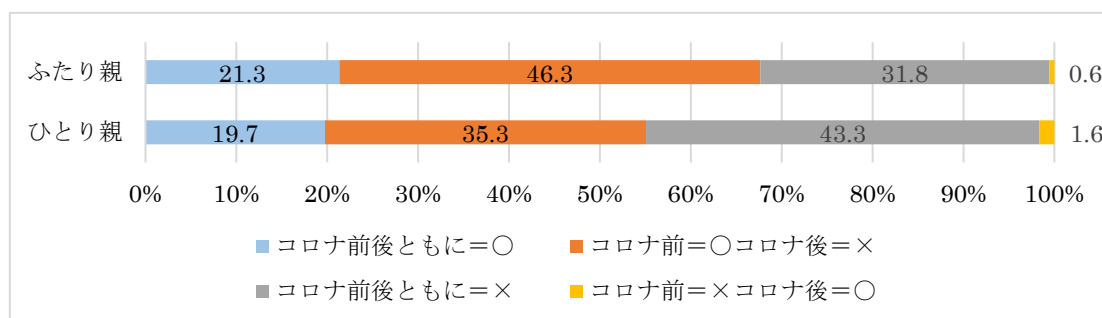
※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

次に、世帯タイプ別のコロナ前後での変化については、小学5年生の海水浴では、「コロナ前後ともにある」と回答した割合は、ふたり親世帯が21.3%、ひとり親世帯が19.7%であった。「コロナ前はあったが、コロナ後はなかった」と回答した割合は、ふたり親世帯が46.3%、ひとり親世帯が35.3%であった。「コロナ前後ともになかった」と回答した割合は、ふたり親世帯が31.8%、ひとり親世帯が43.3%であった。「コロナ前はなかったが、コロナ後はあった」と回答した割合は、ふたり親世帯が0.6%、ひとり親世帯が1.6%であった。

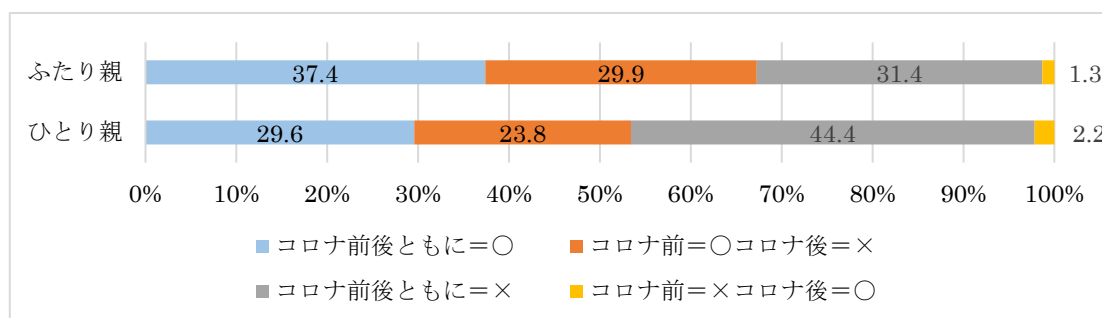
他の子どもの体験の項目についても、ふたり親世帯の方がひとり親世帯よりも「コロナ前は

あったが、コロナ後はなかった」とする割合が多い傾向が見られるものの、依然として、「コロナ前後ともにあった」とする割合はふたり親世帯の方が多(中学2年生の「海水浴」を除く)。

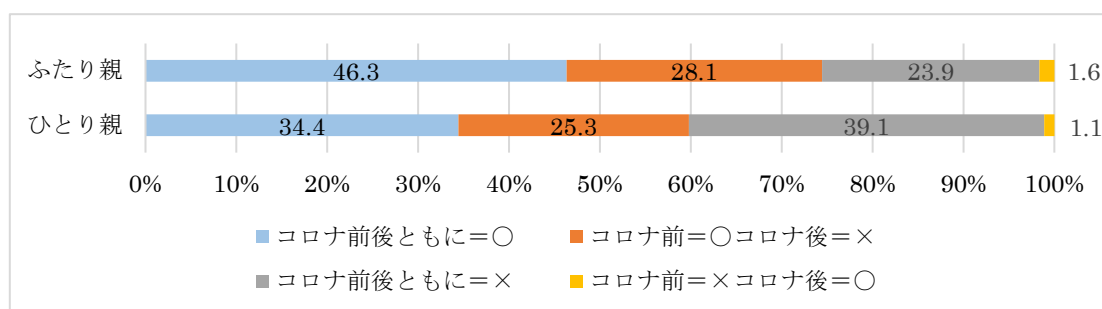
図表 3-3-11 子どもの体験(小学5年生):世帯タイプ別×コロナ前後での変化
海水浴(***)



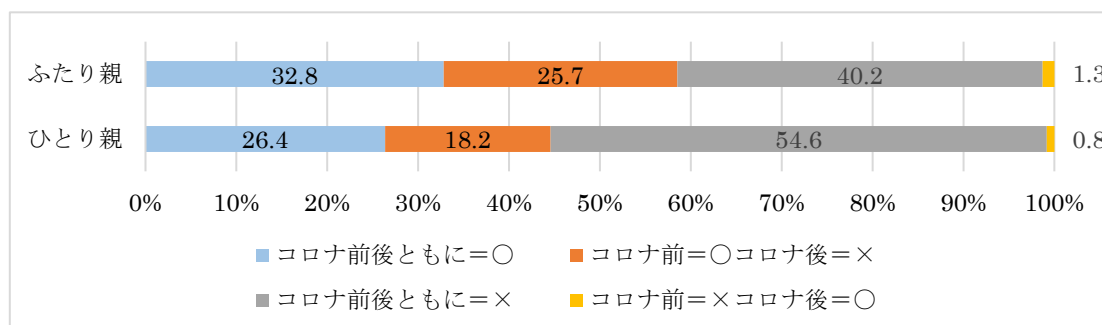
博物館・美術館など(***)



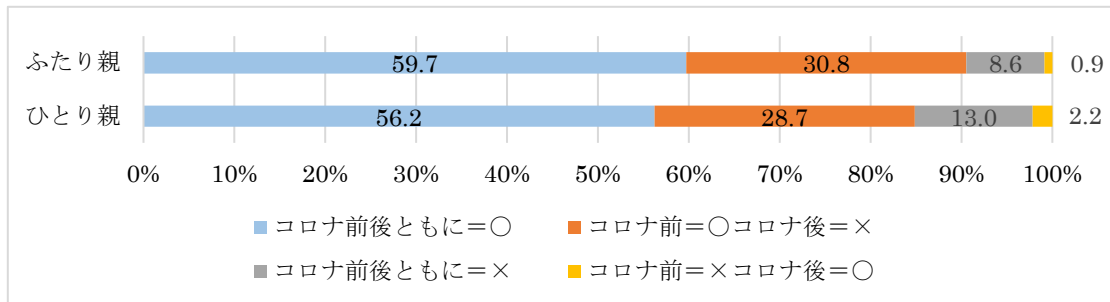
キャンプやバーベキュー(***)



スポーツ観戦や音楽会など(***)

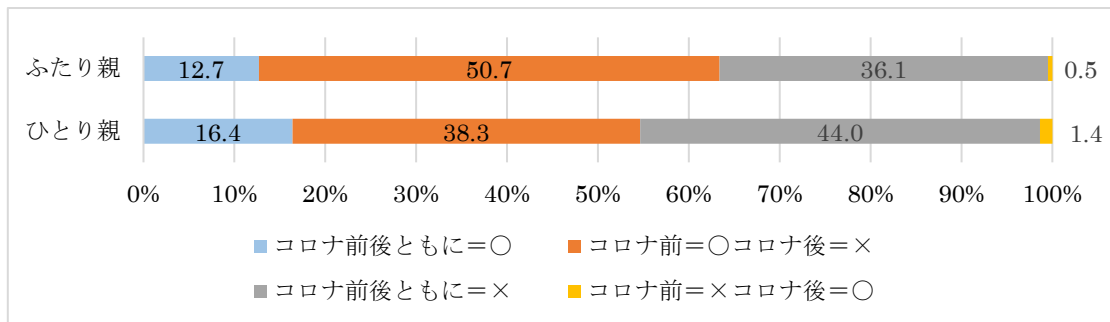


遊園地やテーマパーク(***)

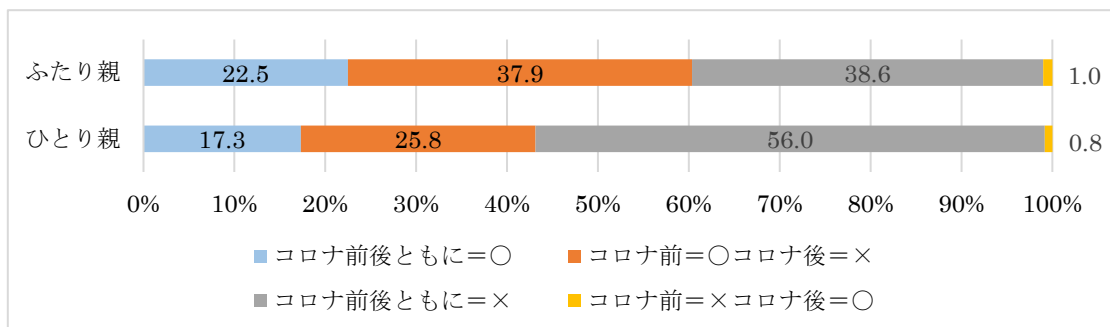


※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

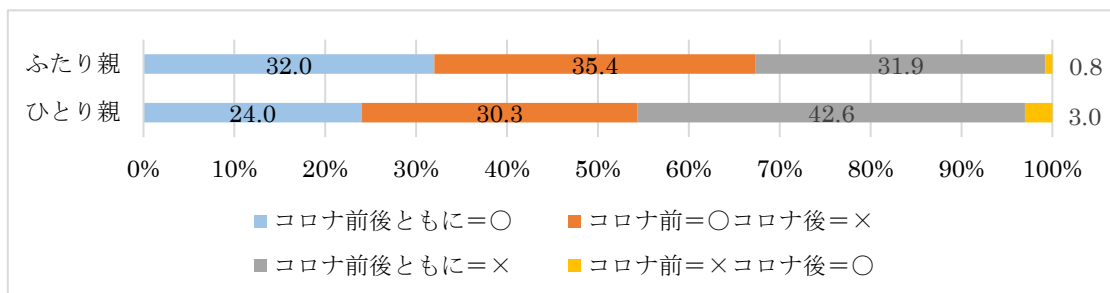
図表 3-3-12 子どもの体験(中学2年生):世帯タイプ別×コロナ前後での変化
海水浴(***)



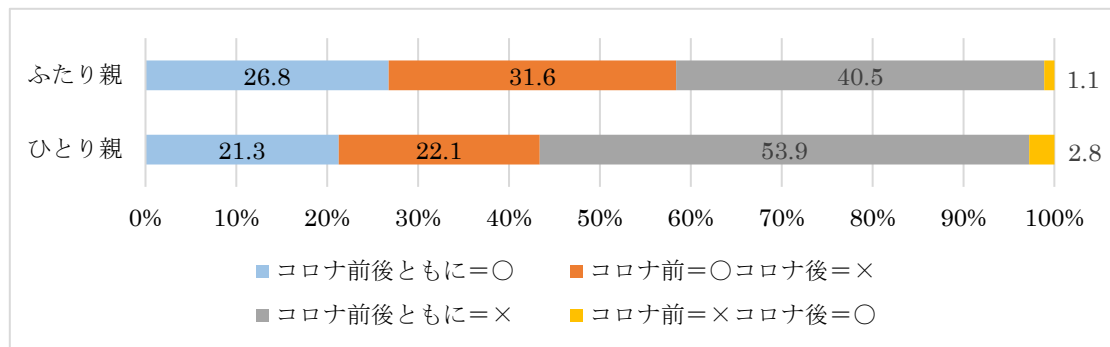
博物館・美術館など(***)



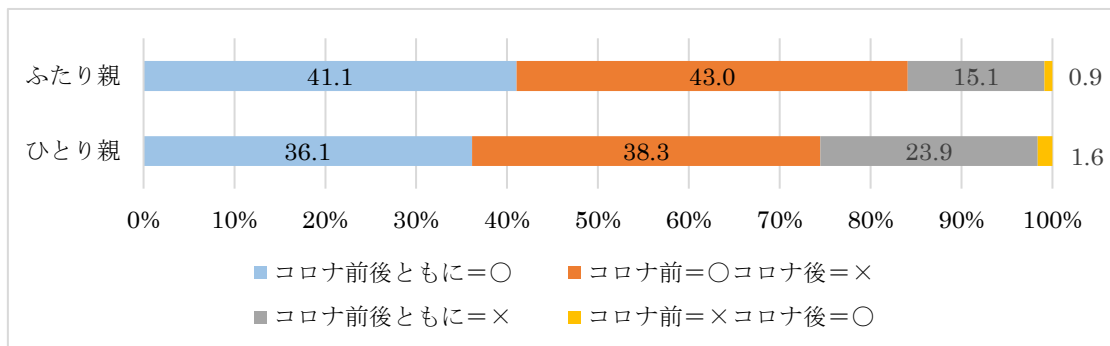
キャンプやバーベキュー(X)



スポーツ観戦や音楽会など(***)



遊園地やテーマパーク(***)



※無回答は欠損処理をして分析を行った。「ある」を「体験がある」とし、「ない(金銭的な理由で)」「ない(時間の制約で)」「ない(その他の理由で)」を「体験がない」とした。また、作図の都合上「体験がある」を「○」、「体験がない」を「×」として表記した。

4. 子どもの食と栄養

八王子市の子どもの食と栄養について、朝食の摂取状況と食品群別の摂取状況を見ていく。

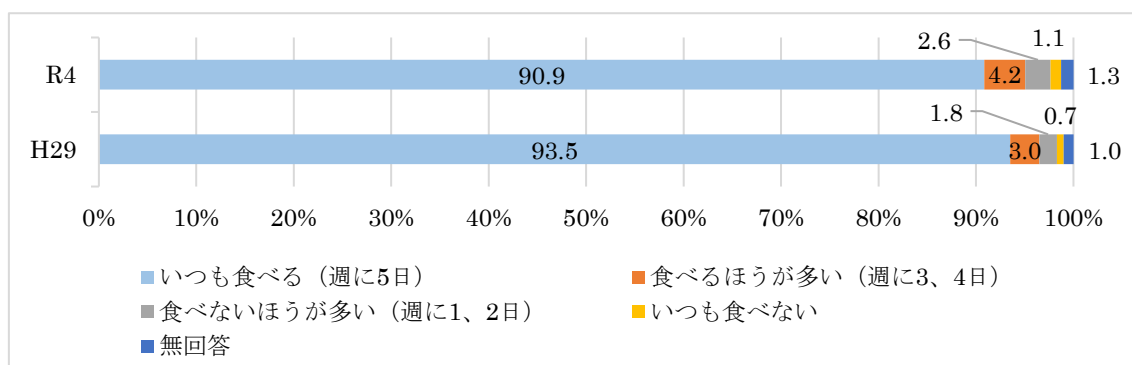
朝食の摂取状況では、子ども票の問 16「あなたは、平日(学校に行く日)に毎日、朝ごはんを食べますか。」という設問において、「いつも食べる(週に 5 日)」「食べるほうが多い(週に 3、4 日)」「食べないほうが多い(週に 1、2 日)」「いつも食べない」という 4 つの選択肢から聞いている。

食品群別の摂取状況では、子ども票の問 18「あなたは、給食をのぞいて、以下の食べ物をふだんどれくらい食べますか。」という設問で、「野菜」、「くだもの」、「肉や魚」、「カップめん・インスタントめん」、「買ってきたおにぎり・お弁当」、「お菓子」のそれぞれについて、食べる頻度を 5 つの選択肢(毎日食べる、1 週間に 4~5 日、1 週間に 2~3 日、1 週間に 1 日以下、食べない)から聞いている。

(1) 朝食の摂取状況

小学 5 年生の 90.9%は、「いつも食べる(週に 5 日)」と回答しており、ほとんどの子どもは朝食を食べている。しかしながら、一部においては食べていない子どもが存在する。小学 5 年生では「食べるほうが多い(週に 3、4 日)」が 4.2%、「食べないほうが多い(週に 1、2 日)」が 2.6%、「いつも食べない」が 1.1%となっており、計 7.9%の子どもが、平日に毎日は朝食を食べていなかった。前回調査(H29)では、小学 5 年生のうち、93.5%が「いつも食べる(週に 5 日)」と回答した。また、「食べるほうが多い(週に 3、4 日)」が 3.0%、「食べないほうが多い(週に 1、2 日)」が 1.8%、「いつも食べない」が 0.7%となっており、計 5.5%の子どもが、平日に毎日は朝食を食べていなかった。前回調査に比べ、今回調査の方が、若干、朝食の摂取頻度が少なくなっている。

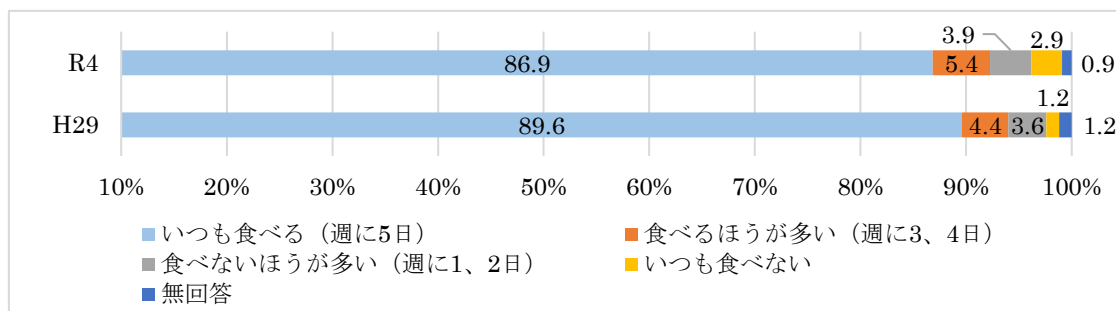
図表 3-4-1 朝食の摂取状況(小学5年生):全体(**)



中学 2 年生においては、「いつも食べる(週に 5 日)」と回答したのは 86.9%であった。毎日朝食を食べていない子どもは、「食べるほうが多い(週に 3、4 日)」が 5.4%、「食べないほうが多い(週に 1、2 日)」が 3.9%、「いつも食べない」が 2.9%となっており、計 12.2%の子どもが、平日に毎日は朝食を食べていない。前回調査(H29)では、中学 2 年生のうち、

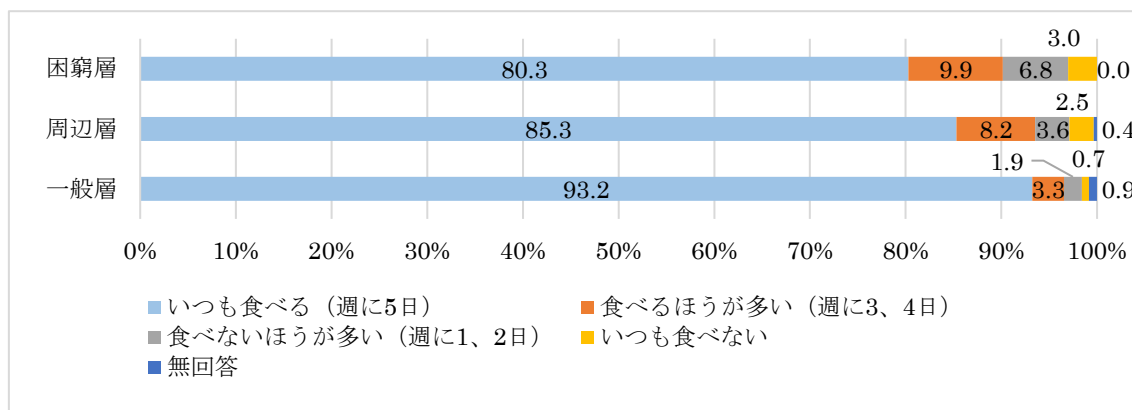
89.6%が「いつも食べる(週に5日)」と回答した。また、「食べるほうが多い(週に3、4日)」4.4%、「食べないほうが多い(週に1、2日)」3.6%、「いつも食べない」が1.2%となっており、計9.2%の子どもが、平日に毎日は朝食を食べていなかった。小学5年生と同様に、前回調査に比べ、今回調査の方が、若干、朝食の摂取頻度が少なくなっている。

図表 3-4-2 朝食の摂取状況(中学2年生):全体(***)

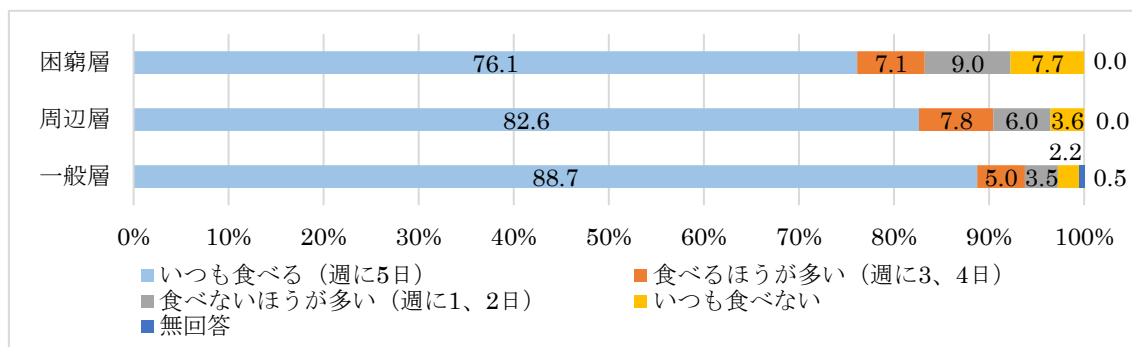


朝食の摂取状況を生活困難度別に見ると、小学5年生、中学2年生ともに、朝食を食べる頻度に統計的に有意な差があることがわかった。生活困難度別では、「いつも食べる(週に5日)」と回答した割合が、一般層では93.2%、周辺層では85.3%であるのに対して、困窮層では80.3%であり、困窮層は一般層よりも12.9ポイント低かった。中学2年生においては、「いつも食べる(週に5日)」と回答した割合が一般層では88.7%であるのに対して困窮層では76.1%であり、12.6ポイント低かった。

図表 3-4-3 朝食の摂取状況(小学5年生):生活困難度別(***)

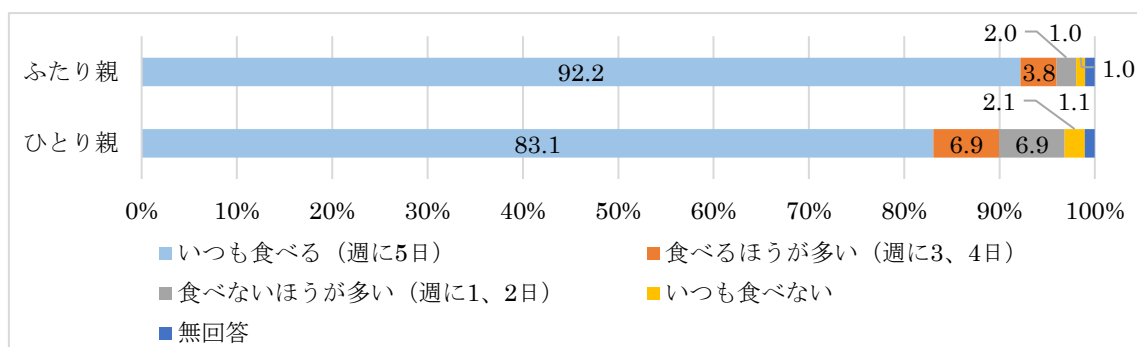


図表 3-4-4 朝食の摂取状況(中学2年生):生活困難度別(***)

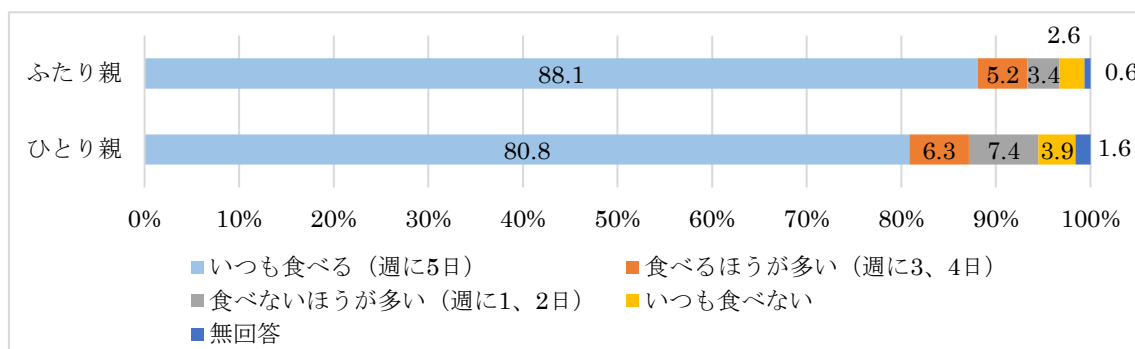


世帯タイプ別に朝食の摂取状況を見たところ、小学5年生、中学2年生ともにふたり親世帯とひとり親世帯では統計的に有意な差があった。小学5年生では、「いつも食べる(週に5日)」と回答した割合がふたり親世帯では92.2%であるのに対してひとり親世帯では83.1%であり、9.1ポイント低かった。中学2年生では、「いつも食べる(週に5日)」と回答した割合がふたり親世帯では88.1%であるのに対してひとり親世帯では80.8%であり、7.3ポイント低かった。

図表 3-4-5 朝食の摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)



図表 3-4-6 朝食の摂取状況(中学2年生):世帯タイプ別(***)



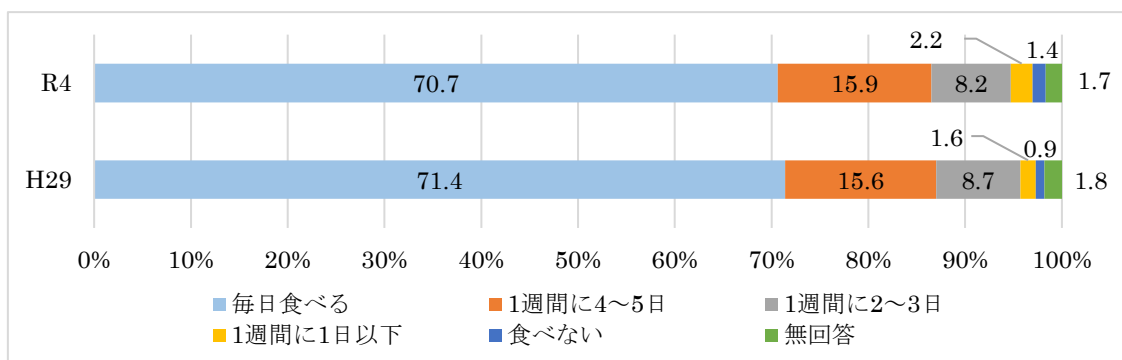
(2)食品群別の摂取状況 全体

食品群別の摂取状況について、まずはそれぞれの食品の全体の結果を、「野菜」「くだもの」「肉や魚」「カップめん・インスタントめん」「買ってきたおにぎり・お弁当」「お菓子」の順に見ていく。

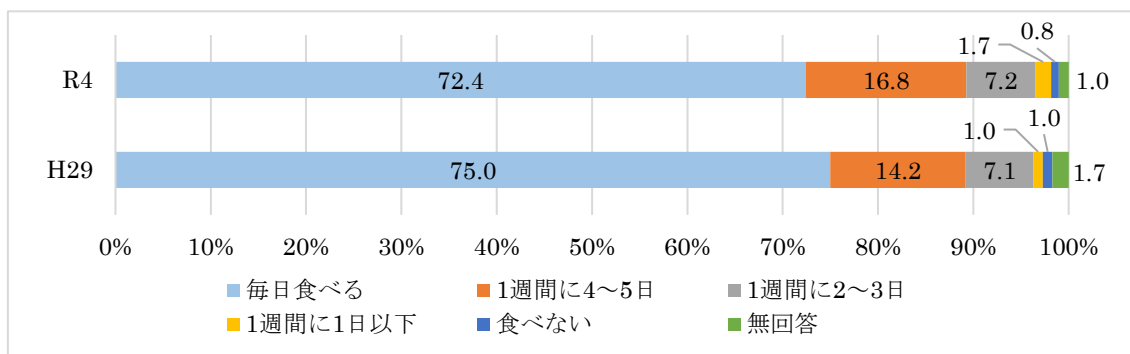
まず、「野菜」について見ていく。小学 5 年生においてもっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の 70.7%である。次いで 15.9%が「1 週間に 4～5 日」、8.2%が「1 週間に 2～3 日」と答えている。また、ごく僅かであるが、「1 週間に 1 日以下」(2.2%)、もしくは「食べない」(1.4%)という子どもも存在する。前回調査(H29)では、小学 5 年生の 71.4%は給食以外にも「毎日食べる」、15.6%が「1 週間に 4～5 日」、8.7%が「1 週間に 2～3 日」と答えていた。また、「1 週間に 1 日以下」(1.6%)、もしくは「食べない」(0.9%)という子どもも存在していた。前回調査と比べると、統計的に有意な差はなかった。

中学 2 年生では、もっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の 72.4%である。次いで 16.8%が「1 週間に 4～5 日」、7.2%が「1 週間に 2～3 日」、1.7%が「1 週間に 1 日以下」、0.8%が「食べない」と答えている。前回調査(H29)では、「毎日食べる」は 75.0%、「1 週間に 4～5 日」は 14.2%、「1 週間に 2～3 日」は 7.1%、「1 週間に 1 日以下」は 1.0%、「食べない」は 1.0%であった。前回調査と比べると、若干、「毎日食べる」が減少している。

図表 3-4-7 野菜の摂取状況(小学5年生):全体(X)



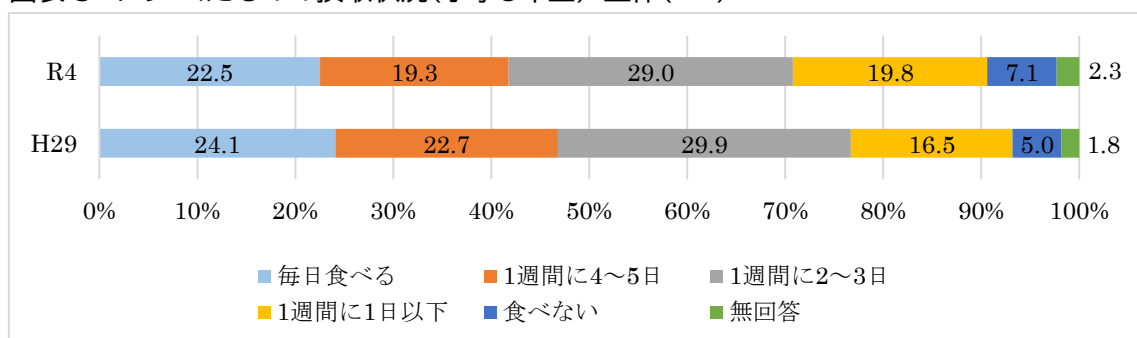
図表 3-4-8 野菜の摂取状況(中学2年生):全体(*)



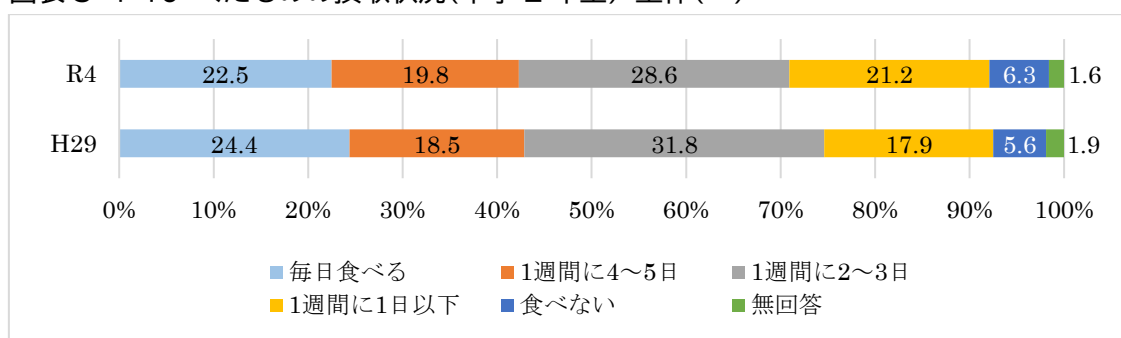
「くだもの」については、もっとも割合の高い回答は「1週間に2～3日」の29.0%である。次いで「毎日」が22.5%、「1週間に1日以下」が19.8%となっている。一方、果物をまったく「食べない」子どもは7.1%となっている。前回調査(H29)では、「1週間に2～3日」は29.9%、「毎日食べる」の24.1%、まったく「食べない」子どもは5.0%であった。前回調査と比べると、「くだもの」の摂取頻度が若干減少している。

中学2年生では、もっとも割合の高い回答は「1週間に2～3日」の28.6%である。次いで「毎日」が22.5%、「1週間に1日以下」が19.8%となっている。前回調査(H29)では、今回調査と同様にもっとも割合の高い回答は「1週間に2～3日」の31.8%であり、次いで「毎日食べる」が24.4%、「1週間に4～5日」が18.5%となっていた。小学5年生と同様に、前回調査と比べると、若干、「くだもの」の摂取頻度が減少している。

図表 3-4-9 くだもの摂取状況(小学5年生):全体(***)



図表 3-4-10 くだもの摂取状況(中学2年生):全体(**)

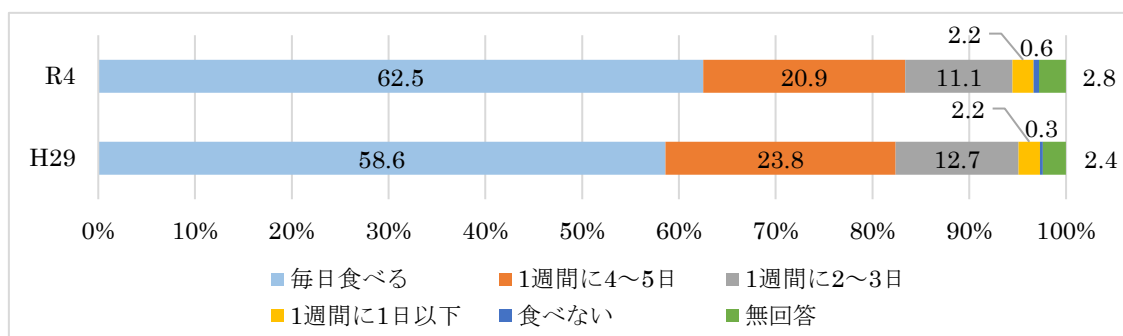


「肉や魚」については、もっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の62.5%である。次いで「1週間に4～5日」が20.9%、「1週間に2～3日」が11.1%となっている。一方、「肉や魚」を「1週間に1日以下」と答えた子どもは2.2%、「食べない」と答えた子どもは0.6%となっている。これを前回調査(H29)と比べると、「毎日食べる」は58.6%となっており、今回調査の方が高い数値となっている。「1週間に1日以下」と「食べない」の割合はほぼ同じであった。

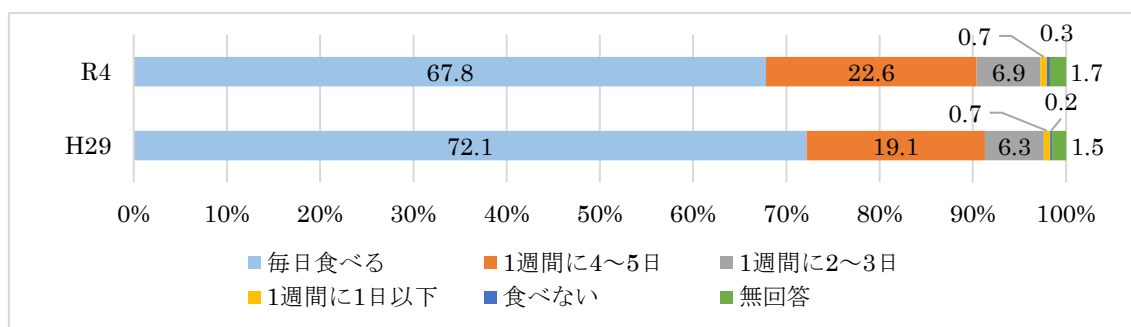
中学2年生では、もっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の67.8%である。次いで、「1週間に4～5日」が22.6%、「1週間に2～3日」が6.9%となっている。前回調査(H29)では、今回調査と同様にもっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の72.1%である。次いで、「1週

間に「4～5日」が19.1%、「1週間に2～3日」が6.3%となっていた。中学2年生では、前回調査に比べ、「肉や魚」の摂取頻度の統計的に有意な差はない。

図表 3-4-11 肉や魚の摂取状況(小学5年生):全体(**)



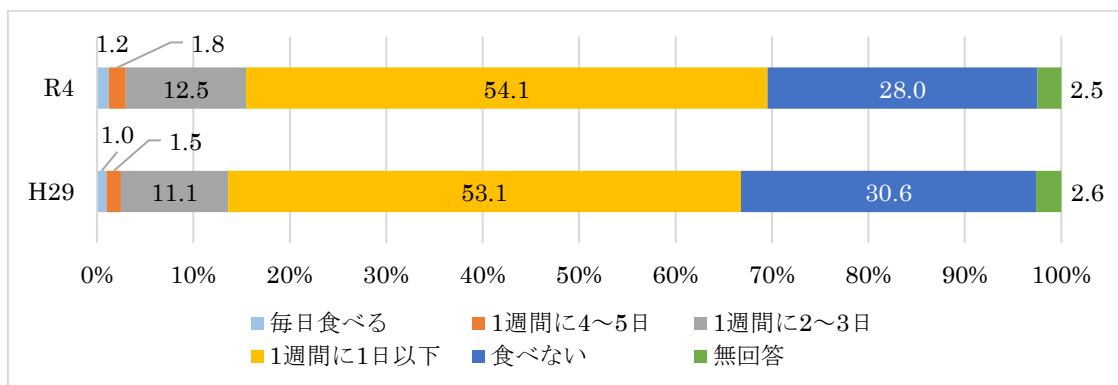
図表 3-4-12 肉や魚の摂取状況(中学2年生):全体(X)



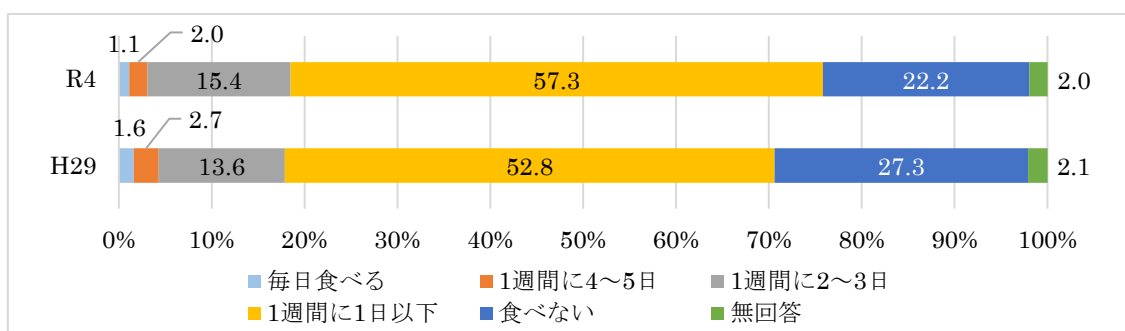
「カップめん・インスタントめん」については、小学5年生では、もっとも割合の高い回答は「1週間に1日以下」の54.1%である。次いで、「食べない」が28.0%、「1週間に2～3日」が12.5%となっている。一方で、「毎日食べる」は1.2%、「1週間に4～5日」と答えた子どもも1.8%存在する。前回調査(H29)では、今回調査と同様の傾向であり、「1週間に1日以下」は53.1%、「食べない」が30.6%、「1週間に2～3日」が11.1%となっていた。前回調査に比べ、統計的に有意な差はない。

中学2年生では、もっとも割合の高い回答は「1週間に1日以下」の57.3%である。次いで、「食べない」が22.2%、「1週間に2～3日」が15.4%となっている。前回調査(H29)では、今回調査と同様の傾向であり、「1週間に1日以下」は52.8%、「食べない」は27.3%、「1週間に2～3日」が13.6%となっていた。しかし、前回調査に比べ、「食べない」が約5ポイント少ない一方で、「1週間に2～3日」が約2ポイント多いなどの差があった。

図表 3-4-13 カップめん・インスタントめんの摂取状況(小学5年生):全体(X)



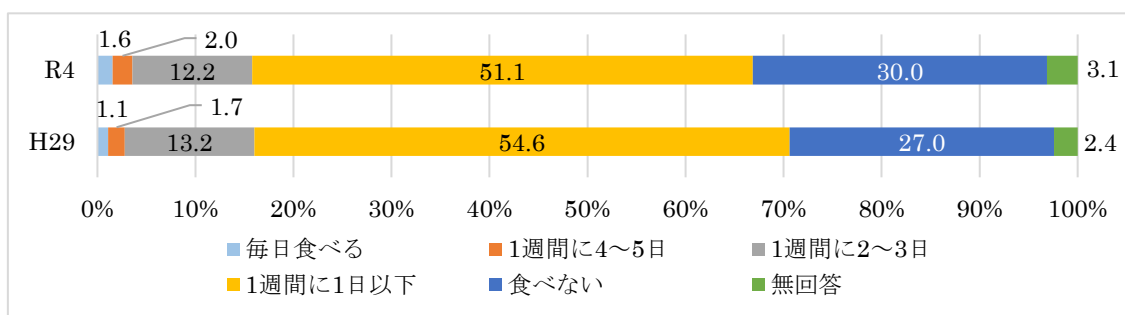
図表 3-4-14 カップめん・インスタントめんの摂取状況(中学2年生):全体(***)



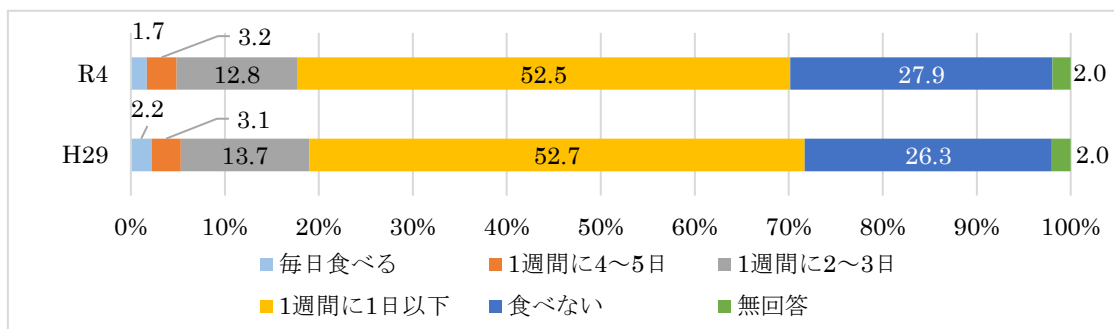
「買ってきたおにぎり・お弁当」については、もっとも割合の高い回答は「1週間に1日以下」の51.1%である。次いで、「食べない」が30.0%、「1週間に2~3日」が12.2%となっている。前回調査(H29)では、今回調査と同様にもっとも割合の高い回答は「1週間に1日以下」の54.6%であり、次いで、「食べない」が27.0%、「1週間に2~3日」が13.2%となっていた。前回調査に比べ、若干、摂取頻度が減っている。

中学2年生では、「買ってきたおにぎり・お弁当」については、もっとも割合の高い回答は「1週間に1日以下」の52.5%である。次いで、「食べない」が27.9%、「1週間に2~3日」が12.8%となっている。前回調査(H29)では、「1週間に1日以下」は52.7%、「食べない」が26.3%、「1週間に2~3日」が13.7%となっていた。前回調査に比べ、統計的に有意な差はない。

図表 3-4-15 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(小学5年生):全体(**)



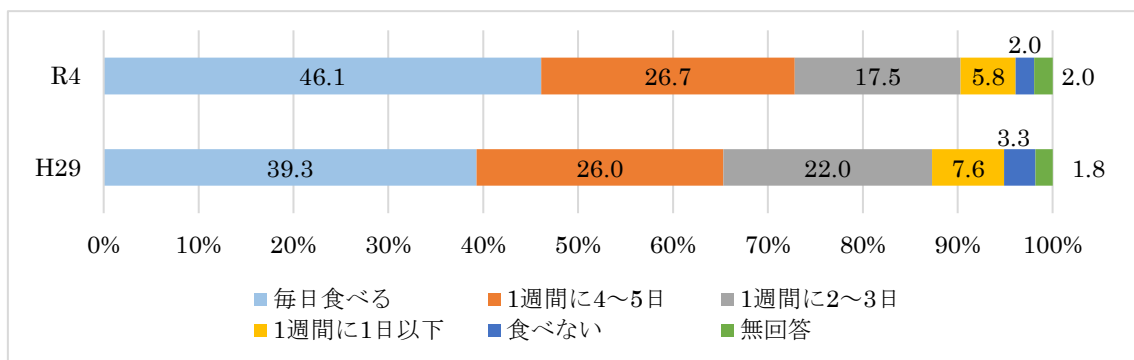
図表 3-4-16 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(中学2年生):全体(X)



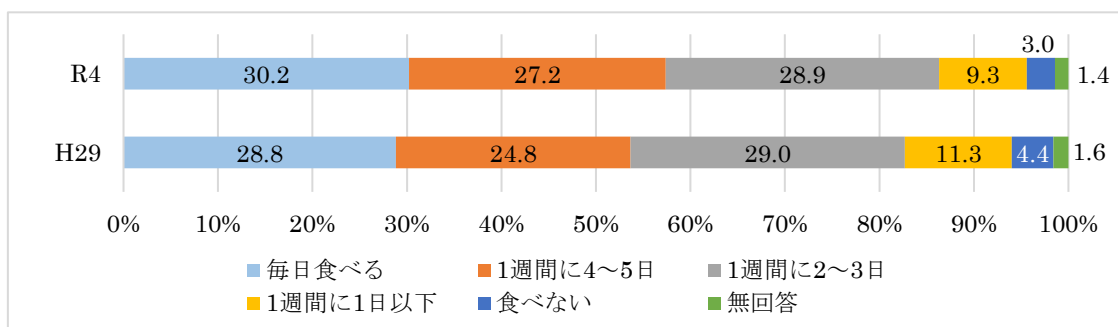
「お菓子」については、もっとも割合の高い回答は「毎日食べる」の46.1%である。次いで、「1週間に4~5日」が26.7%、「1週間に2~3日」が17.5%となっている。前回調査(H29)では、「毎日食べる」の割合は39.3%であり、「1週間に4~5日」が26.0%、「1週間に2~3日」が22.0%となっていた。前回調査に比べ、「毎日食べる」の割合が、約ポイント多いなど、統計的に有意な差が見られた。

中学2年生では、「毎日食べる」が30.2%、「1週間に4~5日」が27.2%、「1週間に2~3日」が28.9%となっている。前回調査(H29)では、「毎日食べる」が28.8%、「1週間に4~5日」は24.8%、「1週間に2~3日」は29.0%となっていた。中学2年生においては、前回調査に比べ、統計的に有意な差はない。

図表 3-4-17 お菓子の摂取状況(小学5年生):全体(***)



図表 3-4-18 お菓子の摂取状況(中学2年生):全体(**)



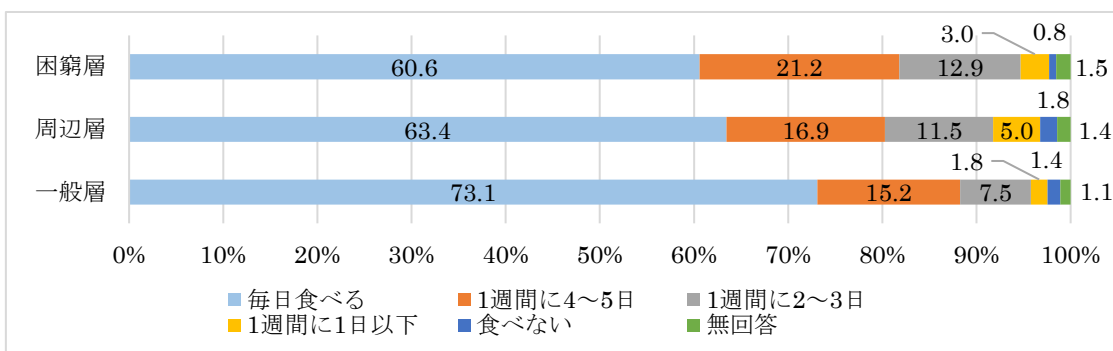
(3)食品群別の摂取状況 生活困難度別

食品群別の摂取状況の生活困難度別の結果について、「野菜」「くだもの」「肉や魚」「カップめん・インスタントめん」「買ってきたおにぎり・お弁当」「お菓子」の順に見ていく。

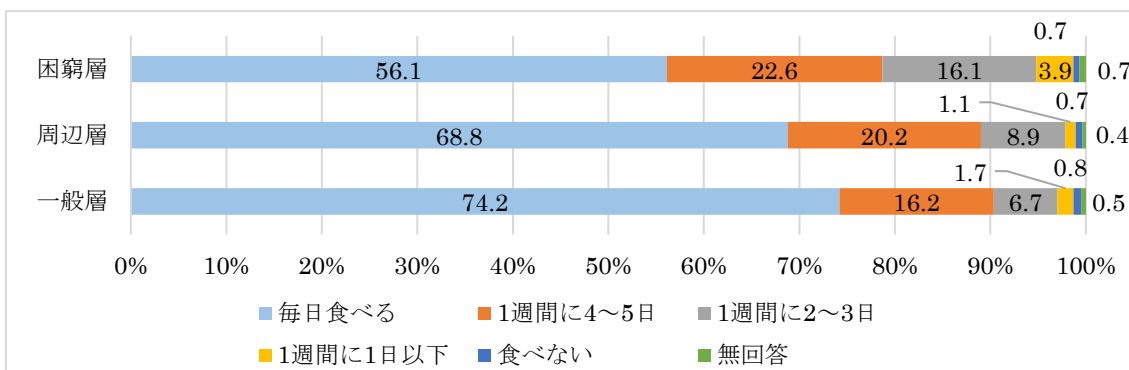
生活困難度別に「野菜」の摂取状況を見たところ、小学5年生、中学2年生ともに生活困難度によって「野菜」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。小学5年生では、一般層では、「毎日食べる」と回答した割合が73.1%であったのに対し、困窮層では60.6%であり、12.5ポイント低かった。

中学2年生では、一般層で、「毎日食べる」と回答した割合が74.2%であったのに対し、困窮層では56.1%であり、18.1ポイント低かった。

図表 3-4-19 野菜の摂取状況(小学5年生):生活困難度別(***)

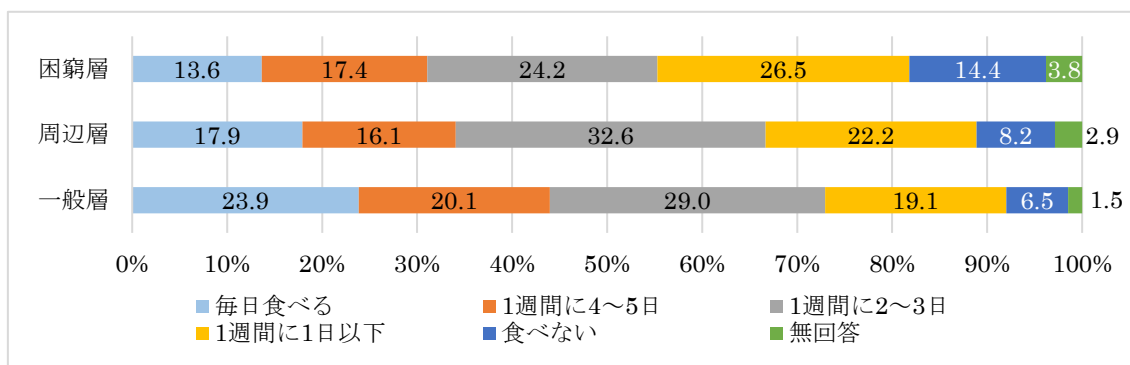


図表 3-4-20 野菜の摂取状況(中学2年生):生活困難度別(***)

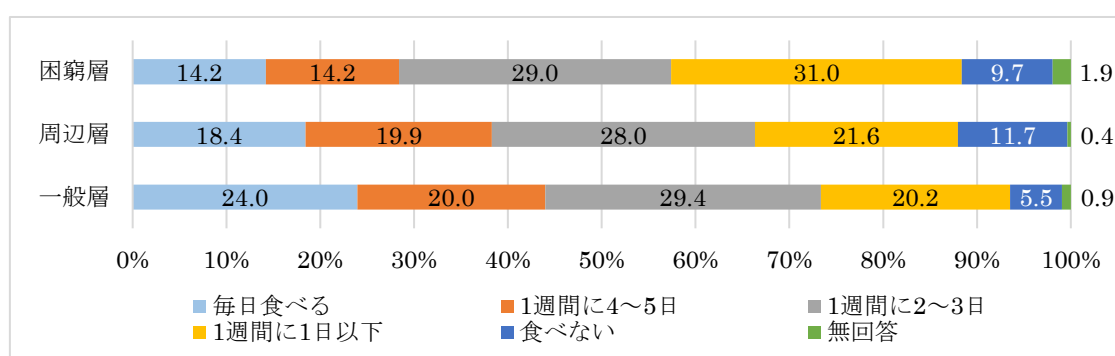


生活困難度別に「くだもの」の摂取状況を見たところ、小学5年生、中学2年生ともに生活困難度によって「くだもの」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。小学5年生では、「毎日食べる」と答えた割合が一般層では23.9%であったのに対し、周辺層では17.9%、困窮層では13.6%であり、困窮層は一般層よりも10.3ポイント低かった。中学2年生では、一般層では、「毎日食べる」と回答した割合が24.0%であったのに対し、困窮層では14.2%であり、9.8ポイント低かった。

図表 3-4-21 くだものの摂取状況(小学5年生):生活困難度別(***)

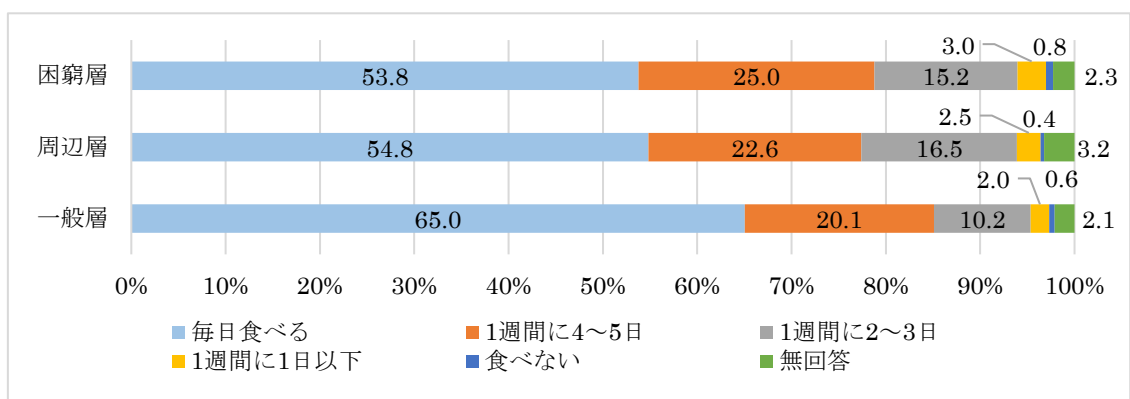


図表 3-4-22 くだものの摂取状況(中学2年生):生活困難度別(***)

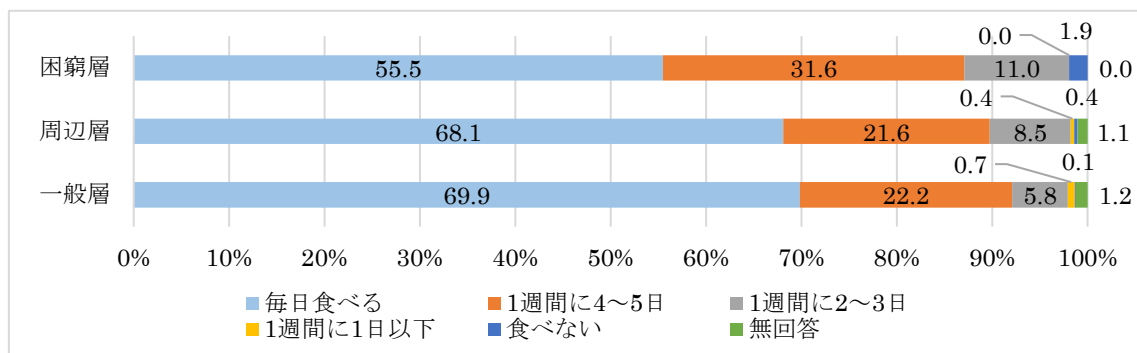


生活困難度別に「肉や魚」の摂取状況を見たところ、小学5年生、中学2年生ともに生活困難度によって「肉や魚」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。小学5年生では、「毎日食べる」と回答した割合が一般層で65.0%であったのに対し、困窮層では53.8%であり、困窮層の方が11.2ポイント低かった。中学2年生では、「毎日食べる」と回答した割合について、一般層では69.9%であったのに対し、困窮層では55.5%であり、困窮層の方が14.4ポイント低かった。

図表 3-4-23 肉や魚の摂取状況(小学5年生):生活困難度別(**)

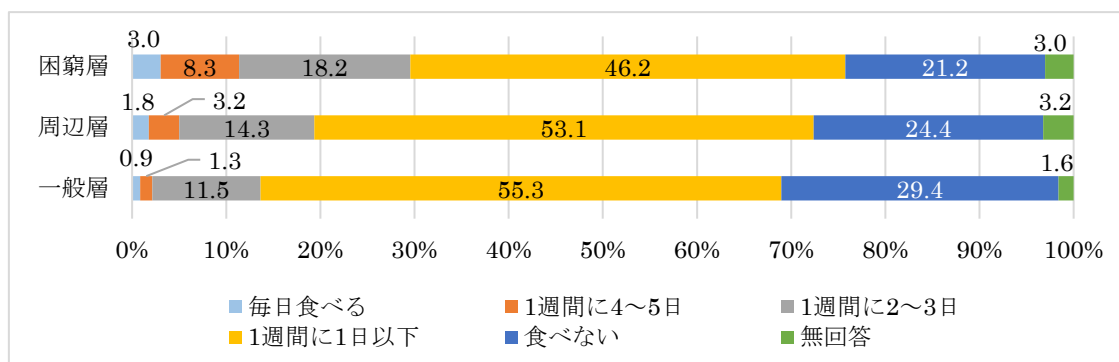


図表 3-4-24 肉や魚の摂取状況(中学 2 年生):生活困難度別(***)

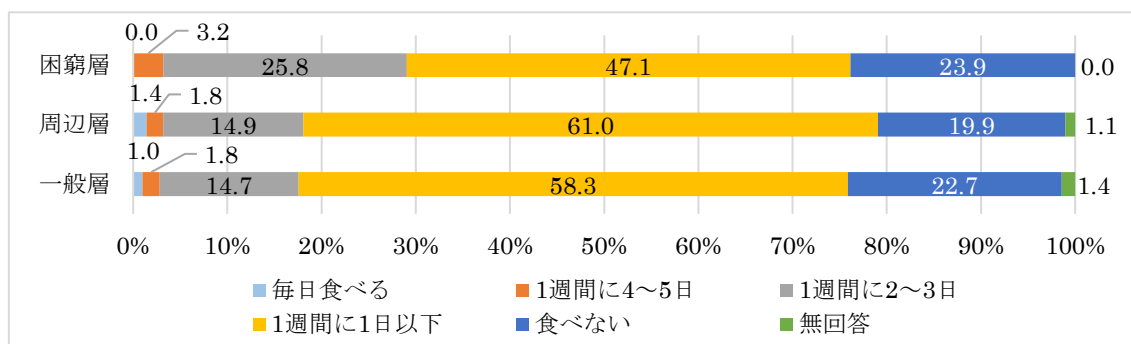


生活困難度別に「カップめん・インスタントめん」の摂取状況を見たところ、小学 5 年生、中学 2 年生ともに生活困難度によって「カップめん・インスタントめん」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。小学 5 年生で、「毎日食べる」「1 週間に 4~5 日」または「1 週間に 2~3 回」と回答した割合は、一般層では 13.7%であったのに対し、周辺層では 19.3%、困窮層では 29.5%で、生活困難層ほど高い。中学 2 年生では、「毎日食べる」「1 週間に 4~5 日」または「1 週間に 2~3 回」と回答した割合は、一般層では 17.5%、周辺層では 18.1%、困窮層では 29.0%であり、困窮層の高さが目立つ。

図表 3-4-25 カップめん・インスタントめんの摂取状況(小学5年生):生活困難度別(***)

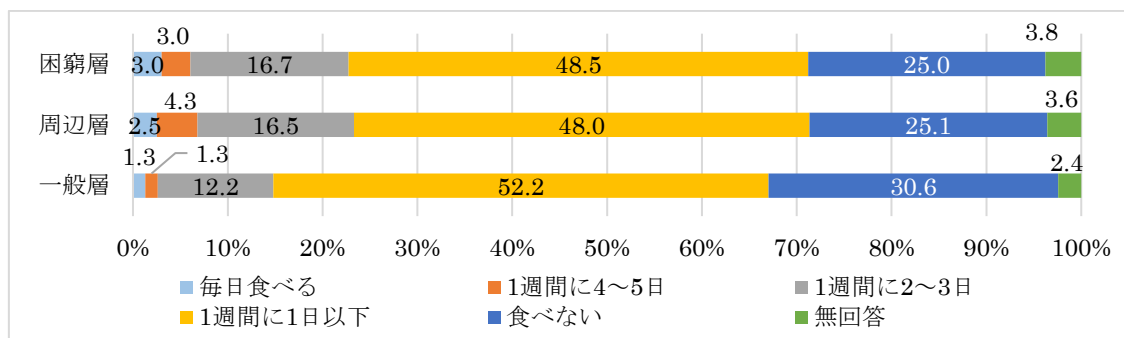


図表 3-4-26 カップめん・インスタントめんの摂取状況(中学 2 年生):生活困難度別(**)

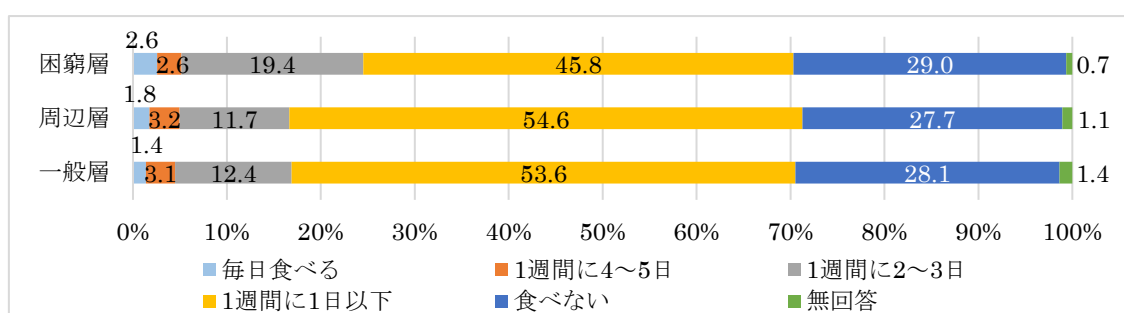


生活困難度別に「買ってきたおにぎり・お弁当」の摂取状況を見たところ、小学5年生では統計的に有意な差が見られ、「毎日食べる」「1週間に4～5日」または「1週間に2～3回」と回答した割合は、一般層が14.8%、周辺層は23.3%、困窮層では22.7%で、一般層が目立って低い。中学2年生では、生活困難度によって「買ってきたおにぎり・お弁当」を食べる頻度に有意な差はなかった。

図表 3-4-27 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(小学5年生):生活困難度別(***)

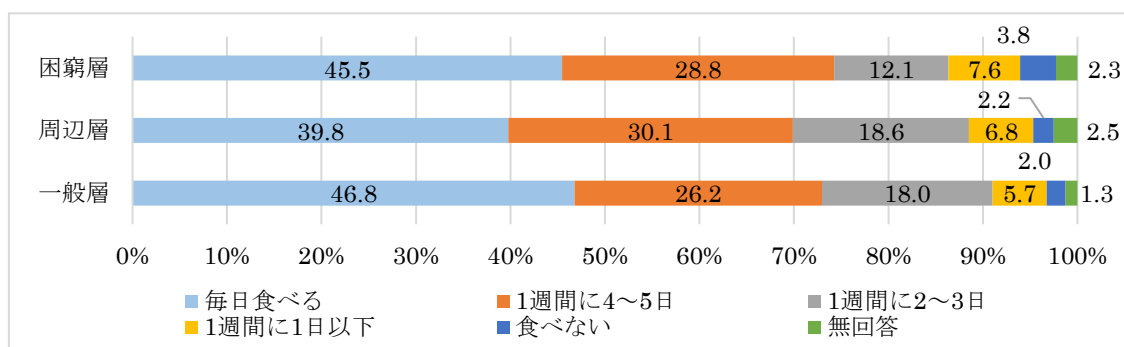


図表 3-4-28 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(中学2年生):生活困難度別(X)

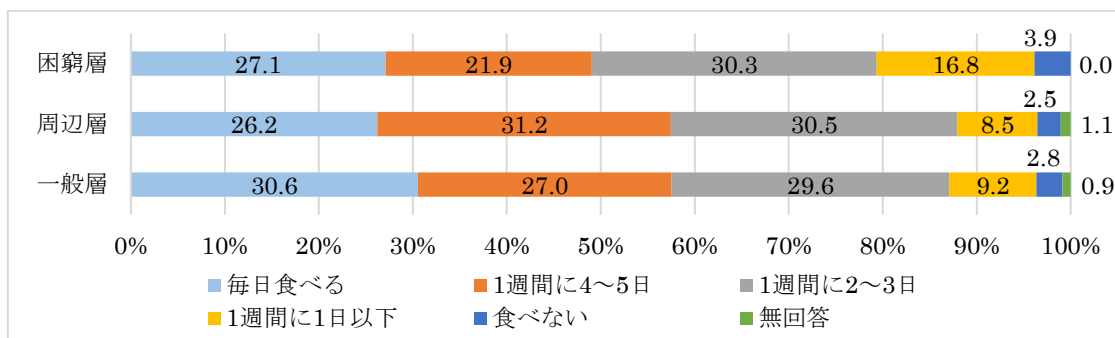


生活困難度別に「お菓子」の摂取状況を見たところ、生活困難度別に小学5年生では、生活困難度によって「お菓子」を食べる頻度に有意な差はなかった。中学2年生では、生活困難度によって「お菓子」を食べる頻度に有意な差があり、「毎日食べる」「1週間に4～5日」または「1週間に2～3回」と回答した割合は、一般層が86.9%、周辺層は87.9%、困窮層では79.3%で困窮層が目立って低い。

図表 3-4-29 お菓子の摂取状況(小学5年生):生活困難度別(X)



図表 3-4-30 お菓子の摂取状況(中学2年生):生活困難度別(*)

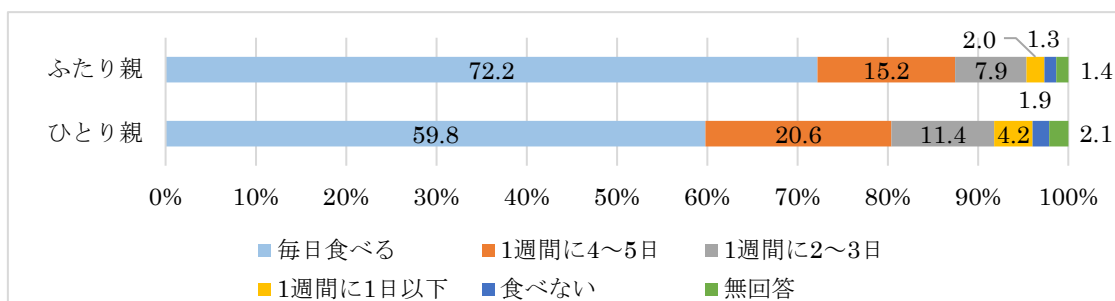


(4)食品群別の摂取状況 世帯タイプ別

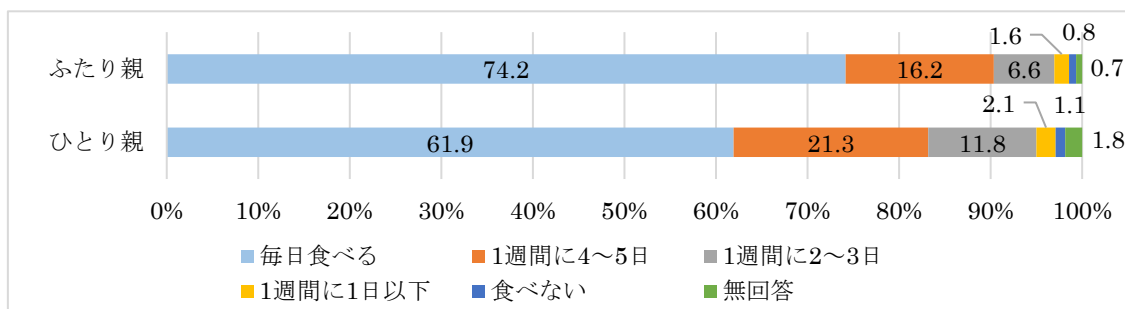
食品群別の摂取状況について、世帯タイプ別の結果を、「野菜」「くだもの」「肉や魚」「カップめん・インスタントめん」「買ってきたおにぎり・お弁当」「お菓子」の順に見ていく。

「野菜」については、小学5年生、中学2年生ともに、ふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって「野菜」を食べる頻度に有意な差があった。ふたり親世帯では、「毎日食べる」と回答した割合が72.2%であったのに対し、ひとり親世帯では59.8%であり、12.4ポイント低かった。中学2年生では、ふたり親世帯では、「毎日食べる」と回答した割合が74.2%であったのに対し、ひとり親世帯では61.9%であり、12.3ポイント低かった。

図表 3-4-31 野菜の摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)

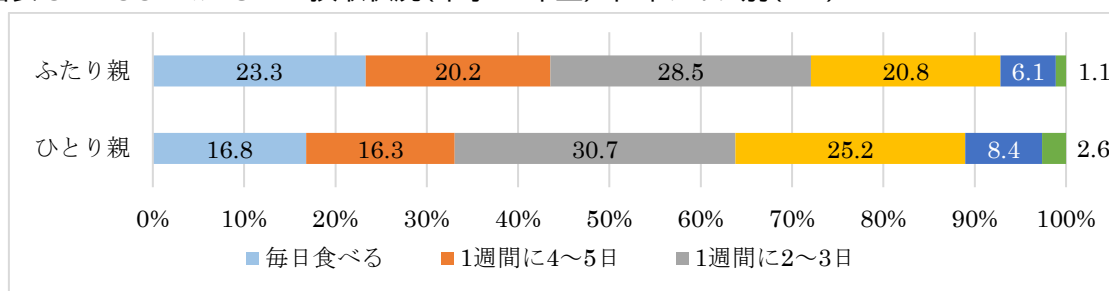


図表 3-4-32 野菜の摂取状況(中学2年生):世帯タイプ別(***)



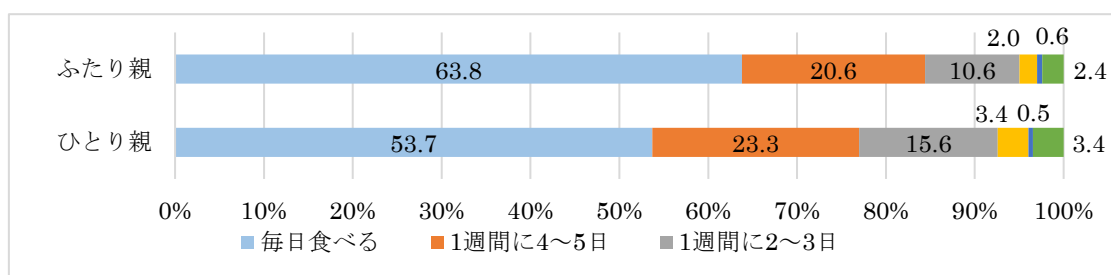
くだものについて世帯タイプ別に見たところ、小学 5 年生では統計的に有意な差は見られなかった。中学 2 年生では、ふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって「くだもの」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。ふたり親世帯では、「毎日食べる」と回答した割合が 23.3%であったのに対し、ひとり親世帯では 16.8%であり、6.5 ポイント低かった。

図表 3-4-33 くだもの摂取状況(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)

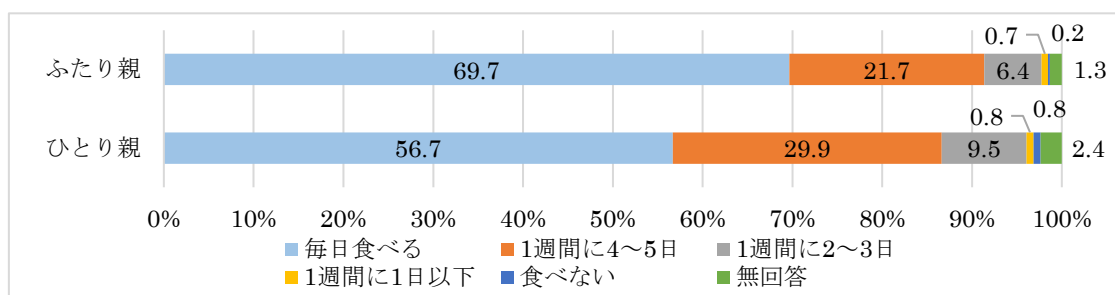


「肉や魚」について世帯タイプ別に見たところ、小学 5 年生、中学 2 年生ともに、ふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって「肉や魚」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。小学 5 年生では、ふたり親世帯では、「毎日食べる」と回答した割合が 63.8%であったのに対し、ひとり親世帯では 53.7%であり、10.1 ポイント低かった。中学 2 年生では、ふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって「肉や魚」を食べる頻度に有意な差があり、「毎日食べる」と回答した割合について、ふたり親世帯では 69.7%であったのに対し、ひとり親世帯では 56.7%であり、13.0 ポイント低かった。

図表 3-4-34 肉や魚の摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)

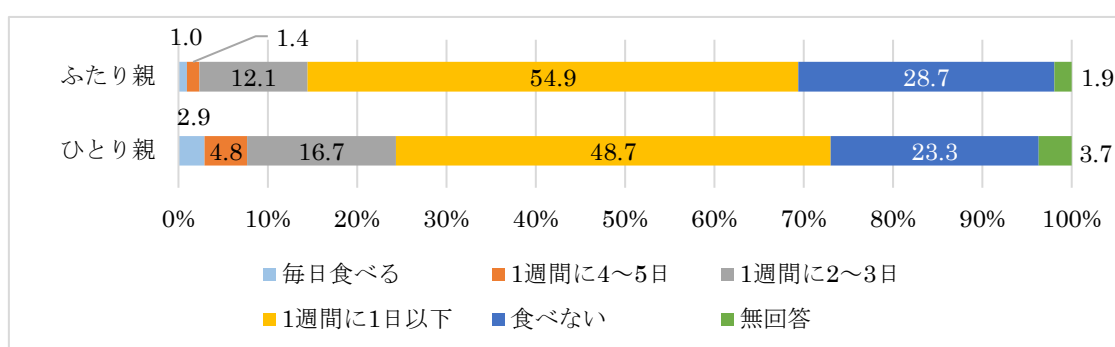


図表 3-4-35 肉や魚の摂取状況(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)

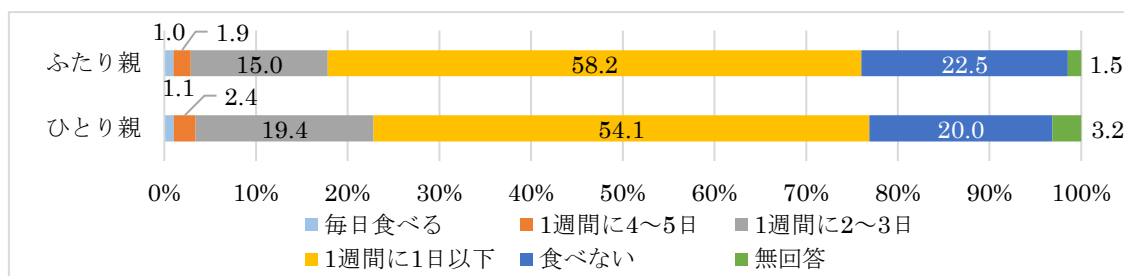


「カップめん・インスタントめん」について世帯タイプ別に見たところ、小学5年生、中学2年生ともにふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって、食べる頻度に統計的に有意な差が見られた。小学5年生では、「毎日食べる」「1週間に4~5日」「1週間に2~3日」と回答した割合が、ひとり親世帯では24.4%、ふたり親世帯では14.5%であり、ひとり親世帯の方が9.9ポイント高かった。中学2年生では、「毎日食べる」「1週間に4~5日」「1週間に2~3日」と回答した割合が、ひとり親世帯が22.9%、ふたり親世帯が17.9%であり、ひとり親世帯の方が5.0ポイント高かった。

図表 3-4-36 カップめん・インスタントめんの摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)



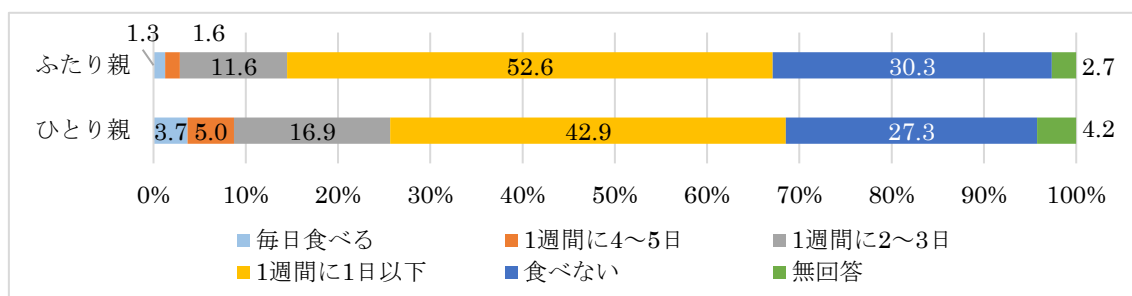
図表 3-4-37 カップめん・インスタントめんの摂取状況(中学2年生):世帯タイプ別(**)



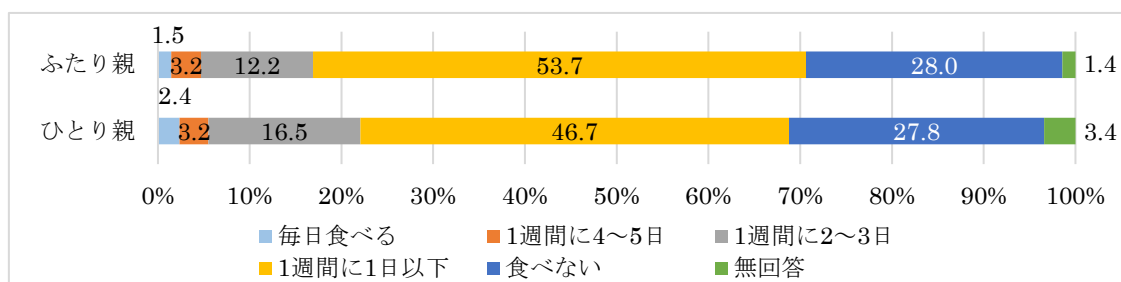
「買ってきたおにぎり・お弁当」について、世帯タイプ別に見たところ、小学5年生、中学2年生ともに、ふたり親世帯であるかひとり親世帯であるかによって「買ってきたおにぎり・お弁当」を食べる頻度に統計的に有意な差があった。

小学5年生では、「毎日食べる」「1週間に4~5日」「1週間に2~3日」と回答した割合が、ひとり親世帯では25.6%、ふたり親世帯では14.5%となっており、ひとり親世帯の方が11.1ポイント高かった。中学2年生では「毎日食べる」「1週間に4~5日」「1週間に2~3日」と回答した割合が、ひとり親世帯では22.1%、ふたり親世帯16.9%となっており、ひとり親世帯の方が5.2ポイント高かった。

図表 3-4-38 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)

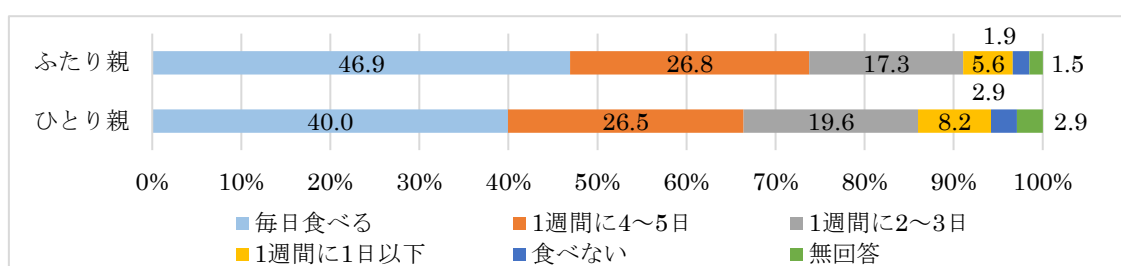


図表 3-4-39 買ってきたおにぎり・お弁当の摂取状況(中学2年生):世帯タイプ別(***)

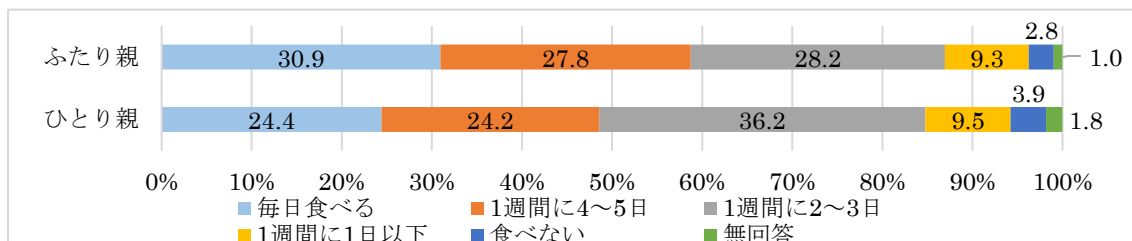


「お菓子」について、世帯タイプ別に見たところ、小学5年生、中学2年生ともに統計的に有意な差があった。小学5年生では、ふたり親世帯では、「毎日食べる」と回答した割合が46.9%であったのに対し、ひとり親世帯では40.0%であり、6.9ポイント低かった。中学2年生では、「毎日食べる」と回答した割合について、一般層では30.9%であったのに対し、困窮層では24.4%であり、6.5ポイント低かった。

図表 3-4-40 お菓子の摂取状況(小学5年生):世帯タイプ別(***)



図表 3-4-41 お菓子の摂取状況(中学2年生):世帯タイプ別(***)



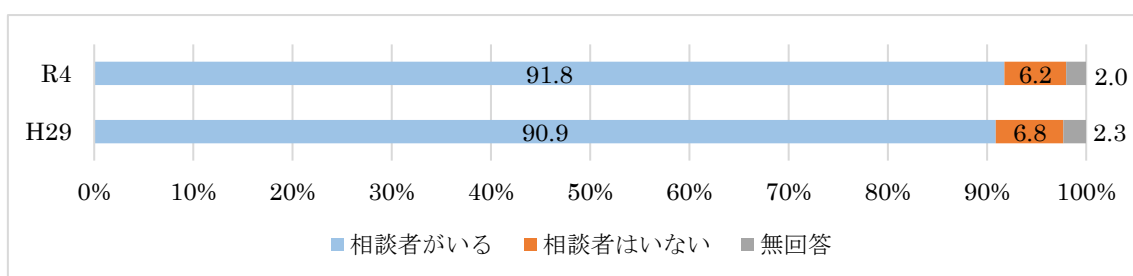
5. 親と子の孤立

(1) 親の孤立(相談相手の有無)

本節では、親と子どもの孤立の状況を見ていく。まず、親の孤立を表す指標として、「相談相手がない親」に着目する。本調査では、保護者票において、問 42「あなたは、本当に困ったときや悩みがあるとき、相談できる人(家族、友人、親せき、同僚など)がいますか。」と聞いている。この回答から親の孤立の傾向を探る。なお分析は、回答者を母親と父親に限って実施している。

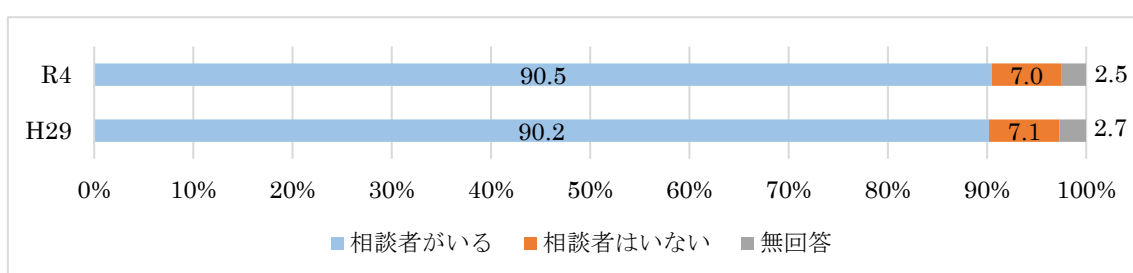
全体で見ると、小学 5 年生の親の 91.8%、中学 2 年生の 90.5%は、「相談相手がいる」と答えており、相談相手が欠如している状況ではない。しかし、小学 5 年生の親では 6.2%、中学 2 年生の保護者では 7.0%が「相談できる人がいない」と回答している。前回調査(H29)では、小学 5 年生の保護者の 90.9%、中学 2 年生の 90.2%は、「相談相手がいる」と答えており、「相談できる人がいない」と回答した保護者は、小学 5 年生では 6.8%、中学 2 年生では 7.1%であった。

図表 3-5-1 親の相談相手の有無(小学 5 年生):全体



※回答者を母親と父親に限って分析を実施。R4 年度(n=3,435)。

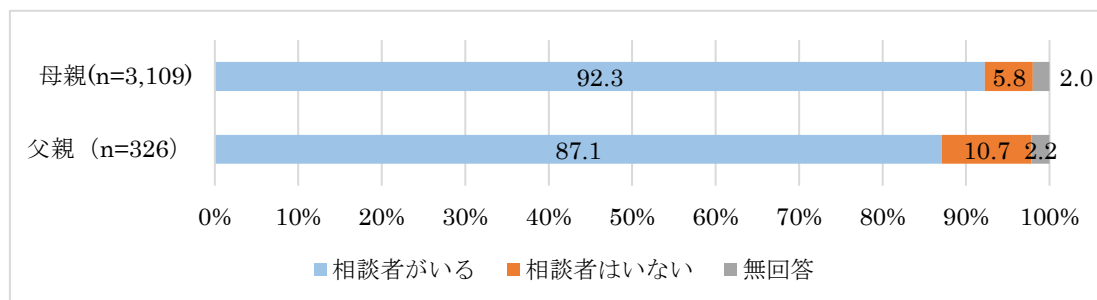
図表 3-5-2 親の相談相手の有無(中学 2 年生):全体



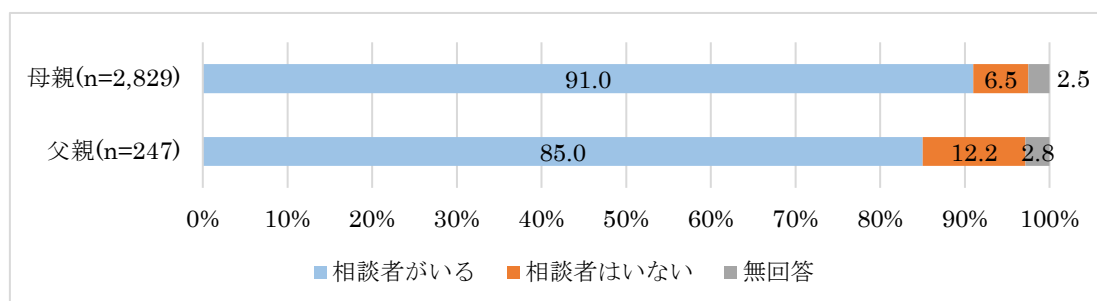
※回答者を母親と父親に限って分析を実施。R4 年度(n=3,076)。

父親と母親を別に集計すると、小学 5 年生、中学 2 年生ともに父親のほうが母親に比べて「相談者はいない」とした割合が高かった。

図表 3-5-3 親の相談相手の有無(小学 5 年生): 母親、父親別



図表 3-5-4 親の相談相手の有無(中学 5 年生): 母親、父親別

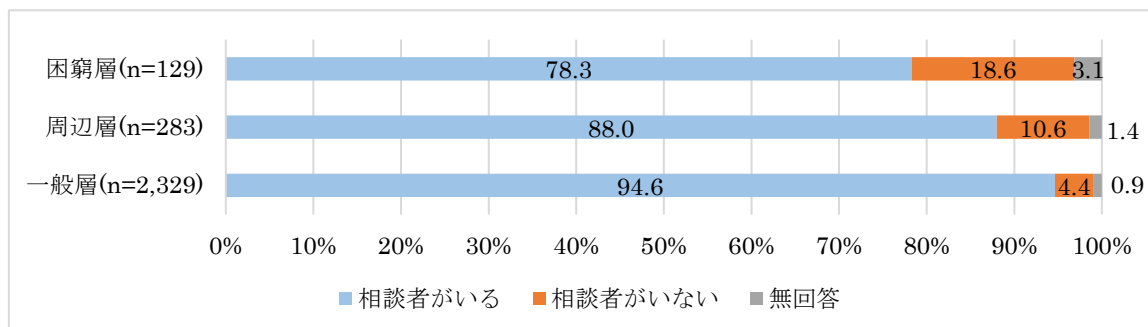


親の相談相手の有無を、生活困難度別で見たとところ、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生では、「相談できる人がいない」と答えた割合が困窮層では 18.6%となっており、一般層の 4.4%に対して、14.2 ポイント高い。周辺層も 10.6%となっており、一般層より 6.2 ポイント高い。

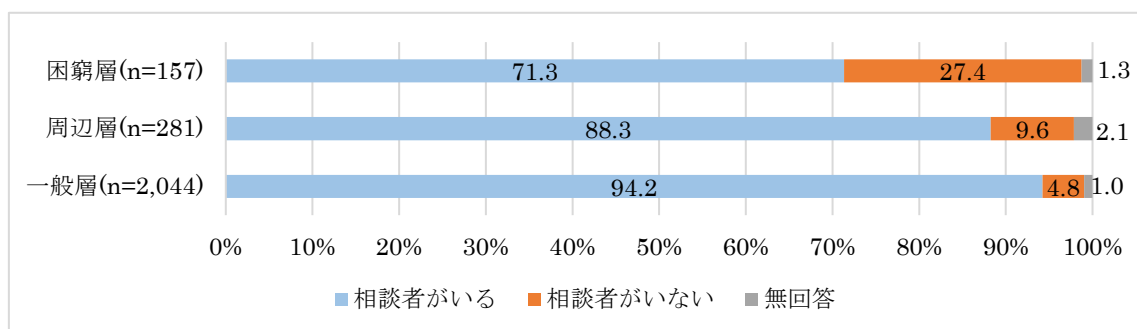
中学 2 年生においても同様の傾向がみられ、「相談できる人がいない」と答えた割合が困窮層では 27.4%、周辺層では 9.6%、一般層では 4.8%となっている。困窮層においては、約 4 人に 1 人の親は、相談相手がない状況である。

図表 3-5-5 親の相談相手の有無(小学 5 年生):生活困難度別 (***)



※回答者を母親と父親に限って分析を実施。

図表 3-5-6 親の相談相手の有無(中学 2 年生):生活困難度別(***)



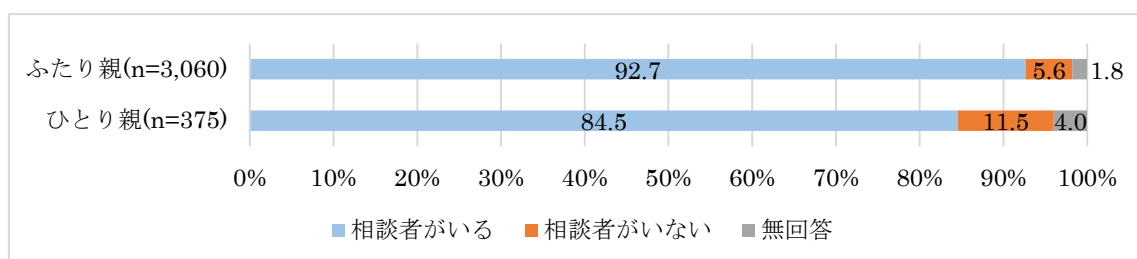
※回答者を母親と父親に限って分析を実施。

世帯タイプ別でも、小学 5 年生、中学 2 年生のいずれも統計的に有意な差が見られた。

小学 5 年生では、「相談できる人がいない」と答えた割合が、ふたり親世帯では 5.6%であるが、ひとり親世帯では 11.5%であり、ふたり親世帯より 5.9 ポイント高い。

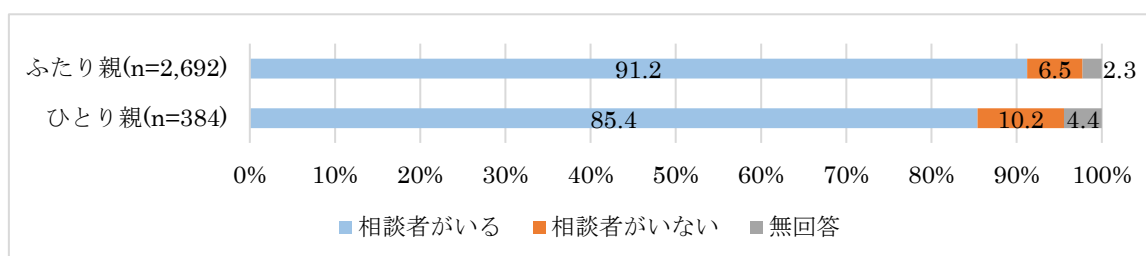
中学 2 年生においても、「相談できる人がいない」と答えた割合は、ふたり親世帯では 6.5%であるが、ひとり親世帯では 10.2%であり、ふたり親世帯より 3.7 ポイント高くなっている。

図表 3-5-7 親の相談相手の有無(小学 5 年生):世帯タイプ別(***)



※回答者を母親と父親に限って分析を実施。

図表 3-5-8 親の相談相手の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(***)



※回答者を母親と父親に限って分析を実施。

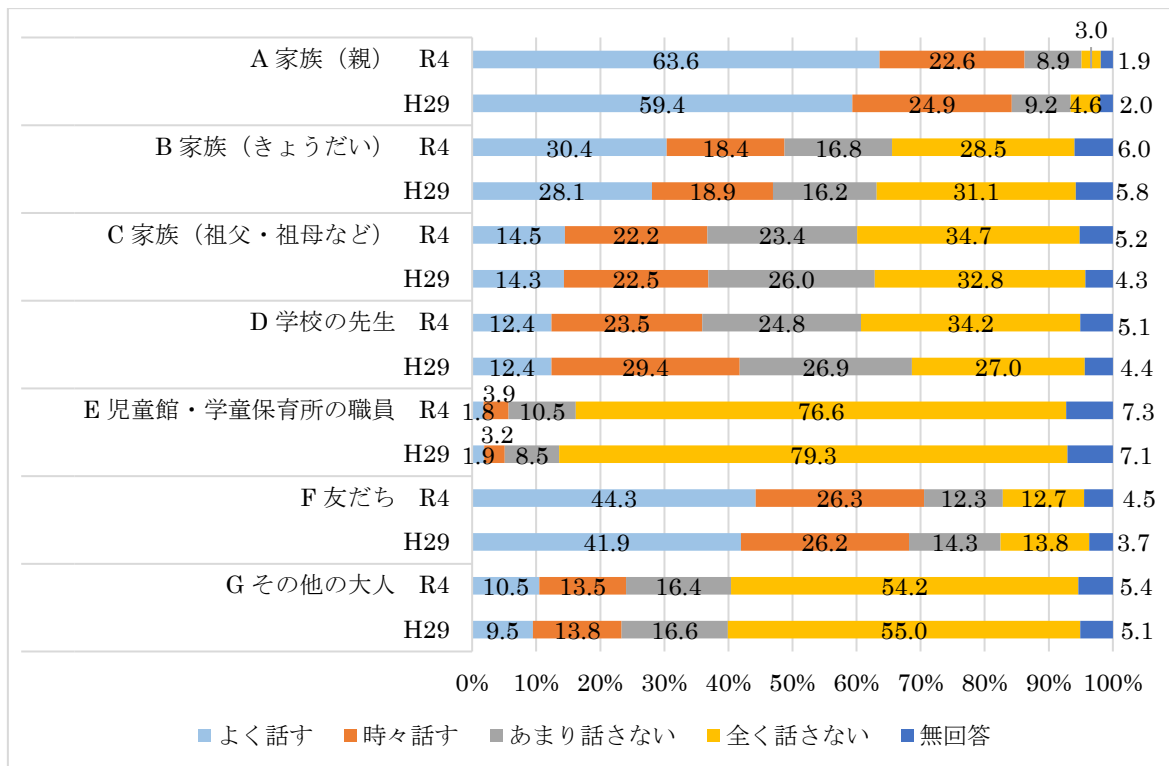
(2)子どもの会話

次に、子どもの会話の状況から、子どもの孤立の状況を見る。子ども票においては、問 13「あなたはふだん、困っていることや悩みごと、楽しいことや悲しいことを、ほかの人にどれくらい話しますか。『1 よく話す』から『4 全く話さない』のうち、もっとも近いものに○をつけてください。電話、メール、LINE も『話した』と考えて答えてください。」と、子どもの会話の相手ごとの会話の頻度を聞いている。回答の集計結果は以下のとおりである。

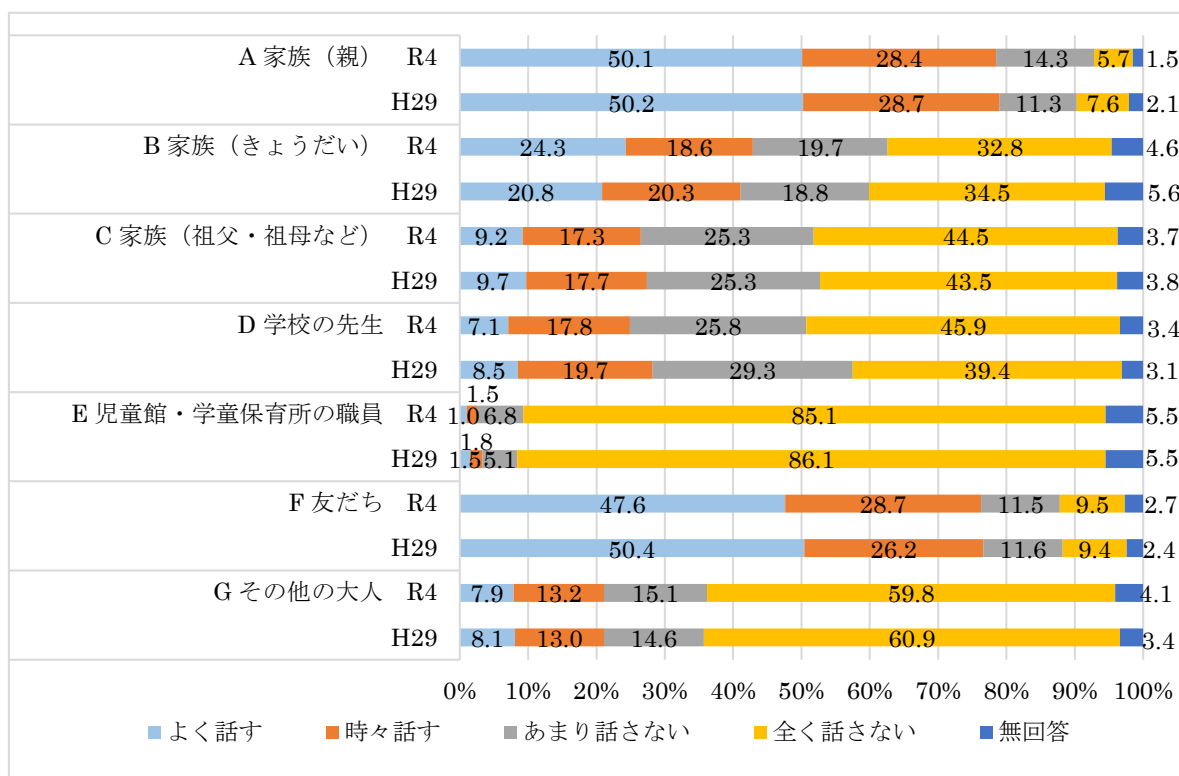
小学 5 年生では「A 家族(親)」との会話が一番多く、「よく話す」と「時々話す」を合わせて、86.2%となっている。次に高いのが「B 友だち」でこれも「よく話す」と「時々話す」を合わせて、70.6%となっている。家族や、友だちを除いて、会話が多いのは「D 学校の先生」で、「よく話す」と「時々話す」を合わせて、35.9%となっている。前回調査(H29)では、「よく話す」と「時々話す」を合わせると「A 家族(親)」は 84.3%、「B 友だち」は 68.1%、「D 学校の先生」は 41.8%であった。

中学 2 年生でも「A 家族(親)」への会話が一番多く、「よく話す」と「時々話す」を合わせて、78.5%となっている。また、「B 友だち」の会話が多くなり、「よく話す」と「時々話す」を合わせて 76.3%となっている。その一方で「D 学校の先生」への会話の頻度が下がり、「よく話す」と「時々話す」を合わせて 24.9%となっている。前回調査(H29)では、「よく話す」と「時々話す」を合わせると「A 家族(親)」は 78.9%、「B 友だち」は 76.6%、「D 学校の先生」は 28.2%であった。

図表 3-5-9 子どもの会話の状況(小学 5 年生):全体



図表 3-5-10 子どもの会話の状況(中学 2 年生):全体

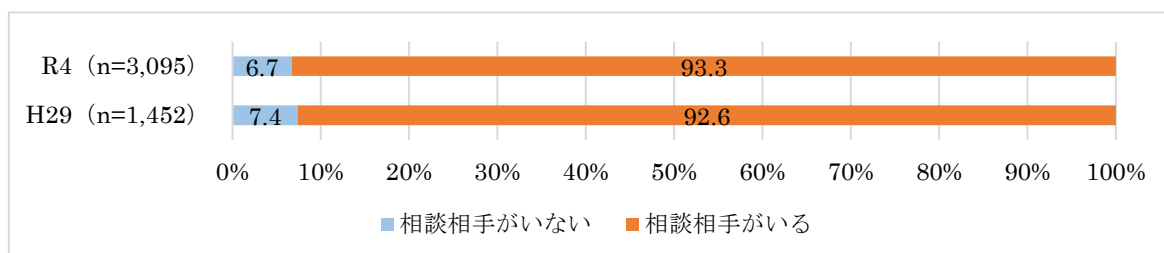


(3)子どもの孤立(相談相手の有無)

次に、子どもの孤立について見ていく。子どもの孤立を表す指標として、子どもの相手ごとの会話頻度に着目する。すべての項目に対して「あまり話さない」もしくは「ぜんぜん話さない」と回答した子どもを「相談相手がない」とみなし、いずれか一つの項目でも「よく話す」もしくは「時々話す」と回答した子どもを「相談相手がいる」として分析した。

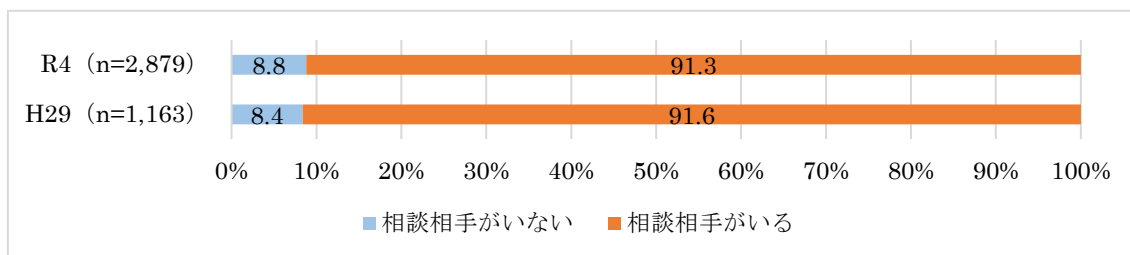
その結果、小学 5 年生の 6.7%、中学 2 年生の 8.8%が、相談相手がない状況となっている。前回調査(H29)では小学 5 年生の 7.4%、中学 2 年生の 8.4%が、相談相手がない状況となっていた。

図表 3-5-11 子どもの相談相手の有無(小学 5 年生):全体



※ただし、設問中、いずれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

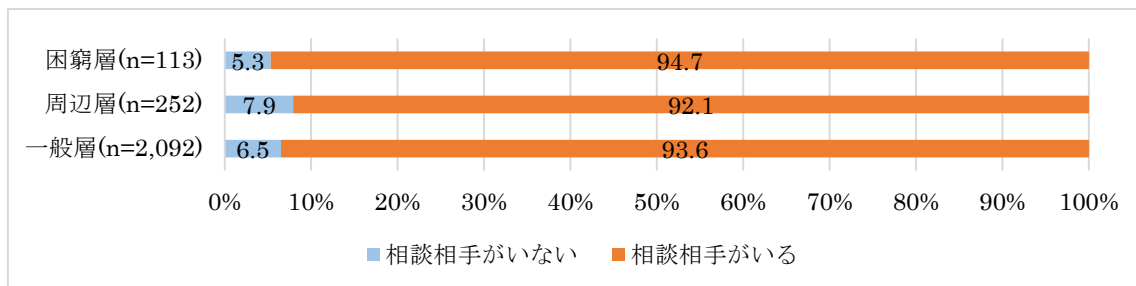
図表 3-5-12 子どもの相談相手の有無(中学 2 年生):全体



※ただし、設問中、いずれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

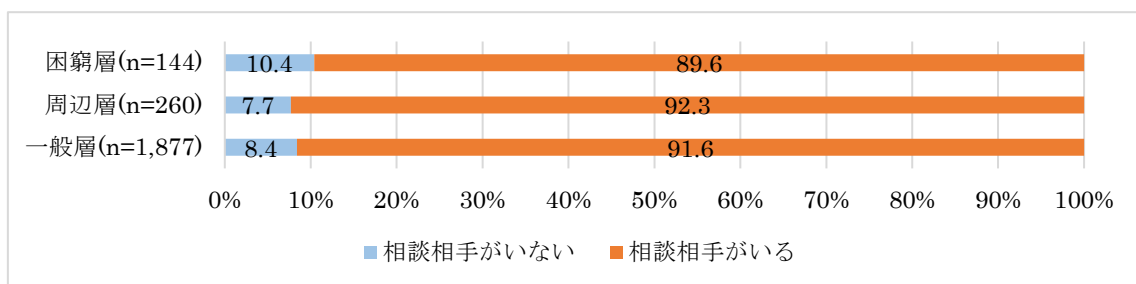
相談相手がない子どもの割合を生活困難度別で見ると、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差は見られなかった。

図表 3-5-13 子どもの相談相手の有無(小学 5 年生):生活困難度別(X)



※ただし、設問中、いずれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

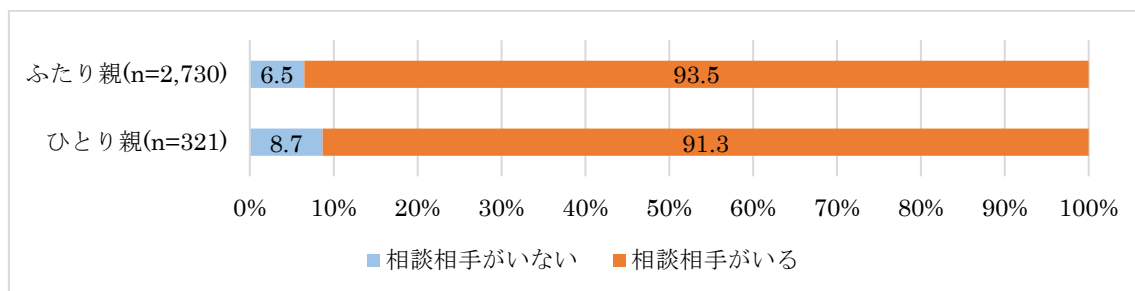
図表 3-5-14 子どもの相談相手の有無(中学 2 年生):生活困難度別(X)



※ただし、設問中、いずれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

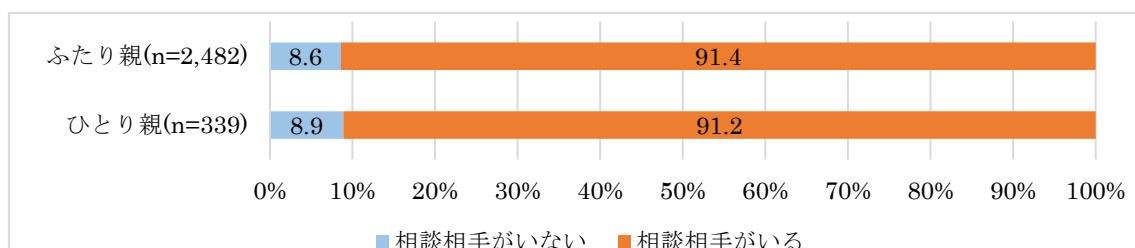
世帯タイプ別では、小学 5 年生、中学 2 年生いずれも統計的に有意な差は見られなかった。

図表 3-5-15 子どもの相談相手の有無(小学 5 年生):世帯タイプ別(X)



※ただし、設問中、どれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

図表 3-5-16 子どもの相談相手の有無(中学 2 年生):世帯タイプ別(X)



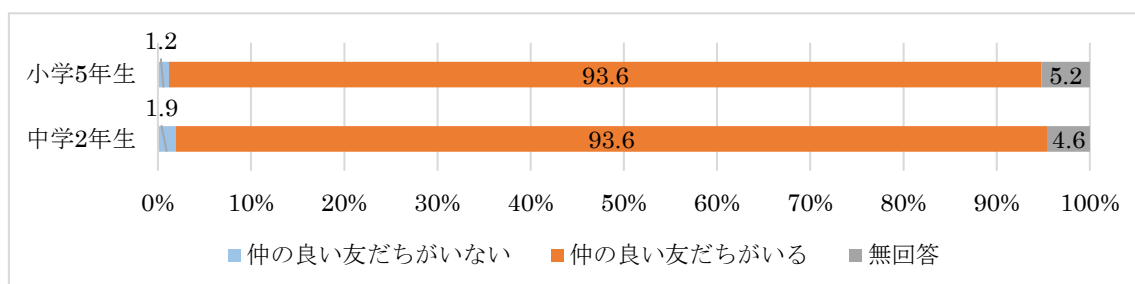
※ただし、設問中、どれか一つでも「無回答」があったものは、集計対象外とした。

(4)とくに仲の良い友だちがいない割合

次に、子ども票の間 4「あなたが一番仲が良い友だちは、どのような友だちですか。」の設問を利用して、とくに仲の良い友だちの有無を集計した。回答の選択肢は、単一回答で「学校の友だち」「学校はいっしょではないけれども、近所に住んでいる友だち」「スポーツチームやクラブの友だち」「塾の友だち」「習い事の友だち」「その他の友だち」「とくに仲の良い友だちはいない」である。この中から「とくに仲の良い友だちはいない」と回答した以外は、とくに仲の良い友だちがいるとした。集計結果は以下のとおりである。

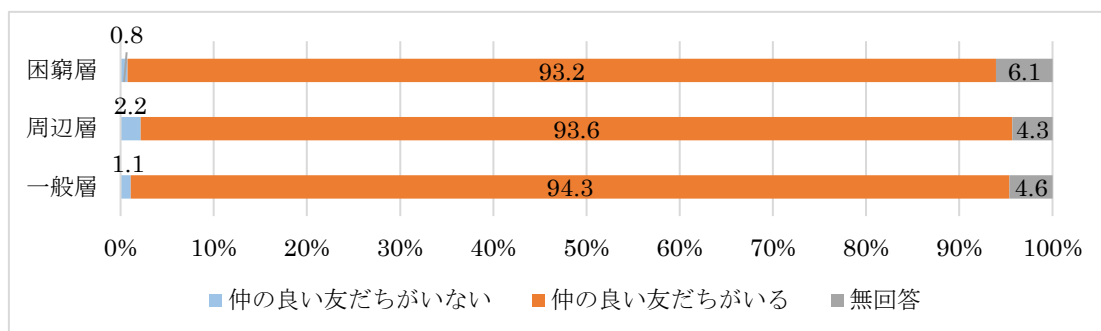
小学 5 年生では 1.2%、中学 2 年生では 1.9%が「とくに仲の良い友だちはいない」と回答している。

図表 3-5-17 仲の良い友だちの有無(小学 5 年生、中学 2 年生) :全体

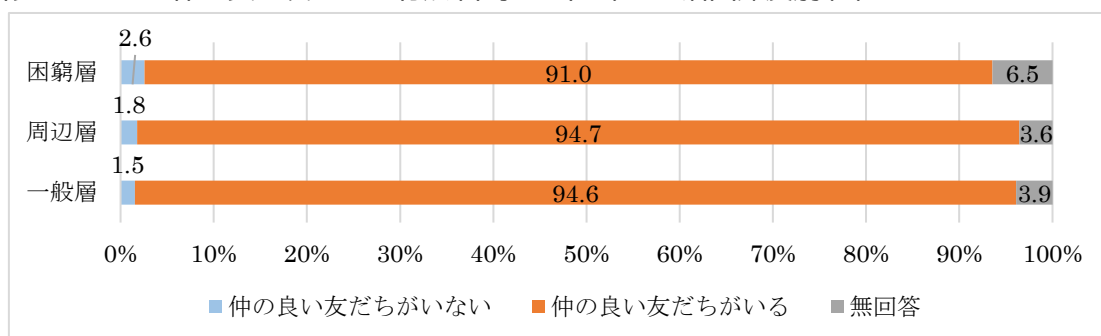


生活困難度別、世帯タイプ別に結果を見たところ、小学 5 年生、中学 2 年生のいずれにおいても統計的に有意な差は見られなかった。

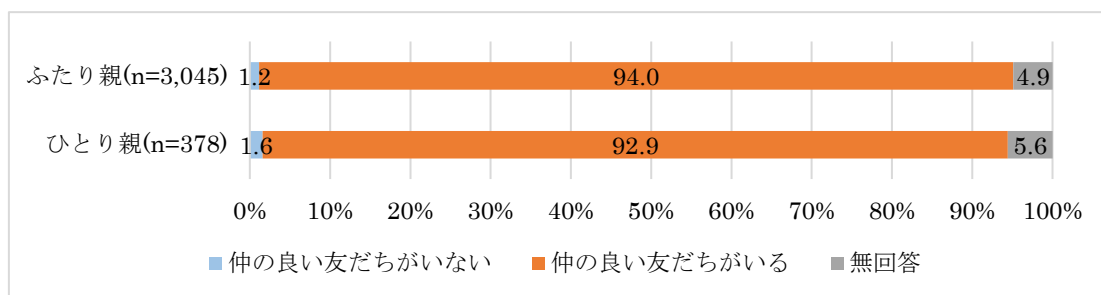
図表 3-5-18 仲の良い友だちの有無(小学 5 年生) :生活困難度別(X)



図表 3-5-19 仲の良い友だちの有無(中学 2 年生) :生活困難度別(X)



図表 3-5-20 仲の良い友だちの有無(小学 5 年生) :世帯タイプ別(X)



図表 3-5-21 仲の良い友だちの有無(中学 2 年生) :世帯タイプ別(X)

